

エミル心霊探偵事務所

第一話 呪魔と少年

プロローグ

どこまでも広がる暗黒の次元に、怒りというくびきにつながれた死者たちが、さまざま
な姿で浮かんでいた。地獄という世界があるなら、間違いなく、ここはその一つかもしれ
ない。そうでなければ、煉獄というのがここなのか。

死者たちの顔は怒りと恨みに醜くゆがんでいる。

少年は自分の怒りを赤黒い息のようにして吐き出した。すると、天と地の間に宙づりに
なったその世界をあてどなくさまよう救われぬ死者たちは、いっせいに少年のほうを向き、
そして腹を空かした動物のようにゆっくりと向かってきた。

少年は自分が、とある存在に守られていることを知っていたし、死者たちに危害を与えられない方法も知っていた。

少年を守ってやるというその存在は、自分自身のことをライと呼んだ。

「おまえの怒りは、わたしのごちそうだ」と、ときに巨大な蛇のようなすがたを、ときに陶器のビーズの飾りを首に巻き、麻のワンピースのような衣服をまとう、少女のようなすがたをとるそのものは言う。何千年も前のエジプトに自分は生きていたとかつてライは少年に語ったことがあったが、なぜ少年のもとに現れ、なぜ憑依したのか、いまだその訳を聞いたことはなかった。

「おまえをはずかしめた者たちに、おまえを愛のない孤独の牢屋に閉じ込めた者たちに、いよいよおまえが復讐するそのときは、わたしはおまえにわたしの魔の力を貸し与えよう」

ライは少年に、いつもそんなふう言い続けてきた。

そして今、少年は待ちに待った復讐の時の始まりを自分自身に宣言した。

幼いころからつながれていた苦痛だらけの牢獄から自由の身になり、ライの魔力を借り、この憎悪の爆薬に今こそ点火するのだ。

.....

少年は異世界への短いトリップからこの世に戻ると、ゆっくりと目を開けた。

クルマの中にたちこめる、復讐の手足となる年上の男たちのふかすタバコの煙がチクチクと目にしみ、少年はむせそうになった。

窓からは都会の夜の光たちが、生き物の群れのように背後に向かって次から次へと流れ、飛びすぎる。

クルマはいまどのあたりを走っているのだろう……。

「カミさん。きょうの生けにえはもうおしまいっすか？ それとも、まだ、いきますう？ だれにしますう？」

助手席の男が言った。首のうしろのタトゥーの狐が生きているかのように動いた。

「だれでもいい」

少年はぶっさばうに答えると、左目を隠すように垂れた長い前髪を指ですくって耳にかけた。

1章 事件のはじまり

エミル心霊探偵事務所の記念すべき第一号の客二人は、インターホンが見つからず、音開きの頑丈そうな木製のドアのまわりを、ボタンのようなものはないだろうかときよろきよろと探し回った。

大きなお屋敷ばかりの渋谷区大山町のこのあたりでも、ひととき大きな白い2階建ての

建物だった。小学校から知っているのに、エミルの家にやって来るのはこれが初めてだった兄は、エミルの家はものすごいお金持ちなのかとうらやましく思った。

その中三の兄が、身長が自分より10センチ低い小六の弟を見おろして言った。

「どうする？ ドア、開けちゃう？」

「それはまずいでしょ」

そう言うなり弟は「こんにちわあ！！」と大きな声を出したが、ドアの向こうからはしんと静けさが返ってくるばかりだった。

すると兄の肩を背後から誰かがトントンとたたいた。

「わっ！！」と兄が驚いて振り向くと、ヒゲもじゃで黒縁の大きなメガネを掛けた大学生らしき男子が目の前に立っていた。

弟は「こんにちは」とおじぎした。

「きみたち、このうちにご用？」とひげもじゃ男子が少しなまったイントネーションで言った。

「はい、エミルさんに用があるんです」と弟が言うと、兄がジーンズのお尻のポケットに手をつっこんで一枚の紙を取り出し、広げて見せた。

「へえ、『エミル心霊探偵事務所』のお客様か。まずは、お入りよ」

そういうと、ひげもじゃ男子は兄と弟をかき分け、重そうな扉を開けると、「どうぞこちらへ」と右手でぐいっと家の中を指し示した。

広い玄関フロアがあり、そこから奥に向かって、黒と白のリノリウムのタイルがチェッカー柄に敷き詰められた廊下が長く延びている。壁と天井は真っ白に塗られ、廊下の左側に並ぶ窓からはまろやかな光があたりに暖かそうに溶け出していた。

まるでホテルか病院のようだと思つた。

「ここで靴を脱いでこの下駄箱にあるスリッパにかえて。エミル心霊探偵事務所はこの廊下の奥のほうだ。ドアに『ESTJ』と書いてあるよ」

そう言つて黒縁メガネにヒゲもじゃ男子はさっさと家の中に入っていくと、廊下の途中で右に曲がつて消えてしまった。背中のリュックが緑色だったこともあって、少し猫背でひよろ長い首の後ろ姿が亀のようだと思つた。

「エミルのお兄さんかな？」と弟がポツンと言うと、「顔がぜんぜん似てないし。しかも、エミルはひとりっ子」と兄が答えた。

兄弟は、学校のロッカーに似た大きな下駄箱からスリッパを抜き出してはきかえた。

玄関のすぐ横は広い応接間のようになっていた。

クリーム色の大きなソファが三つ、コの字形に並べられ、その奥はベランダになっているらしく、大きなガラス戸の向こう側には、まるでそこから大きな森がずっと広がってでもいるかのようなうっそうとした庭が見えた。家の外からは想像もできなかったその広大な緑色の世界に、弟は魔術師が出現させたイリュージョンみたいだと思った。

兄弟は天井の高い廊下を奥へと進んでいった。床はピカピカに磨かれている。廊下にそって大きなドアや小さなドアが並び、途中には2階までの吹き抜けがあり、そこには踊り場つきの立派で大きな階段があつて、あらためてすごい家だと思った。

エミルの部屋はすぐにわかった。

ドアに「E」「S」「T」「J」と切り抜いた白いプラスチック板のアルファベットが貼つてあつた。きつと材料は下敷きだ。

「なんの略かなあ？」と弟は兄の顔をうかがつた。

「Eはエミルだろ。Sはサイキックだよ。で、Tはテクノロジーかな。Jは……えーと、Jは……ジャパン？」

「サイキックっていい線かも知れないけど、確かスペルはP、S、Y、C、H、I、Cで、

頭文字はSではなく、Pだよ」

「じゃあ、なんの略だよ。おまえにはわかるのかよ」と兄はブンとふくれつつらをした。

「かたんだよ。単純に、Sは心霊、Tは探偵、Jは事務所だよ」

仏頂面のまま兄はドアをノックした。

コンコンコン。コンコンコン。

シーン……。

もう一度ノックをする。

コンコンコン。コンコンコン。

すると「ハックションっ!!」と女の子の大きくしゃみがドアの向こう側から聞こえてきて、続けて「ちよっと待って!! いま開ける」という声がして、また「クションっ!!」とくしゃみの音がした。

兄のほうが「花粉症かな」と言い終わらぬうちに、ドアがギーッと開いて、あののっぽのエミルが制服を着たまま仁王立ちしていた。

「やあ」と兄が言うと、「やあ」とエミルも答えた。

「花粉症?」と兄が聞くと、「入って」とエミルは背中を見せて戻っていく。

「おじゃまします」と弟が言い、「学校から帰ってきたばかり？」と兄が言い、廊下と同じで壁も天井も真っ白な部屋に入ると、二人はもじもじとあたりを見まわした。

「ふつうに帰ってきたんだけど、寝てた……。座って」とエミルは二人掛けのブルーのソファを指さした。

兄弟はちよつと堅めのソファに腰をおろすと、あらためてエミルの部屋をみまわした。

ドアは兄弟から見て左側奥。右側には人が出入りできる背の高い押し開け型のフランス窓があり、その向こう側には木々が茂るあの広い庭がある。

目の前にはエミルの机があり、その右隣、つまり庭側には水色のカバーに包まれたエミルのベッドがあった。

「広い部屋だね」と兄は、4畳半の自分の部屋を思い出しながらうらやましそうな声を出した。

エミルの机の上にはいくつかの写真立てやペン立てや積まれた本と一緒に i M a c がデーンと置かれ、その後ろの壁には見たこともない模様や記号が書かれた紙が何枚も貼っている。紺色のスクールバッグが足もとに転がっていた。

ベッドの脇の小さなテーブルの上に、色鮮やかな像が置いてあった。どこかの博物館で

見た古代エジプトの像みたいだと兄は思った。

「あれ……クレオパトラ？」

「ううん。ハトホル。むかしのエジプトの女神」

「ハト……？」

「ハトホル。死者の世界とこの世をつなぐとも言われる神様よ」

「 Emil にピツタリだね」と兄が言うと、Emil は眉を寄せた。兄はすぐに後悔した。

「コホンとせきばらいをした兄は、さっきのひげもじゃ男子に見せたのと同じ紙を広げて、
「これ見て来たんだけど」と Emil に見せた。」

Emil は「ああ」と言って椅子に座ったままパツと足を組みかえた。ひるがえる制服の
スカートの裾が兄にはドキッとしてまぶしく感じた。

「学校のコピー室で見つけたの？ 紙を間違えて捨てたやつか。ゴミ、あさったの？」

兄の顔は見るまに真っ赤になると、「ゴミ、あさんねえよ。目に入ったから拾ったまでだ」
とボンボンと抗議した。

弟はさっきから無言のまま、初めて会った Emil を食い入るように見つめていた。

無理もない。まるで爆発したようなくなりんくりんの髪の毛は黒ではなく金色に近い栗色

だ。ひょろりと長く伸びた手とスカートから突き出た長い足。身長はきつと、170cmと少しある兄と同じかそれ以上だろうと、まだ160cmの弟は推測した。

そして、笑うと耳元まで裂けるんじゃないかと思うほど大きな口。小さく尖った鼻。そして、賢こそうなアーモンド型の奥二重の目はほんの少し青みがかっている。

弟はたちまち魅了された。

「オレにご依頼の件とは？」

そうエミルが言った瞬間、「オレ」という単語にはじかれたように弟の目は兄の目を探した。兄はエミルに気づかれないように小さくウィンクした。「いま、それを聞くな。あとで教えるから」と言う意味だと弟はすぐに了解した。

兄はそして深呼吸を1回した。

「安田のことなんだ。あいつ、ずっと休んでる。エミルはクラスが違うから知らないと思うけど、もう1カ月くらい」

「で？」

「おとつい、オレ、安田の家に行ってみた」

「安田と仲いいの？」

「軽音部の仲間だし」

「バンドやってたんだっけ？」

「……ヘタだけど」

「そりゃそうだろうね」

「……で、安田んちに行ってピンポンしたけど、誰も出ない。あきらめて帰ろうとしたら、庭のほうで安田がなんかわめいてんのが聞こえたんだ」

エミルはなぜか兄のほうではなく、弟のほうを見つめていた。

まるで視線が赤外線を発しているみたいに、弟の頬はだんだん熱くなった。

エミルは兄の言葉をさえぎってこう言った。

「高村の弟？ 何年生？」

弟は自分の心臓が胃の中にごろんと落ちたような気がした。

話の腰を折られた兄も「だ」の口の形のままで。

「ろ、6年生です」

「キミの頭のとっぺん、ユニークだね」

弟はさらに頬を熱くして、両手の指をクシにして、わざとツンツンにしていたショート

の髪の毛をゴシゴシと平らにならした。

兄は一回ツバを飲み込んでから、話を再開した。

春の日差しの幾筋かがレーザー光線のように窓から射しこむと、毛を刈り忘れた羊の頭のような、エミルのくりんくりんの髪の毛に、シューッと吸い込まれていった。

兄の話はこうだった。

2年生の3学期から安田はずっと元気がなかった。体調が悪いと言っては休むことが多いくなり、バンドの練習にもほとんど出ず、ついに3年生に進級した4月からパタリと学校に来なくなつた。

携帯にかけても通じない。

担任に聞くと「病気だそうだ」としか言わない。

春休み前に安田に貸したつきりのフェンダーのベースギターが心配だということもあり、ゴールデンウィーク直前のきのう、安田の家に行ったのだという。

インターホンを押ししても返事は無かった。そのかわりにケモノのようにわめき叫ぶ安田の声が高い石塀の向こうから聞こえてきたのだ。

「ウギャオー……っっていうか、ワギャー……っっていうか、とにかく普通の声じゃないんだ。ただ、わめいてるんだ。でも、すぐに静かになった。おふくろさんか誰かが安田を庭から家の中に無理やり連れ戻したんだと思う」

エミルは細くて長い腕をくりくりんの頭のうしろで組むと、小さくため息をついてこう言った。

「オレじゃなくて、アンジェリーナに相談してみたら？」

弟が小声で兄に「アンジェリーナってだれ？」と聞くと、兄もまた小声で「保健室の女先生のこと。日本人だけ」と教えた。

「アンジェリーナんちに行こう」とエミルが立ち上がった。

「うえっ、今から？ 家、知ってるの？」

「うん」と言うより早く、エミルは長い足を優雅な蜘蛛のように動かし、部屋を出た。兄弟があわててあとを追うと、エミルは吹き抜けの階段を上っていく。

そのときだ。弟は背中にひとの気配を感じてあわてて振り返った。視線の先で、廊下の

奥のドアがギーッと音を立てて閉まった。その直前に、弟は不気味な白髪の老婆の顔を一瞬だけ見た。やせこけた老婆は大きな青い目をらんらんと光らせ、自分をにらんでいたように思えた。

ブルブルっと体が震えた。

弟はきびすを返すと兄に追いつこうと走り出した。

兄弟はエミルのあとについて、大きな踊り場のある階段を駆け上った。手すりにこまやかなレリーフ模様が彫られている立派な階段だった。

2階にはまた左右に長い廊下が続き、エミルは左に曲がると、いくつめかのドアをノックした。

「だれ？」と女子の声がドアの向こうから聞こえた。

「ここがアンジェリーナちゃんかい？」

驚いた兄の語尾が裏返った。

「オレ」とエミルが答えると、数秒後、きしんだ音とともにドアが開いた。

エミルと同じ、女子にしてはきわめてのっぽのアンジェリーナが、学校ではいつも頭のうしろでまとめている長い髪を胸の前にまっすぐたらしこちらを見ていた。

「あ、あ、安藤先生……こんにちはあ」とまたしても語尾が裏返った。

くるりと振り向いた兄はルーズリーゼントの頭を両手でかきむしると、エミルに「どうなってんの、エミルんち……」と目をまん丸にした。

「わが家はシエアハウスなんだ」

「シエア？」

「下宿みたいなもの」とエミルは素っ気なく言い放つとアンジェリーナに「2組の安田のことだけど」と言った。

「安田か……。入る？」

「いい？」

「どうぞ」

部屋に入った兄弟は、壁一面にしつらえた書架に並ぶ大量の本に驚いて顔を見合わせた。まるで図書室に住んでるみたいだと兄弟は思った。

本の背表紙には「薔薇十字と錬金術」だの「カバラ宇宙論」だの「数秘術」だの「シュタイナー神智学」だの「グルジェフ・ワーク」だの、聞いたこともない不思議な言葉がずらずらと並んでいた。また別の一角には、脳や心理学の本が並び、また別の一角には物理

学や宇宙論などの科学の本が並んでいた。

アンジェリーナは3人をベッドの上に座らせると、自分は机の前の黒い椅子に座り、足を組んだ。

「安藤先生」の化粧を落としたアンジェリーナは、ちょっとつり上がったまなじりやまっすぐに通った鼻筋が清らかで凛々しく、モデルみたいだと兄は少しドキリとした。

それから兄は、エミルに言ったのと同じことをアンジェリーナに伝えた。

アンジェリーナは少しの間、目をつむり、沈黙した。マンガだったら「しーん……」という字が書いてあるんだろうなどと兄は思った。

弟は庭の側に面した広々とした窓に目をやった。2階にもかわからず、周囲の建物は目に入らず、ただ背高のつぼの木々の緑が見えるだけだった。

「担任の金浜先生が安田は病気だと言ったんでしょ？ 金浜先生は家庭訪問をして、安田がある病気にかかっていることを確認したの。なんの病気かは、わたしには言えない。立場があるから。ごめん」とアンジェリーナは、ちょっと厚ぼったい唇をグイッと一文字に結んだ。

「てことは」とエミルが腕組みをして兄を見た。「安田に直接会って確かめたら？」

「いや、それがですね……」と兄はまたジーンズのお尻のポケットをゴソゴソすると、もう一枚の紙を取り出した。

「これ、書き写してきたんだけど、安田からのメール。電話には出ねえんだけど、一度だけメールが来て。で、チョー意味不明で……」

兄は紙をグイッとエミルに突き出した。

エミルはしわくちやの紙をチラと見て、「キミが読む」と兄に言った。

こくんとうなずくと、兄は紙を広げて声に出して読み始める。

「4月21日。" 幻覚の中で話しかけてくるあいつの名前はきっとハヤトだ。ハヤトを探してくれ……"」

「ハヤト……？」

驚いたようにエミルがその名を繰り返した。

「誰だかわかんの？」と兄が聞いた。

エミルはあわてたように首を振ると、頭のうしろで腕を組み、目を閉じた。

兄は続けた。

「ハヤトを探してくれ。幻覚の中でハヤトは自分を殺してくれと言っている。ハヤトを

楽にさせてやってくれ。生き地獄だ。ハヤトを殺せ。頼む。ハヤトを殺せ……」

「きょうは4月26日か」とアンジェリーナ。

「ふーん」とエミルはゆっくりとイスから立ち上がった。「いずれにしても高村にもう少しくわしく様子を探ってきてもらわなくちゃ。アンジーが教えられない種類の病気なら、本人から聞くしかないでしょ」

アンジェリーナがニヤリとした。

「どういうこと？」と兄はアンジェリーナとエミルの顔を交互に見ながら言った。

エミルもアンジェリーナも「さあ」と言って首振り人形のように頭を左右に振った。

兄が「うーん」とうなって、またはや両手で頭をかきむしった。

夕陽が緑や紫やオレンジ色に染めた雲の下、立派なお屋敷の並ぶ、だらりとした坂道を駅へ向かってとぼとぼ下りながら、兄は「どうしたらいい？」と弟に聞いてみた。「だいたい、エミルに探偵をお願いしたのに、なんで、オレが自分で調べなくちゃいけないんだ

よ」

弟は答えるかわりに、兄のシャツの袖をにぎって自分のほうに引っぱった。

「なに？」

「犬のウンチ」

「ありがと。それにしてもさ、エミルが超能力で安田の様子を透視して、どうすればいいのか予言してくれるっつうシーンを予想してただけだな……」

「父さんが助かった時みたいに？」

「うん。でも、心霊の『し』の字もなかったなあ……。で、どうする？」

「これから安田さんちを偵察する？」

「これから？」

兄は足を止めて弟の顔をまじまじと見た。

「むかし、にちゃんがレフトで安田さんがセンターだったし」

「5年生までな。安田はうまかったけど、オレはへたっぴだった。いつも『ボール来んなよ、来んなよ』って祈ってたし……」

「つまり、にいちゃんの親友でしょ？」

「親友かあ……」と、つぶやくと、兄は再びトボトボと歩き始めた。「でも、もう暗くね？」
弟が兄の背中に向かって言う。

「安田さん、ボクのことを助けてくれた恩人だし」

「そうだよなあ……。それに、あいつ、オレにあんなへんなメールを寄こすくらいおかしくなってるんだもんなあ。やさしすぎんだよ、あいつ。幻覚で見た人間の心配まですんだもんなあ」

「うん」

「よし、これから行くかあ」と兄はアゴをぐいっと前につきだし、ピッチャーのように右手をグルグル振りまわした。

代々木上原から安田の家のある代々木八幡までは電車であつた一駅。あつという間だったが、駅からはお店も何もないしんとした狭くて急な坂を登る。

レンガ色とクリーム色の高級マンションに両脇をはさまれるようにして、安田の豪壮な家はあった。古めかしく立派な門構えに、重そうな瓦屋根がのった大きな屋敷で、周囲をお城の石垣のような塀がぐるりと守っていた。きつと、ずっと昔からここに住んでいる、ここらへんの地主さんかなんかなんだらうなと賢い弟はあらためて思った。

まるで敵を寄せつけまいとするように、門は堅固な木の扉によって閉ざされていた。

兄は門柱のインターホンのボタンを押すと耳をすました。返事はなく、門の向こう側もしんとしたままだ。

もう一度ボタンを押した。

するとインターホンについている小さなライトが突然青白く輝いた。監視カメラの照明だ。あわてた兄がマイクに口をつけんばかりにして早口で言った。

「あ、あ、高村です。安田君のお見舞いに来ました」

少しの沈黙の後、母親の沈んだ声がインターホンから流れ出た。

「翔一は病気でいま寝ています」

「あ、あの、安田君、大丈夫ですか？ 心配で……」

また少しの沈黙。

「大丈夫よ。それじゃ」

「あ、あ、あの、安田君に近いうち、会って話したいんですけど」

「……よくなったら翔一から連絡させます」

「そしたら、伝言、お願いします。宅急便、いますぐ送るから……」

監視カメラの照明が消えた。

弟が聞いた。「宅急便で何を送るの？」

兄はそれには答えず、「こっち」と小声で言うときつさと歩き出した。弟があわてて追うと、兄は安田家の石塀に沿って右側に進み、となりあうマンションと石塀の間の狭く暗いすき間からだを滑り込ませた。

兄弟は横向きのカニ歩きでじりじりと進んでいった。高い石塀の上には樹木の枝がいくつも突き出しているの、向こう側は広い庭になっているのだと弟は思った。

石塀が尽きる手前で、石組みが途切れて木戸になった。こんなところから誰が出入りするのかと弟は不思議に思った。

兄は人さし指を口に当てて静かにするよう弟に告げると、木戸の前でじっと何かを待った。

しばらくすると、カサ……カサ……というものの音がこちらへと近づいてくる。その音が木戸の裏側でやんだかと思うと、「宅急便ですか？」と言うささやき声が木戸の向こう側から聞こえてきた。

「はい、クロイヌです」と兄が真面目な顔で姿の見えない相手に向かってささやいた。

「それ、なつかしいな……」と木戸の向こうからひそひそ声が届く。

「元氣か？　すげえ心配したぞ。病氣はどうなの？」

「話せば長えから手紙にして宅急便ポストに入れとく。明日の今頃、回収に来てくれ。携帶取り上げられてんだよ」

「……了解だ。お前のオフクロ、オレの伝言を伝えてくれたんだね」

「いや、インターホンを盗み聞きした。家の中にいる限り、オレはけっこう自由に歩き回れる。この木戸もさ、オフクロは知らないけど、カギ、こわれてるから、外に出ようって思えば出られる。ま、出てないけど。高村、言っとくけどよ、オレにあまり関わらないほうがいい。後悔するぞ」

安田はそう言うのと、「そろそろ戻らないと」とささやいた。

「おまえ、水くせえじゃねえか。なんだよ、こっちは心配してんだぜ」と兄は口を尖らせた。

「わかった。じゃ、手紙、明日、取りに来いよ」

「おう」

兄弟はまたカニ歩きで通りへと戻った。

駅への帰り道、安心しているようでもあり、何かを決意したかのようでもあった兄の顔を横目に見ながら、「宅急便ってなに？」と弟は聞いた。

「小六のとき、あいつの親が、あいつをオレたちから引き離したわけ。受験勉強のためなでも、オレたち、漫画本やゲームの貸し借りは続けたんだ。あいつの親に見つからないようによ。あそこの戸の取っ手に袋を吊してさ。それがポストなんだ。そこにマンガとかを入れて、借りたり、貸したり。あいつ、学校から帰ってきたらランドセルの中も親に検査されてたからな」

兄の足どりが少しゆっくりとした。

「安田んち、親、厳しすぎ。あいつの父ちゃんのせいだよ。東大出て、安田も最低でも一ツ橋大学ぐらいには行かせようと思ってたらしい。でも、無理。小学受験で落ちて、オレと同じ公立に来たわけだし。中学も暁星とか第一志望だったけど見事落ちたし。で、オレと同じ鷗星だよ。それ以来、オヤジが口をきいてくれなくなったって言ってた。あいつにも弟がいるんだけど、弟はチョー頭よくてさ、中学はすげえ難しいとこに合格したんだ。いまは弟が期待の星みてえ」

陽が落ちて薄闇に包まれた坂道が終わり、やがて小田急線の大きな踏み切りが遠くに見

え、それから帰宅する人々を吐き出す代々木八幡駅が見えた。

「にいちちゃん、安田さんの声が聞けてよかったね」

弟が言うど兄は「うん」と力を込めてうなずいた。

ベッドサイドの時計を見ると午後11時を回っていた。食堂から戻り、部屋で一人になったエミルはベッドにからだを放り投げると、まず安田のことを考えた。

高村兄弟の前では黙っていたが、安田はドラッグをやっているのではないかと、あのときエミルは直感した。

たまたまアンジェリーナが貸してくれた若者向けの薬物中毒の本を読んだばかりだったから、高村見太郎からのあいまいな情報だけでも、安田の症状がドラッグによるものだということははっきりしているかに思えた。だいち、安田自身が「幻覚」という言葉を使っているし、それに普通の病気ならアンジェリーナも隠すことはしない。やはり家族が他人に知られたくない類の病気だから、アンジェリーナは頑なに口を閉ざすのだ。

とすれば、やっぱりドラッグしかない。そんなふうにはエミルは思ったのだった。

幻覚が見えて中毒性もあるのなら、覚せい剤か、あるいはアヘン系か。

それにしても安田がドラッグに手を出すなど想像もできない。エミルの知っている安田は弟思いの、いつも笑顔をやさしい大柄な少年だ。エミルと同じ彫りの深い顔だちと少しだけ縮れたやわらかい髪を持つ。ちょっと斜に構えたところがあつたけれど、熱血漢で、曲がったことが嫌いなやつだった。

そんな安田とドラッグはエミルの頭の中ではどうしても結びつかない。何かのつぴきならない事情があるに違いない。そう思うほかなかった。

そして、ハヤトだ。

安田の幻覚の中に現れ、自分を殺してくれと嘆願するというハヤトだ。

高村が安田のメールを読み上げ、「ハヤト」という名前を口に出したとき、エミルはこの事件は自分たちにもたらされるべくしてもたらされたのだと確信した。

なぜなら、数日前からエミルにもまた、未知の人間から「自分を殺してくれ」と願う念が届いていたからだ。

始まりは3日ほど前だっただろうか。

夕食後、ベッドに寝転がって本を読んでいた。ふと、ベッドサイドの小さなテーブルのハトホル像に目をやった。すると、遠近の感覚がおかしくなったせいで、ハトホルの頭からのびるU字形の牛の角が天井に突き刺さっているように見えた。

その角をじっと見ていたら、突然、頭がポーツとして、こきざみな震えが肩と胸のあたりに湧きあがった。からだはちっとも震えていないけれど、震えとしか言いようのないつもの感覚で、同時に頭の奥がしびれたようになるのだ。トランス状態の前ぶれだ。

すると男の若い声が聞こえてきたのだ。

「ふえいぱりつとを死なせてくれ。ふえいぱりつとを死なせてくれ」

その声は、ちょうど枕に押しつけられている右耳から入ってきたような気がした。

心の中で「だれですか？」と聞いたけれど、返事はなかった。そのかわりに、まるで棺桶の中に生きたまま閉じ込められたような恐怖の感情が送り届けられた。

エミルは必死でその暗く恐ろしい念を振り払い、やっとの思いでベッドの上で上半身を起こした。全身に汗をかいていた。

翌日の夜も、ベッドで本を読み、眠気が襲ってきたころ、あの声が聞こえてきた。エミルはまた「だれですか？」と問うた。こんどは答があった。ぼんやりと顔も見えた。高校生

くらしいの、短髪の少年だった。

「ハヤタ」とその声は言うのと、念はぷつりと途絶えた。

昨日も、そのハヤタと名のる少年の声は聞こえてきた。

今夜もまたその声は聞こえてくるのだろうか。まるでラジオ放送のように。

ハヤタとハヤト。殺してくれというメッセージの内容はまったく同じだ。同一人物であることに間違いない。

でも、いったいどうして？

安田もエミルも、二人とも知らない未知の少年からの念が届くことなんてあり得るだろうか。

リリーはかつて、4次元的な共鳴の話をしてくれたことがあった。4次元世界では共鳴によってコミュニケーションが成り立つ。それは形の共鳴だと。同じ形どうしがコミュニケーションするのだと。型というのは文字通り三角形とか、四角形とか、そういうものだけど、それは3次元の形だ。4次元の形はそれとはずいぶんと違うし、言葉にはできない。そうリリーは言った。

リリーの話は、事実をとってもシンプルにしたものだと自分で言っていたけれど、4次元

的な形が同じであれば、時空を越えてコミュニケーションができるのだとエミルは教えられた。

とすれば、ハヤタと安田とエミルの4次元的な共通点は何か。

ハヤタはまず安田と共鳴し、次にエミルと共鳴した。なぜだ？

安田が靈感のようなものを持っているという話は聞いたことがない。もしかすると、ドラッグのせいで脳波がシータ波の状態になり、そのためにハヤタと安田の意識は霊的に共鳴したのだろうか。

そして次第に強まったハヤタの共鳴能力は、無意識のうちにエミルを見つけた……。

それにしてもハヤタとはいったいだれなのだ？

それは能流登家に関わる人物なのだろうか？

そのとき、突然、ドンとベッドごとからだが横に揺れた。勉強机の上で、何かがパタンと倒れる音がした。エミルは身がまえたが、大きな揺れはその一度きりで収まった。

久しぶりの体を感じる地震だった。

エミルは起き上がると、念のために地震の規模をチェックしようとパソコンに向かうと、机の上では小さな写真立てが一つ、倒れていた。元通りに直した。エミルの父親の写真だっ

た。まだ20代後半の若者だった Emil の父親が、アルミのフレームの中でこちらを見てほほ笑んでいる。

干し草色の縮れた長髪が肩までのび、唇を両脇に思いっきり伸ばし、両頬にはえくぼが浮かんでいる。Emil のと同じ青みがかった瞳が無邪気にこちらを見ていた。

その父親の写真立てだけが倒れた。

リリーは偶然なんてないと言った。とすれば、これも何かのメッセージなのか？

引き出しからモレスキンのメモ帳を取り出すと、Emil は事件のポイントを書きつけていった。

それから Emil はお風呂に入り、眠った。ハヤタは今夜は無言だった。

あくる4月27日、土曜日の午後7時。

そろそろやって来るはずと、Emil はベッドの端に腰かけた。

午前中にアンジェリーナが伝えてくれた情報は、Emil の直感が正しかったことを示し

ていた。きまじめなアンジェリーナは安田の病気の中身についてはひとことも言わなかったが、間接的に教えてくれたも同然だった。安田の病気とは薬物依存だと。

エミルたちの通う学校の近くのS女子高でつい数日前に発覚した、ドラッグにまつわる事件のことだった。1年から3年の十数人の生徒が覚せい剤を使用していたというのだ。一人の女子生徒のようすがおかしいことから、芋づる式に見つかった。

この事件はなぜか新聞では報じられなかったが、同じ渋谷区内の学校ということから、アンジェリーナの耳に入ってきたのだ。

安田とS女子高生たちのドラッグの入手源が同じである可能性があると、エミルは思った。

安田を苦しめているドラッグも覚せい剤なのか？

いったい何があったんだろう？

それにしても、とエミルはベッドの上に大の字になると、ふと高村の弟のことを思い出した。

自分の目がかつて持っていたのと同じ暗いきらめきを、エミルはあの賢そうな弟の目にも見ていた。あれは学校という集団の中で本能的に身についた防御装置にちがいがなかった。

自分も同じ防御装置を作動させ続けていたかつての日々を、エミルはぼんやりと思い出した。

心もからだも文字通り傷だらけだった。

クルクルで爆発しているような髪の毛はいつもだれかがコソコソ、だけれどぐいぐい引っぱったし、「ガリガリのっぽー!!」「電信柱!!」「ガリバーおんな!!」と大声ではやされるのもいつものことだった。

落書きもされるし、ランドセルやうわばきも隠される。廊下を歩いているとき、すれ違いざまに足をかけられて転ばされたことが何度あったか。むしろ、転ばされない日のほうが珍しかった。

もちろん、その多くはいくつかのいじめっ子たちのグループの攻撃がほとんどだけど、止めてくれるような子もいなかった。

エミルはいつもひとりぼっちだった。

イジメや無視を通して、自分の容姿がほかの子どもたちには異様に映るんだということを目撃された。もし神様がいるならどうして自分だけが悲しい思いをするのを黙ってみているのだろうとも考えた。

でも、家に帰ると、リリーがいつもこんなふうに慰めてくれた。

「エミルがいじめられるのは、エミルが気高いからよ。だから、どんなにいじめられても、いじめっ子を憎まず、許して、気高いいなさい。でも、あまりにひどいことをされたらリリーにいいなさい。リリーがいじめっ子に魔法をかけてこらしめてあげる」

実際にこんなことがあった。

理科の実験のときに、いじめっ子たちがレンズで太陽の光を集めてエミルの髪の毛を燃やしたのだ。クリクリの髪の毛から小さな炎がでてエミルは気づかなかった。うしろで見ていた女子が「火、火」と叫びながら髪の毛をノートで叩いて消してくれた。

先生に申し出て念のために髪の毛を濡らしに洗面所に行った。そのあいだ、教室では犯人探しがおこなわれたようだが、名のり出る者も、告発する者もおらず、エミルが教室に戻ったときには賢い沈黙だけがあたりを支配していた。

帰宅したエミルは泣きながらこのことをリリーに話した。「これはお灸をすえておかなければ」とリリーは言った。

あくる日のことである。

6時間目の国語の時間だ。いじめっ子のひとりが机に突っ伏して眠っていた。それを見

つけた先生が彼をさして「朗読しなさい」と言った。あわてて立ち上がったいじめっ子は、教科書を両手で捧げ持つとこう言ったのだ。

「ぼくはウンコもらしのひきょう物です」

先生もみんなも、そしていじめっ子本人もポカンとして、教室はシンとした。3秒後、いじめっ子と先生以外の全員が笑い出した。

やせっぽちだったそのいじめっ子は、顔を真っ赤にして赤鉛筆のように立ちつくした。今もあの時のことを思い出すとエミルはニヤリとする。

あれは絶対にリリーの魔法に違いないと、エミルは今も確信している。

そして、その赤鉛筆のようだったいじめっ子とは、ほかでもない、高村見太郎なのだ。

高村とエミルが、イジメの加害者と被害者の関係から、あることがきっかけで友だちという正反対の間柄となり、しかも同じ私学に通うことになるなんて、なんておかしいんだろうとエミルは思った。

ただ、他のグループのいじめっ子たちとは、どんな和解もなく、小学校の卒業とともに離ればなれになった。

そんなグループのリーダーで、いつもニヤニヤして腫れぼったい目の男の子の名前はな

んと言ったっけ？　ありふれた名字だったような。

そうだ……鈴木君だ。

いまさらながらにエミルは思った。絶望的な孤独にエミルがとらわれずにすんだのは、リリーと、ママと、そして我が生家にして変人たちの巣窟——ケプラーハウスの住人たちのおかげだと。そして現実は一っだけじゃない、この宇宙にはたくさんの異なる世界が重なり合っていることをリリーが教えてくれたからだ。だから耐えることができたし、逃げることもできた……。

そのとき、ドアをノックする音が聞こえた。

すっかり重くなってしまったからだをエイヤッと起こし、ベッドに座り直すとエミルは大声で言った。

「開いてる！！　どうぞ！！」

ドアがゆっくり開いて、高村見太郎が、そして高村勇貴が顔をのぞかせた。

兄弟は無表情のままソファにのっそりと腰を下ろし、お尻のポケットから折りたたまれた紙を取り出すと、それをエミルに向かって差し出した。

「さっき、電話で話したやつ」

エミルはベッドの端にすわったまま手を伸ばしてその紙を受け取り、開いた。

「読んだ？」

兄弟はふたりそろって無言のままうなずいた。

破りとられたノートの裏表を、安田のまじめそうな角張った字がびっしりと埋めつくしていた。

エミルは読み始めた。

思った通り、安田は薬物依存という名の悪魔に取りつかれていた。

しかも違法なドラッグではないがゆえに、さらにやっかいな底なし沼に足を取られている。

そして驚いたことに、さっき何気なく思い出したあの人物の名前もまた、エミルは手紙の中に見出した。

《……お前からベースギターを借りて家に持って帰ったあの日、親父にオレはまだロックミュージシャンを目指していると言うと、親父は怒り狂った。それがきっかけだった。

むしゃくしゃした。そして思ったんだ。お前も知っている鈴木から無理やり買わされたクスリをのんでみようかって。そのクスリは机の引き出しに入れっぱなしにした。鈴木は気持ちが悪くなるだけで死にゃあしないし、法律で禁じられている覚せい剤とは違うから警察にもつかまらないって言っていた。

鈴木は今も不良たちとつるんでる。今年の正月に駅近くのコンビニで鈴木たちからまれた。ぜんそくの薬を飲むと気持ちいいぞって言われて、無理やり10本買わされた。

それを一度に10本ぜんぶ飲んだ。10本飲ないと効き目がないって、鈴木が言っていたからだ。そうしたら1分か2分で、からだがフワフワしてきて、目の前がキラキラしてきて、幸せってこういうことかっていうような気分になった。俺は思わず踊り出した。からだは勝手に動くんだ。理由なく楽しいんだ。時間の感覚が無くなって、つかれてもう踊れなくなって、床にぶっ倒れた。そのとき時計が見えた。夜中の3時だった。俺は、夜の8時から朝の3時まで踊りつづけてたんだ。

クスリの中毒になってからは、鈴木にメールして、待ち合わせて買った。金はオフクロ

の財布からくすねた。

だんだん禁断症状が出てきた。お前だから言うけど、ウンチをもらすし、胸はドキドキするし、何かに追われているような気分になるし、ときどき体がぶるぶるふるえてとまらなくなる。

そのうち、親が俺のクスリ中毒を知ることになる。俺は監禁状態になった。

突然、どこからともなく、死なせてくれという声が聞こえてきたのは半月前ぐらいのことだ。俺が誰だって聞くと、ハヤトという返事が聞こえた。そして、俺たちと同じぐらいの年の坊主頭の男の顔が見えた。その幻聴と幻覚が1週間ぐらい、毎日のように続いた。クスリでボーッとしていると、その坊主頭の男が出てくるんだ。

そいつはどこかに監禁されているらしい。自由がない。だから死にたいと言っている。苦しいと言っている。殺してくれと言っている。正確に言えば、そう言っているように聞こえるってことだが、うまく言葉じゃ説明できない。あまりにそいつが出てきて、俺も苦しくなる。だれかに伝えなくちゃいけないと、それでお前にメールした。オフクロに隠れて、携帯探して。

4日ほど前から、そのハヤトというやつはプツリと現れなくなっただけ――。

それから、最後に、おまえに言う。俺にかまうな。お願いだから、この件で俺にかまうな。ほっておいてくれ。気持ちはあるがたい。感謝する。だが、ほっておいてくれ。それが一番いいんだ。すまん。》

安田の手紙を元通りに折りたたむと、エミルは高村見太郎に返した。

兄がつぶやいた。

「また鈴木だよ……」

「安田にベースギターを貸したのは春休み直前？」とエミルがきくと、兄は「うん。それが？」と顔を上げた。

「確かめただけ」

少しの沈黙の後、「安田が飲んでいるクスリにはアヘンが入っているんだ。アヘン戦争のアヘン」と、エミルは兄弟に説明を始めた。

アヘンそのものは麻薬であり、持っているだけで犯罪になる。でも、安田が飲んでいるクスリにはアヘンの成分はほんの少ししか入っていないので取り締まりの対象にはならない。しかも薬局で誰でも買うことができる。とはいえ、一度に大量に飲むと体内に取り込

むアヘンの量が増えることになるので、自然と麻薬の効力が発揮されてしまう。だから、依存者は一回に何本も飲む。するとお金がかかってしかたがない。結果、依存者はお金を得るために犯罪をするようになる。

依存症になってしまうと禁断症状が現れてくる。体がかゆくてしかたなかったり、ふるえが止まらなかったり、夜眠れなくなったり。幻聴や幻覚もでてくる。

「罪の意識があるから、自分を攻撃するような幻聴が聞こえる。『おまえは弱虫だ』とか『最低な人間だ』とか。外にいるときに幻聴があると、たまたまそばにいた人に言われたと思いでいこんで、ケンカを始める人もいる。木とか犬とかがしゃべっているように聞こえることもある。それから幻覚もある。とつてもへんなものも見える。一つ目小僧とか、血だらけのゾンビとか」

兄のほうゴクリとツバを飲んだ。

「どうやったら安田は立ち直れる？」

「薬物依存は病気。だから専門の病院に入るのが一番。でも、父親は安田を病院に入れたがらないと思う」

「でも、それしか方法がねえなかったら……」

「安田の父親の職業、知ってる？」

「いや……」

「役人。警察庁のね。いまは署長だと思う」

「け、警察の署長!?!」

エミルは足を組むと、頭のうしろで腕を組んで天井を仰いだ。

「違法でなくても、自分の息子が薬物依存だということが世間に知られたらキャリアが傷つく」

「キ、キャリア?」

「しかも、鈴木という不良からクスリを買っている。鈴木はそのクスリを違法なルートから手に入れてるはず。クスリの売上は確実に暴力団なんかに流れてる。ということは、父親の立場は最悪だ。彼は息子を世間からひた隠しにする。いまのまま自宅に監禁して、自分たちで解決しようとするんじゃないかな」

「じゃ、どうすればいいの?」と兄は頭をかかえた。

「なんとかして安田に会おう」

兄は大きくうなずいた。

「んでも、エミルさ、なんで安田んちの親父さんの仕事まで知ってるの？ 透視したの？」

エミルは立ち上がると、両手を突き上げ、くーっと伸びをした。

「親戚だから」

兄は口をあんぐり開けて、そして聞き返した。

「や、安田んちと親戚なの、エミルんち？」

「祖母どうしが姉妹。でも、いまはあまり行き来はない。さてと」とエミルはまた椅子に腰を下ろした。

「ハヤトのことだけど」

すると弟がこの日初めて口を開いた。

「あの、それは幻聴とか幻覚じゃないんですか？」

「違う」

エミルのその言葉に兄がブルツと体をふるわせ、「ほんとうにいるってこと、ハヤトってやつ？ どこかに閉じ込められてるわけ？」ときく。

エミルは黙ってうなずいた。

こんどは弟が「そんなことって、あるんですか？」ときく。

エミルがうなずくと、兄と弟は顔を見合わせた。

エミルはとたんにめんどくさそうに眉をあげると、「じゃ、きょうはこれにて解散。オレ、夕ご飯」と手をひらひらさせた。

弟はソファから立ち上がると、まだボーツと座ったままの兄の二の腕を引っ張り上げた。兄を引きずるようにして弟は廊下に出ると、エミルに向かって一礼した。

「ありがとう」と兄もペコリと頭を下げた。

廊下のつきあたりから、おいしそうなにおいが大勢の笑い声と一緒にやってただよってきた。そこには、きのう、不気味な老婆を一瞬見かけたあの扉がある。

この不思議なアパートの——エミルはシェアハウスと呼んでいたけど——食堂はあのへんにあるのかなと弟は思った。

明るる4月28日、日曜日。夕方近く、高村見太郎にエミルからメールが届いた。

《話したいことがあるので来られる?》

どんな話だろう？

見太郎は4畳半の自分の部屋のベッドの上にあぐらをかいて、携帯電話のディスプレイを見つめた。

マンションの5階にある高村の家。さいわい、周囲に高い建物がないので、見太郎の部屋の東向きの窓からは新宿副都心までがパノラマ写真のように見渡せる。見太郎は携帯電話を手にしたままベッドからおりと、その見晴らしのいい窓に近づいて額をガラスに押しつけた。ひんやりとした。

夕陽を反射した新宿のオペラタワーが、まるで鉛でできた塔のように銀色に輝いていた。そこからずっと右のあたりが代々木八幡で、安田の家はきつとあのあたりだろうと見太郎は見当をつけた。あの大きな屋敷の中で、もしかしたらこの瞬間も、安田はクスリのもたらず幸福感に酔って踊り続けているんだろうか。そう想像すると、とてつもなく不安で、たまらなく恐ろしかった。

「エミルの家に行くよ」と弟の勇貴に伝えなければと思ったそのとき、ずいぶん前から勇貴の気配がないことに兄は気づいた。

廊下に出て隣の弟の部屋のドアをノックした。

返事がない。

「開けるぞ」

ドアをゆっくりと押し開けた。勇貴の姿はなかった。

リビングルームにも、トイレにも勇貴はいない。

心臓が早打ちを始めた。ドキンドキンという音が耳の奥で鳴った。

兄は自分の部屋にとって返すとベッドの上にごろがっていた携帯電話を取り上げ、弟の番号をタップした。

呼び出し音が数回鳴って、そして「お客様のおかけになった……」という電話会社の自動音声に変わった。

もう一度、かけた。同じだった。

どこにいるんだ？ 電源を切っているんだとしたら、なぜだ？

兄は頭をかきむしった。それから窓の外をボーッと見やった。

そうだ、安田の家に行ったのかもしれない。あいつのことだ。偵察に行って、ついでに宅配便のポストを見てくるつもりなのかもしれない。

そう考えたら、心臓が少し落ち着いてきた。

するとその推測をひしゃげる鉄の重りのようにして別の不安がのしかかってきた。

じゃあ、なんで携帯がつかないんだ？ 着信音が心配ならマナーモードにしておけばすむことなのに。

父さんは仕事でいないし、どうすればいいんだ。

思いはあっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら、時間だけがいたずらに過ぎた。

そのあいだも何度も弟の携帯に電話をしたが、結果は同じだった。

気持ちを落ち着けようと、漫画を手にとったり、テレビをつけてみたりもしたが、少しも集中できなかった。

兄はあの夜のことを思い出していた。安田が勇貴を救った1年前の冬を。

あのとき、安田が鈴木たちのあとをつけていなければ、真っ暗闇の冷たいプールの中でもしかしたら勇貴は死んでいたかもしれない。

すでにあの頃から鈴木は年上の不良たちとつるんでいた。

勇貴が鈴木たちからリンチのような目に合ったその理由は、勇貴自身にもまったく見当がつかなかった。

塾帰りの道のまん中で、突然、「高村の弟か？」と言われて鈴木や5、6人の男たちに取

り囲まれ、そばの大学の構内に連れ込まれたのだ。

冬休み間近で、しかもすでに夜の9時をすぎたキャンパスでは学生の姿もほとんどなかった。

雑草が生い茂り、電灯などの明かりもない、建て替え予定地の暗い一角の、すでに使われず、たくさんの落ち葉が浮いている屋外プールのへりまで引き立てられた勇貴は、一番の年長らしい男にこう言われたそうだ。

「面倒起こそうってのはおまえか。わかってんだよ。この人が迷惑だそうだ」

そう言ってその男は、一団の中にいた勇貴と同じ年くらいの長髪で色白の少年をあごでしゃくって指し示した。少年は顔をそむけた。長い髪が左目のあたりを隠した。その顔に勇貴は見覚えがなかった。

「小坊のガキだろうがかまっちゃいねえ。二度とつけまわすんじゃねえ!!」

そう言いざまにその男は勇貴の腹をけ飛ばした。勇貴は水面に向かって背中から吹っ飛んだ。

勇貴は自分が水の中に沈んでいくのを全身で知った。痛みや冷たさを感じる間もなかった。

勇貴はしきりに腕を振り、足を蹴り、浮かび上がろうとした。

上も下もわからない。

ただ、自分の口から逃げていく空気のゴボゴボという音と、心臓のドックドックドックドックという音だけが耳の奥で鳴っていた。

夢中になって体を動かすうちに自然に顔が水面に出た。

すると誰かの手が伸びてきた。

必死になってその手を握ると、その手にあつという間に引き寄せられ、そして引き上げられ、気づいたときにはプールのへりに横たわっていた。

「大丈夫か？」という声のほうを見ると、安田が警官のような男と一緒に自分を見おろしていた。

連れ去られていく勇貴を偶然見かけた安田があとをつけ、ただ事ではないと思って大学の警備員に助けを求めたのだという。そして鈴木たち一団は、駆けつけた警備員の姿を見て一目散に逃げ去ったというわけだ。

警察に電話しようと言う警備員に、安田は友だち同士のケンカなので勘弁して欲しいと訴えたが、警備員は耳を貸さずに警備員室に向かった。しかたなく安田は勇貴の塾用のカ

バンを拾い上げ、びしょ濡れの勇貴を引きずるようにして大学から逃げ出したという。

玄関のドアを開けると安田と並んで立っていた、安田のダウンジャケットを着せられ、真っ青な唇をぶるぶると震わせた弟の姿を、兄は今でもはっきりと思い出す。

「どうしたんだよ」と怒るようになりながら、ビショビショのからだを温めなければと、兄は弟を浴室に連れて行った。シャワーのノズルから出る水がお湯にかわるまでもどかしかつた。

安田に、父さんが何度も何度も頭を下げて礼を言っていた。

父さんも警察に通報すると言ったが、安田が「仕返しされるのは自分なんで」といい、結局、父さんは断念した。

兄も鈴木への怒りに全身がぶるぶる震え、鈴木を探し出して仕返ししようと考えたが、安田の言葉に従い、理不尽だとは思ったが、この一件のことは忘れようとしてきたのだった。

そしていままた似たようなことが起きようとしているのではないか……。兄は頭を振って、そのおぞましい想像を放り投げようとした。

窓から見える新宿のオペラタワーはもう輝いていない。薄紫のもやの中、他の高層ビル

群に溶け込むようにぼんやり突っ立っている。もうじき8時だ。

そのときだ。携帯が鳴った。ディスプレイに弟の携帯の番号が表示された。安心した兄はフーツと息を吐き出すと、やおら通話アイコンをタップした。だが、聞こえてきたその声は弟のものではなかった。

「高村あ？」

心臓がびくりとして、息が止まった。

「鈴木だよ。鈴木のいっちゃんです」

そう言うとキャツキャツと甲高い笑い声に変わった。

兄は何が起きたのか、何が起ころうとしているのか理解できず、混乱した。

「お、弟は？」

「いるよ、オレの隣に。こりねえな、おまえも、おまえの弟もよ。ふざけたマネ、しちゃって」

「弟にかわってくれる？」

「っーかよ、引き取りに来いよ。にーちゃんの強いところ、見せに来いよ」

不良たちの姿を反射的に想像して一瞬おじけづいた自分を、兄は少し恥じた。

「どした？ こわいのかよ？ なくんもしねえから。ちょっと話をするだけだし」

「……なんの話？」

「おまえと、おまえの弟と、安田クンの将来だべ」

「あ、あ、そう……」

「1時間待つから。それ過ぎても来ねえようだったら、おまえの弟は、なんか、ちげーもんなになっちゃうかも」

そう言って、鈴木はまたキャツキャツと笑った。

高村からなかなか返信が来ないことに、エミルは何かしら不穏なものを感じた。

メールをしたのが5時過ぎ。いまはもう9時だ。

エミルは机の上の携帯電話を手にとると、高村の名前を探し、タップした。

呼び出し音が鳴り続け、やがて「電源が切られているか……」というメッセージに切りかわった。

弟の携帯の番号も聞いておくべきだったと後悔した。

エミルは部屋を出て2階に向かい、アンジェリーナの部屋をノックした。すでにパジャマに着替えていたアンジェリーナがドアを開けた。

「どうした？」

「高村がつかまらない」

「入って」

黒い背もたれの椅子に座ると、アンジェリーナは「まずい事態？」とエミルにきいた。

エミルはベッドに腰かけながら、「高村が首をつっこもうとしているのが鈴木君がからんだドラッグの件だから、そんな予感がして」と答えた。

口を一文字にして、アンジェリーナは首を縦に何度か揺らした。

「で？」

エミルは大きく息を吸って、そして吐いた。

「きょう、天道さんたちに占星術で見てもらった。安田のホロスコープ。小学校の時の卒業文集に誕生日がのっていたから。安田が生まれたとき、太陽は射手座にあって、度数は

26度。シンボルは『戦場の旗手』」

「戦いのさなかでも自分の理想を忘れず、旗をおろさず、突き進むってシンボルだっけ？」
「うん。勇気があって犠牲精神に富む。それから、月は牡羊座にあった。太陽と月が作り出す角度は120度」

そういつてエミルはきれいに折りたたんだ紙をジーンズのポケットから取り出すと、アングジェリーナに渡した。開くと、そこには12分割された円内に牡羊座から魚座までのサイン記号が並んだホロスコープが印刷されていた。円のさらに内側には太陽から冥王星までの天体を表す記号が描かれ、その記号どしは線でつながれていた。

「なるほど。エゴを表す太陽と心理を表す月が温和な角度ということは、安田は精神的にはすこぶる安定している人間だというわけね。そして孤立を恐れぬ牡羊座の月だから、一人で突っ走る、ワイルドなやつが安田」

「独立独歩の天王星と男性性を表す火星が同じ場所にいるから、ますますワイルドで過激。拡大と受容の象徴の木星は月と同じ場所にあって、やっぱり太陽とは120度の温和な角度を作る。これの意味するところは、すなわち絵に描いたような『善良なやつ』」

「で、結局、天道さんたちはなんて？」

「薬物に近づくようなやつじゃないって。とくにカメさんは絶対に違う、100万円かけ

るって」

アンジェリーナがニヤリと笑い、椅子に座ったまま器用にあぐらをかいた。

「カメさん説では、安田は自己犠牲として自分からすすんで薬物中毒になったんだというの」

「自分からすすんで……か……。他の二人は？」

「大澤さんは、抑圧と節制の土星が快樂の牡牛座にあるから、快樂におぼれないようにコントロールできるのが安田だと。つまり、薬物に依存することは彼が最も嫌いな行動なの。天道さんは、こういう星回りの人はウチの客にはいないって。つまり、占いや他人に頼らず、自分ひとりで活路を見出す人だと」

「いずれにしても、安田は何らかの目的があって自分から薬物中毒になったということね。……でも、それって、いったい、どういうことなんだろう？ 想像できない……」

そう言ってアンジェリーナは両手を組み合わせ、黙り込んだ。

思い出したように、アンジェリーナがエミルにこうきいた。

「どうして天道さんたちに鑑定をお願いしたの？」

「確かめたかったの。安田って、誘惑に負けて薬物依存になるようなヤツじゃないって」

「わたしも意外だった」

「なんか特別な理由があるはずよ。安田の手紙、読んだでしょ？」

アンジェリーナがコクリとうなずいた。

「安田、ウソついてるし」とエミルは断じるように言った。「何度読んでも、オレにはただの作文にしか思えないの」

「たとえば？」とアンジェリーナがきいた。

「ベースギターだけど、高村は春休み直前に安田に貸したと。でも、安田の手紙だと、お正月前に借りたことになる。時期が違いすぎる。安田の父親が怒ったことが薬を飲むきっかけだという話にするために、ベースギターの話を無理やりくつつけたんじゃない？」

「なぜ？」

「安田は薬物を使用した本当の理由を隠しておきたいの。『俺にかまうな』とも書いてるしね」

「でも、薬物依存の状態にあることは確かよね」

「本当だと思う。辛いはず、きつと。辛いから真剣に高村に伝えようとしている。でも、それ以外は、何かを隠すためのウソにしかオレには思えない。あの手紙には本当と嘘がミッ

クスされている。でも、ませ方はじょうずじゃない。安田はやっぱりウソがへたな正直な奴ってこと」

「なるほどね」

「今夜、高村に来てもらって意見を聞こうと思ったんだ。……でも、連絡がつかない」

「リリーにきく？」

アンジェリーナがエミルの様子をうかがうように言った。

エミルは首を横に振った。

アンジェリーナがうなづく。

「じゃ、セーヌ川は？」

「オレも同じことを思ってた」

「いるかな？」

「夕ごはんのとき、食堂にいた」

二人は立ち上がり、廊下に出た。

廊下の奥から2番目の部屋のドアをエミルはノックした。

ギーッという音とともにドアが開き、赤色の巻き毛の頭がぬっと突き出ると、「シー

……」と唇に左の人さし指を当てた。

ドアを右手で押し開けたまま、唇に当てた人さし指をこんどはカギ型に何度か折り曲げて、中に入るようにとエミルとアンジェリーナに伝えた。

二人は顔を見合わせ、そつと部屋の中に足を踏み入れた。

身長はゆうに190センチを越え、体重も100キロは越えているに違いない体型ながら、エレガントな物腰のその男は、エミルとアンジェリーナに腰かけるようソファを指さすと、自分は床のアラベスク模様のじゅうたんに横座りしてコーヒーテーブルに両手をのせた。

「見えますか？ あそこにお客様が来ています」と、男はエミルに向かって言うと、クリクリした茶色の目と、巨大なわし鼻と、先が二つに割れたあごとで、だれもいない窓側を指し示した。

何らかの気配を感じたエミルは目をつむり、ゆっくりと息を吸い、吐き、また吸い、吐いてを繰り返して、頭にいつものピリピリとした振動が感じられるような状態になったところで目を開けた。

さっきまでは見えなかった、昔風の花柄のワンピースを着てパーマのかかった髪若い

女性がそこにいた。何かを聞いたげな表情で、手をだらりと下げて立っていた。リアルな存在としてそこにいるけれど、たちまち見えなくなってしまうようなかなさがある。

心の中で「どうしたの？」とエミルは問いかけた。

頭の中で「グスタフ先生に助けて欲しい」という言葉が響いた。

エミルはもっと集中しようと、目を閉じた。まぶたの裏で暗闇がしんとした。

その若い女性の姿は、こんどはエミルの内面のほの暗いスクリーンの上に現れると、突然老婆に姿を変え、そしてエミルの目がその老婆の目が変わった。老婆の見たものがエミルにも見え、エミルはその恐ろしさに息を止めた。ものすごい勢いで白いクルマが迫ってきて自分に激突すると、白色でおおいつくされた視界がひっくり返った。老婆はクルマにはね飛ばされたのだとエミルは即座に理解した。

老婆は自分が亡くなってしまったことを理解できずにいた。だから、若いときの姿で、かつて入院していた病院の病室にやって来て、グスタフ先生に助けを求めたのではないか。エミルはそう確信した。

老婆はふたたびその若い女性に姿を変え、闇の中で不安げに眉をよせてエミルを見た。エミルは自分の両側に、いつも自分を助けてくれる目に見えぬ存在たちがいるのを感じ

た。「グスタフ先生が現れて、この女性を魂の故郷に無事送り届けてくれますように」という願いを、イメージとしてその存在たちにエミルは伝えた。

すると卵形にまぶしく輝く銀の光がその女性の前に現れた。それこそがグスタフ先生に違いなかった。女性の顔が嬉しそうに輝いた。その光と女性の前にこんどは薄いグリーンのアール・ヌーヴォー風の美しいエレベーターが現れ、ゆっくりとドアが開いた。光に伴われて、女性がエレベーターに乗りこむとドアが閉じ、そしてエレベーターそのものがフツと消え去った。

エミルは目を開け、大きな息を吐いた。

「行ったわ。ひいおじいちゃんが来てくれた」

「よかったでした」と男がそっとつけたした。「この部屋、むかし、病室だったでしょ？だから、ときどき、いろんな人がやって来ます。わたしにはエミルのような天使のお友達はいないから、『ごめんなさいね、他を当たってね』って言いますけど」

アンジェリーナが言う。

「わたしには何も見えないけど、見える人たちはたいへんね」

エミルはうなずいて、こう言った。

「リリーが言っていたけど、死者を助けるのは義務なの。しかも、助けを求めてくる死者は初めて会う人でも、自分と深い関係にある存在なの。より大きな自分の一部分なんだから」

アンジェリーナが「そうね」と静かに言い添えた。

そして3人は厳肅な面持ちで、部屋の隅を見つめた。

「さて、ご用命は？」とセーヌ川と呼ばれた男がエミルに聞いた。

「サーチしてもらいたい人がいるの」

「OK。居場所ね？ エミルのお友達？ アンジーのお友達？」

「オレもアンジーも知っている子。名前は高村見太郎」

セーヌ川は立ち上がってデスクまで行くと、ソフトボール大の水晶球を取り上げた。それからテーブルの上に黒い布を敷き、その水晶球をそっと置いた。そしてデスクからペンとメモ用紙を持ってきてエミルに渡した。

「名前を書いてください。どうせ、わたしに漢字は読めませんけれど」

ニッコリ笑って、セーヌ川は水晶球の前にあぐらをかいて座った。

エミルが高村の名前を書いてセーヌ川に渡した。

「ありがと……。アンジー、お願い、ドアの横の電気のスイッチをオフにしてください」
アンジーが立ち上がり、電気を消した。

シエルフの上段に詰め込まれたステレオのLEDランプの青い光だけが残り、部屋は深い海の底のような紺青の闇になった。

セーヌ川が水晶球を見つめながらゆっくりと何度も深い呼吸を繰り返し、そうして沈黙の時間が過ぎていった。

エミルはセーヌ川がいつか聞かせてくれた話を思い出していた。

ノストラダムスは占星術で出来事の起こる時期を知り、そして水盤の水面に現れた映像から何が起こるかを知った。その水盤は3本の足に支えられた金属の皿の形をしていて、古代ギリシャのデルファイの予言で使われていたのと同じ形だったという。その水盤の水の中に映像を見ると、セーヌ川が水晶球の中に映像を見ると、原理は同じだと言う。鏡のように磨いた黒曜石の板でも映像は見えるとセーヌ川は言った。そしてエミルはあらためて思った。セーヌ川はノストラダムスと同じフランスのプロヴァンス出身だったっけと。

それから半時間、エミルもアンジェリーナも身じろぎひとつせず、じっと海底であぐら

をかいているセーヌ川の唇を見つめ続けた。

ようやく、その唇がもぞもぞと動いた。

「レシェヴォー……」

アンジェリーナがその鼻にかかる言葉を繰り返した。

「レシェヴォー……。フランス語で馬……。馬だわ」

死んだ母さんがベランダから取り込んだ洗濯物を両腕いっぱいにかかえて笑顔で見つめていた。高村の全身を甘い幸福が地震のように震えて駆け抜けた。

高村は母さんを手伝おうとしたが、足が動かない。ちよっぴりあせるが、それでも幸福感だけは少しも減っていかない。母さんの存在そのものから振動となって幸福が伝わってくるのだ。ゴーゴート、地響きのような音を伴って、甘い幸福が、しびれるような感動が、全身を突き刺し、遠のいたかと思うと、またゴーゴートやってくる。

ずっとこのままでいたい。

そう思ったとき、だれかが乱暴に高村を引っぱった。そしてそのまま高村はどこかに落下した。とても深い穴に落ちたと思ったが、突然、目の前に弟の顔が現れ、その向こうに満月に少し足りない白い月が見えた。

そしてそのまま、兄は記憶を失った。

暗い色をしたクルマは兄と弟を道にほうり出すと、タイヤを鳴らして急発進した。誰もいない公園と変電所に囲まれたこの暗闇のエアポケットから、そのクルマはヘッドライトの光が流れかう広い道に姿を消した。

弟は、長い足で飛ぶように駆け寄ってきたエミルを見て思わず涙を流した。

その涙ごしに、弟はエミルだけでなく、黄色いパーカーをなびかせたアンジェリーナや男たちの姿が闇の中から現れ出てくるのも見出した。黒いタートルネックのセーターを着た男の一人はとっても大きくて力が強そうだった。

「大丈夫？」とアンジェリーナが路上にひっくり返ったままの高村見太郎のかたわらにひざをつくとき、その閉じたまぶたを指で押し広げ、瞳を調べた。

エミルが「救急車を呼ぶ？」とアンジェリーナに早口でたずねた。

それに答えずに、アンジェリーナは弟をきっと見据えた。

「何を飲まされたの？」

弟は涙をこぼしながら言った。

「ぜんそくのクスリ」

「何本？」

「10本」

「確か？」

「10本飲めって言われて……」

アンジェリーナは心配そうに見おろすエミルを見上げると言った。

「救急車はいらない。酔っぱらっているのと同じ。朝になったら正気に返るわ」

弟が声をふるわせながらきいた。

「兄ちゃん、中毒にならないですか？」

アンジェリーナは弟を安心させようとしたのか、笑みを浮かべた。

「1回くらいじゃ大丈夫よ。それより、どうする？ きみんちに連れて帰る？ それとも、

私たちのところで少し休む？」

弟は少し考えてから言った。

「父さん、心配するから、エミルさんちに行っていていいですか？」

「もちろん」とエミルが言うのと、弟は「ありがとうございます」と頭を下げた。

とっても大きな男の人が兄を抱きかかえて、クルマの後ろのドアから荷物のように兄を積み込むと、弟を手招きした。

涙を流しながら弟は横になっている兄の足をどけて座席に座った。

アンジェリーナが運転席に座り、エミルが助手席に座った。

「じゃ、ぼくらは電車で帰るね」

エミルに向かって、クルマの外からもう一人の男が言った。

初めてエミルに会った日に玄関で会った亀に似た人だと、弟は気づいた。

クルマはバックで広い道に出ると、右にハンドルを大きく切った。窓の右側を小田急線の電車の明るい光の列が追い抜いていった。

エミルの家につくと、新たな男二人がやって来て兄をクルマから引っ張り出した。兄は一人の男に背負われ、もう一人にうしろから背中を支えられて中に入り、玄関から入ってすぐのソファに寝かされた。

明るい室内で見ると、一人は男子というよりは頭をツルツルにそり上げたオジサンで、もう一人は男子ではなく、ショートカットの女性だった。

エミルは二人にお礼を言った。

「ありがとう。テンドウさん、ルミさん」

「ひでえことをするもんだなあ」と、テンドウさんと呼ばれた男が言った。

ルミさんと呼ばれた、グレーのトレーナーにスキニーなジーンズをはいた少年のような女性は、大きな目をパチパチさせて心配そうに高村を見おろしていた。

クルマを駐車場に入れてきたアンジェリーナが戻ってきて、みんなでソファに座り、スヤスヤ眠る兄の顔をじっと見ていると、やがて電車が帰ってきた。

巨大な男は赤毛の白人で、もう一人はブルース・リーみたいな眉の濃い屈強ですばしこそうな若者、そして最後の一人がああ亀のような人だった。

「今夜はうちに泊まったほうがいい」とエミルが弟に言った。

アンジェリーナが父親に電話をしておくようにと弟に言い、弟は嘘をつくことに居心地の悪さを覚えながらも、父にエミルの家に泊まることになったと伝えた。途中、エミルが電話に替わると、久しぶりにエミルの声を聞いた父はとても喜んだようで、エミルから弟

が電話を受け取ると、「明日はどうせ旗日だしな」と父はちっとも疑わずに電話を切った。

「さて」とエミルが言った。「何があったのか、教えてくれる？」

弟はうつむいて、黙った。何から話せばよいのか、順番がわからなかった。

「鈴木たち呼び出されたの？」とエミルが聞き直した。

「ぼくがいけないんです」と弟は言うのと鼻をすすり、また涙がポロリと頬を伝った。

「どうして君たちのいる場所がわかったか、知りたい？」

弟はしゃくり上げながら、うなずいた。

「セーヌ川がお兄さんのいる場所を遠隔透視してくれたの」

弟は赤毛の巨人にペコリと頭を下げた。

巨人が言った。

「わたしには馬が何頭も見えました。それも子馬。子どもの笑い声が聞こえました。あなたのお兄さんが呼び出した記憶がわたしと共鳴した。そしてすぐにお兄さんの恐怖を感じました」

エミルが言う。

「このあたりの人にとっては、子馬って言ったたら、代々木のポニー公園しかないもの。高

村は小さい頃、あそこで子馬に乗ったんじゃない？ 案の定、オレたちがポニー公園の横道に入っていたら、クルマが1台、公園の暗がりに隠れるようにとまっていたわ。だってさ、さくクルマが」

アンジェリーナがクスツと笑った。

やがて気持ちが落ち着いた弟はポツリポツリと語り始めた。

それは1年前のあの事件にそっくりだった。

………

午後4時ごろ、弟は笹塚の大きな本屋さん歩いて出かけた。マンガを買って、すぐ戻ってくるつもりだった。

本屋では、思いのほか長時間、立ち読みをしてしまった。

外に出ると空は黄色やオレンジ色や青色のまだら模様が変わっていて、道路には電信柱の長い影が何本も伸び、商店街には昼にはなかった華やぎがただよっていた。

夕陽の暖かい光線を背中に感じながら、弟はお菓子工場の前を過ぎ、広い道を渡り、消防学校の白い校舎の群れを右手に見ながらのんびりと家に向かった。

するとこちらに向かって走ってくる赤と白の2台のクルマが急に速度を落としたのに気づいた。まるで自分の姿を見つけたためであるかのように。

2台は50メートルほど手前でゆっくり停車した。

弟は反射的にうしろを振り返った。道に人影はない。視線を前方に戻すと100メートルほど向こうのコンビニに人の出入りが見えた。そこまでたどり着けば安心だと弟は考えた。

無意識のうちに歩幅は広く、早足になった。

止まっている2台のクルマの横を通り過ぎるかと思ったそのときだ。

突然、赤のクルマのドアが開き、「おい」という声とともに男たちがおりてきた。

走り出そうと一步を踏み出したとき、パーカーのフードをつかまれ、弟はうしろにひっくり返りそうになった。

そのままパーカーごと引っぱられ、クルマの中から突き出た2本の腕が弟の胸ぐらをつかんでぐっと引き寄せた。からだの小さい弟は転がるようにして赤のクルマの中に引っ張り込まれた。

ボタンボタンとドアが閉まり、2台のクルマはたちまち発進した。

男たちの中に見覚えのある顔を、弟はいくつか見つけていた。

一人は鈴木で自分の左隣にいた。一年ぶりに見た鈴木は、ひとまわり大きく、たくましくなっていた。髪も短く刈り上げ、さらに凶暴な匂いを漂わせていた。

もう一人は1年前にプールに自分を蹴り落とした男で助手席にいる。

そして、クルマに引っ張り込まれる直前に、もう一台のクルマのウィンドウ越しに見えた、これも1年前のプールぎわに鈴木たちと一緒にいた、あの長髪で色白の少年だ。

助手席の男が言った。

「久しぶりだなあ、小坊」

弟の足はガクガクと震え、心臓はトクトクトクトクと打ち鳴らされた。

それからクルマはあちこちに行っては鈴木がどこかに出ていき、しばらくして鈴木が戻ってきてはまた走り出すということを何時間も繰り返した。

プールに弟を蹴り落とした男の——頭の両脇を刈り上げているので、これからは、刈り上げ男と呼ぼう——携帯電話が鳴ると、刈り上げ男は「ういっす」と返事をし、それから運転をしている金髪男に住所を告げる。すると、クルマがそこに向かうということの繰り返しだった。

少だけ気持ちに余裕ができた弟は、彼らは何かの配達をしているのではないかと推測した。

配達先が携帯電話で刈り上げ男に伝えられ、鈴木が外に出て注文した人間に何かを手渡しているのに違いない。その配達先を命じているのは、うしろを走るもう一台の白いクルマに乗っているだれかなのだろうか。

やがてすべての配達が終わったのか、刈り上げ男はハンドルを握る金髪男に「ポニー公園」と告げると首をぐるりとうしろに回し、「そいつの兄貴を呼べ」と鈴木に命令した。

鈴木は弟から取り上げておいた携帯電話を迷彩模様のウインドブレーカーのポケットから取り出すと、電源を入れた。

「おい、おめえの兄ちゃんの番号を言えや」と鈴木は携帯のディスプレイに目を落としたまま言った。

弟は一瞬迷ったが、いまは兄にこの状況を伝えたほうがよいに違いないと番号を告げた。番号をタップし終えた鈴木は携帯を耳に当て、落ち着きなくクルマの外に目をやった。

夕闇が紺色の風のように吹いている。

「高村あ？ ……鈴木だよ。鈴木のいっちゃんです」

鈴木は右隣にいる弟に目をやりながら、ヒヤヒヤヒヤと甲高い笑い声を上げた。

「そしたら30分くらいで兄ちゃんがやって来て……」

弟は、ソファの上で幸せそうに寝息をたてている兄の寝顔を見ながら言った。

「兄ちゃんはクルマの中に無理やり入れられて、ぼくのとなりに座りました。そうしたら鈴木が兄ちゃんに言ったんです、クスリを飲めば弟と一緒に帰してやるって。兄ちゃんは、なんでクスリを飲まなくちゃいけないんだって言いました。鈴木は、うるせえんだよって怒鳴ると、兄ちゃんのシャツのエリをつかんだんです。そしたら、助手席の男がナイフみたいなのを出して、それを僕に向かって突きつけて……」

弟は口を閉じた。

エミルがきいた。

「高村はそれでしかたなくクスリをのんだんだね、10本も……」

弟がコクリとうなずいた。

「他に何か言っていないかった？」

そうエミルがきくと弟は下を向いたまま言った。

「安田にかまうんじゃねえって言ってました」

「安田に？」

「安田さんに近づくなんて。そうしないとまた同じ目に合わせるぞって」

「ふーん……へんね」

「クスリが売れないからじゃないですか？」

「たったそれだけの理由で？」

エミルは口を開けたまま眠る高村の顔をじっと見つめ、腕組みをした。

「なんか裏がある」

「裏？」とアンジェリーナが言った。

「オレたちがぜんぜん気づいていない何か。その何かを隠そうとして、安田はオレたちにウソをついた」

「安田さんがウソをついたんですか？」と弟は驚いた表情で顔を上げた。

エミルが腕組みしたまま続けた。

「不良たちはほかに？」

「あのう、カミさんが何て言ってたかとか、カミさんっていう人のことを気にしていました。リーダーの名前かなって思いました」

「カミさん？ 名字かな……。他には？」

「あとは……ああ、そうです」

弟はエミルを見上げて言った。「ハヤトって言うのは、きっと、ハヤタの間違いだと思います」

「えっ？」とエミルは驚いて声を上げた。

なぜ鈴木たちの会話にハヤト、つまりハヤタの話が出てくるのだろうか。念を送ってくるあの少年もまた鈴木たちに関係があるということか？

「どうしてそう思うの？」

「兄ちゃんが薬を飲まされるときに、鈴木がもう一人の人に言われてました。ハヤタのようになっただけからちゃんと飲ませろって。それで、もしかして、安田さんが言っていたハヤトはハヤタのことなのかなって思ったんです」

そのとき、玄関から「ハヤタ？」と問い返す女性の声が聞こえ、全員の視線がそちらに向いた。

ブルーのハンドバックを肩にかけ、手に黒く大きなブリーフケースをさげた、白いスーツの細身の中年女性が立っていた。

「おかえりなさい」

エミルがその女性に向かって言った。

弟はその人がエミルのお母さんだと思った。髪をうしろでふんわりとたばねたその人は、キラキラした大きな目をした、きれいな人だと思った。

「ママ、ハヤタって人、知ってるの？」

ママと呼ばれた女性はスリッパにはきかえながら、「あ、あ、友だちにハヤタって人がいたから、つい」と、少しあわてて答えた。

「どんな人？」

「どんな人って……ママと同じ年のオバサンよ。なんで？」

視線を合わせないママをうたぐるように見つめて、エミルはぼつりと言った。

「……いいの。おやすみ」

「皆さん、おやすみなさい」

そう言うとエミルのママは廊下の奥に姿を消した。天道さんが急にソワソワしだしたの

にエミルは気づいた。

「今夜はこれまでにしない？」とアンジェリーナが言った。

「そうだね。えーと、キミと」とエミルは弟を指さし、「高村は」と兄を指さし、「お客様用の部屋があるから……。皆さん、高村を」と、男たちに向かって手を合わせて拝むようにした。

男子たちは、もう一枚の毛布で芋虫のように兄をくるみ、毛布の端をそれぞれが持ち合せて、階段の手前にある部屋にえっちらおっちら運んでいった。

部屋の中にはシングルベッドが二つ並んで置かれていた。まるでホテルのようだと弟は思った。

ルミさんがベッドカバーを取り払い、毛布とシーツを持ち上げると、男たちは「よいこらしよっと」と高村の芋虫状の身体を毛布ごとベッドの上に横たえた。

アンジェリーナはかがんで高村の口もとに耳を寄せて呼吸の様子をチェックすると、「大丈夫。キミもやすみなさい」と弟に言った。

弟がコクリとうなずくと、先に男たちが、次いで女たちが部屋を出て行った。しんがりのエミルが、「じゃ、おやすみ」とドアを引き寄せながら右手をひらひらと振った。

カチリとドアが閉まる音も待てずに、弟はもう一つのベッドの上に倒れこむと目を閉じた。

クルマの中の男たちの顔が次々と頭の中の闇に浮かび上がった。

弟はブルブルと体を震わせると、横向きになってからだを丸めた。

廊下に出ると、みなは自然と奥の食堂に向かった。

観音開きのドアを開いて食堂の中に入ると、片側だけで10人は座れる、檜の板を組み合わせた大テーブルがあり、思い思いの位置にみなは座った。

庭に面した側にはフランス窓が連なり、昼なら木漏れ日がさしこむのだが、いまは夜の闇がガラスの外側にべったりと張りついていた。

学校の教室一つ分ほどの広さの食堂は天井が高く、吊された二つのクリスタルの大きなシャンデリアがレモン色に輝いていた。

入り口から見て右手に向かって食堂は長方形に延びている。左奥には調理室へ通ずるド

アがあり、その横ではアップライトのピアノが黒くつやつやと輝いていた。

左手の壁にはレンガでできた立派な暖炉があり、マントルピースの上にはモノトーンの古い写真が黒色の額に入れられて飾ってあった。その写真の中では、白い口ひげをはやした彫りの深い顔の老人と、その妻らしき、同じく彫りの深いヨーロッパ系の老女が並んでソファに座り、穏やかな笑顔を浮かべてこちらを見ていた。

暖炉にもたれかかるようにしてエミルは立った。

全員の視線がエミルに向けられた。

「あのう……」

エミルが重々しく口を開いた。

「すこし、たいへんなことになりそうです」

みんながうなずいた。

「この探偵事務所を作ろうと思ったのは、リリーによってここに集められたみんなの力が、実際にどんな役に立つのか知りたい、そしてやがては社会全体の意識も少しは変えたい、そんなことへの小さなテストをするためでした」

またしても、みんなは大きくうなずいた。

「ほんとうは5月10日の新月の日にスタートするはずでした。なのに、わたしが学校のコピー室のゴミ箱にチラシを捨てたばかりに、予定より早く客が来てしまった。その客が持ち込んだ問題は、ドラッグがらみのものでした。この問題は、もしかしたら警察にまかせないといけないのかもしれない」

エミルはテーブルに歩み寄ると、イスを引き、座った。

「まだ、オレしか知らないこともあります。だから、問題をもう一度整理してみたいと思います」

エミルの右側の列には、アンジェリーナ、そしてルミさんが座り、左側の列にはセーナ、カメさん、天道さん、大澤さんの顔がある。

シャンデリアの光を頭上から受けたみな顔は、不安に陰を深くしているようにも見えた。

「安田はぜんそくの薬に含まれているアヘンのせいで薬物依存になっています。たぶん、クスリを飲んだのは今年に入ってからで、依存の度合いが深まったのは3月ぐらいからだと思います。高村が持ってきた安田の手紙に書かれている依存の症状がともリアルです。でも、それ以外のこと、たとえば薬物を最初に飲んだ理由、そしてあつという間に依存症に

なっていく過程は、オレには本当のことには思えませんでした。オレの知っている安田はそういう意志薄弱というか、ぐれてしまうような子じゃないし、天道さんたちの占星術鑑定でもそうでした」

天道さん、カメさん、大澤さんがそろってうなずいた。

「安田は何かを隠しているの。それは何か。高村の弟の話によれば、不良たちは『安田に近づくな』と言ったそうです。不良たちは安田が隠している何かの秘密を知られることを恐れているのじゃないかしら」

ルミさんが手を上げた。

「ということは、安田が知っている秘密というのは、安田と不良のどちらにとっても都合の悪いものっていうことかしら？ でも、安田は不良たちの仲間じゃないわよね」

「その通りです。安田が薬物依存だということは学校にも知られているから、隠すことでもない。不良たちからクスリを買っていることも、違法薬物ではないので隠すまでもない。それどころか、安田は手紙の中で自分からすすんで暴露している。そんな安田が隠しておかなければならないこと、それがなんなのか、これが一つのキーポイントだとオレは思います」

アンジェリーナが手を上げた。

「S女子高で覚せい剤が見つかったことは今朝、エミルに話したよね。それでね、気になって、都内の学校の薬物事件のことを調べてみたの」

アンジェリーナはいったん話を止め、大きく息をした。

「これから話すことが今回の出来事に大きな関係があるのではないかと思うんです。3月、4月ごろから、いままでは無縁だと思われていたような有名進学校でドラッグがらみの事件が次々と発覚しているんです。S女子高もそうですが、あのA学園高校、B学院中高、C大学附属中高、D大学付属中高、雄心学園。使用された薬物は、安田と同じぜんそく薬以外に脱法ハーブ、MDMA、覚せい剤とさまざまだけど、薬物まんえんの起点となった生徒たちのほとんどが、不良や暴力団に強制されて始めたと言っているんです。この有名進学校の生徒を狙った薬物事件が、鈴木がいる不良グループのしわざとすれば、そこにエミルが言う秘密のカギがあるのかもしれない」

全員が大きくうなずいた。

「エミル。ハヤト、ないしはハヤタっていう少年のことは？」とアンジェリーナがきいた。
「そのことだけど……」

エミルが口ごもった。

「……これは能流登家に関係があることではないか、そう思ってるの。安田は能流登家の親戚です。その安田の幻覚の中にまずハヤトは現れた。そのハヤトの幻覚は、安田の手紙によれば4月23日をさかいにプツリとなくなりました。……これはみなさんに初めて言いますが、実はそのころから、ハヤトはオレのもとにやって来るようになったんです」

みんなは驚いてエミルを見つめた。天道さんだけが、なぜか目を閉じ、何かを守るかのように腕組みをした。

「その子の名は高村の弟が言ったように、ハヤトではなく、ハヤタです。オレに感じられたのは、ハヤタは何かにくくりつけられて自由を失っていること。それは気が狂いそうなほどの苦しみです。彼が死にたい、殺してほしいというのは、その苦しみから逃れたいから。彼の思いは強烈です。安田が恐れおののいて高村にメールしたのもわかります」

カメさんが手を上げた。

「どうして能流登家と関係があると言えるの？」

「ハヤタは安田の次にオレのところに来た。それが理由です。霊的な型共鳴がなければ見ず知らずの人間の想念を無意識のうちに受けとることはありません。とすれば、オレたち

3人になんらかの共通の型があるはずですよ。オレと安田の共通項は血縁です。それで能流登家に関する人物だろうと思っただんです。みなさんも知っての通り、能流登家はというと、たぶん、スイスのご先祖もそうだったらしいけど、シャーマンというか、死者と交信できる能力を持った人間が生まれてきた血筋です。だから、それがいちばん合理的な説明だと思ふの。でも、一番の問題は、そのハヤタという少年がどうして鈴木たちの会話の中に出てきたのかです。ただの偶然で同じ名字だったという可能性もあるけれど、ここまでいろいろなことがからみあっているからには、鈴木たちの知っているハヤタと、オレに訴えているハヤタは同じ人物と思っただろうがいい。そう思ってるの」

大澤さんが手を上げた。

「そのハヤタ君が安田君と同じように、鈴木たちの餌食になっている可能性もありますね」

エミルは大きくうなずくと、両手をテーブルについた。

「きょうのようなことがあると、高村兄弟のことも心配です。いつまた同じようなことがあるかもしれない。安田のことも」

ルミさんが言った。

「警察に届けてはだめなの？」

「安田の父親は警察署長なんです。それで解決できるのなら、きっと安田自身がとつくに自分の父親に言っているはずですよ」

「くわえて」とアンジェリーナが言った。「不思議なのは、高村が安田のために動いたことをどうやって鈴木たちが知ったのか。安田が鈴木たちに伝えたのか。それはありえないじゃ、どうしてわかったのか。安田の家は監視されているのか。これも一つのキーポイントだと思う。ついでに言えば、私たちももう部外者じゃないってこと。鈴木たちの攻撃リストに名を連ねてしまったかもしれない」

全員が「うーむ」と腕を組んだ。

天道さんが青のチェックのネルシャツを袖めくりして言った。

「てことは、ここまですべてが序章で、これからが本番ってわけか。それにしてもエミル、あんたはたいした中三だ」

エミルはにこりともせずにかう言った。

「点と点をつなぐ線を知りたいんです。そうすればきっと高村も、安田も助けられる。作戦をねりましょう」

テーブルの端に、いつの間にか青い目をした老婆が座っていた。

2章 左目の隠れた少年

少年は山手通りまで歩き、念のために家から遠くした待ち合わせ場所に、時間ピッタリにやって来た白のクラウンの後ろの席にちょこんと座った。行きかうクルマもまばらな祝日の朝の幹線道路は、アスファルトまで退屈そうだった。

首に狐のタトゥーを入れた男が助手席で前を向いたまま言った。

「言われたことは全部やっておきましたよお」

「……」

「なあ、カミさんよ。ボスからしつこく聞かれてんだ。バクチのほうの捜査っすよ」

「4月30日深夜0時、全店舗同時に現行犯逮捕」

「おうっ、あした。しかも全店舗ですかあ……。ボスに言っても大丈夫すか？」

「言っいいい」

「ヤクのほうはどうすか？」

「ヤクは5月1日から蒲田の事務所に監視がつく。麻薬取締官と警察の合同。早朝から24時間出入りをチェックされる」

「いつまでっすか？」

「わからない」

タトゥーの男は携帯電話のキーパッドをタップした。

「あ、オレです。カミさんからです。明日、4月30日、バカラですが全部の店にガサ入ります。……はあ、全店。時間は夜中の12時。……そうっす。当分、臨時休業っすね。……ヤクのほうですが、明日までに蒲田のヤサからブツは全部引き上げたほうがよさそうっす。

……5月1日から監視されます。……そういうことです。……うーっす」

男は携帯電話をダッシュボードの上に置くと、大きく一息をついた。

少年は静かに目をつむった。長い髪が前に垂れてその目を隠した。

車内では誰も言葉を発せず、コロコロという静かなエンジン音だけが聞こえた。

脳がしびれるような気分がしてきた。それが始まりの印だ。

男も運転手もそれを知っている。だから、少年が目をつむっているときは何も話さず、沈黙を守る。

少年の意識は異世界にこしらえた自分だけの白亜の屋敷に瞬時に移動した。

すべてが大理石でできている、いつか歴史図鑑で見た古代ローマの貴族の館のような広大な屋敷だ。

ガランとした大広間に赤い自転車が1台、倒れていた。これも自分が作った自転車だ。

少年は自転車に近づくとそれを手で起こしてサドルにまたがり、こぎ始めた。

自転車は大広間の中を楕円を描いてすべるように走った。

気がつくとき、その楕円の中央に、白いワンピースのような筒型の服を着た少女が立っていた。黒髪を頭のとっぺんで結び上げ、彫りが深く、日に焼けた顔の、高い鼻筋の両横で、大きな黒目が黒曜石のように輝いている。

ライだった。

「おまえの父と母を破滅のふちに追いやった。満足か？」

それから低い笑い声が聞こえた。

「まだだ」と少年は言った。「ふちじゃだめだ。破滅するまでだ」

ライはにやりと笑った。

少年は聞きたいことがあったのを思い出した。

「どうして、君はぼくを助けるの？」

「おまえは、わたしだからだ」

「どういう意味？」

「おまえが救われない限り、私は救われない。そして私が救われない限り、おまえは救われない。そういう輪廻の糸で結ばれているのだ」

少年にはライの言葉が理解できなかった。

するとライの姿が消え、目の前に巨大な1本の木が現れた。

その木が猛然と少年に近づいてくる。いや、その逆だ。自分が宙を飛び、その木のまん中にある枝に向かって近づいていっているのだ。

それは高層ビルのように巨大な木だった。そして枝に近づくと、葉っぱだと思っていた

のは、人間だった。透明な袋に入れられ、眠っている人間だった。さらに近づいていくと、そのひとつの袋の中でライが眠っていた。そして、その隣の袋で、少年自身が眠っていた。ライの眠る袋に近づくと、ライの人生がまるで映画のように見えてきた。

ライが生まれた掘っ立て小屋のような家から、ピラミッドのてっぺんのきらめきだけが見える。ここは貧民窟だ。

大人数の家族、たくさんの兄弟、その末っ子らしいライ。貧しさゆえに、ライの両親は10歳のライを売った。買ったのは魔術師の男。その男の奴隷となり、ライは1日中働かされ続けた。孤独で辛い暮らしの中で、なぜ自分だけが売られたのかと両親を恨む日々が続く。

ある日、ライは魔術師によって殺された。

魔術師により、新月から満月の夜にかけて、長い日数をかけた儀式がおこなわれ、そして最後に蛇の毒によって殺されたのだ。儀式の目的は重い病にかかった魔術師が、ライの生命エネルギーを自分の第二の身体、つまりエーテル体に取り込み、魔術師が少しでも長く生きることにあった。だが、ライのエーテル体はライのものであり、魔術師のものになることはなかった。魔術師の呪術は失敗したのだ。

ライは15歳で死んだ。

ライの人生を一瞬のうちに知ってしまった少年は、ライの悲しみと怒りをまるで味の無い食べ物のようにして飲み下した。

すると忽然と大木は消え去り、自分が想念でこしらえた広大な屋敷の中に少年は戻った。少年は自転車にまたがり、屋敷の外に飛び出した。自転車は宙を飛び、果てしなく広がる砂漠を下に見ながら少年は憎しみに歯をギリリとかみ合わせた。

そのとき、意識がこちらの世界に帰ってきた。

少年はゆっくりと目を開けた。

クルマは山手通りと明治通りの間をグルグル回っていただけだった。

助手席の男が聞いた。

「カミさん、どうする？ 誰にしたい？」

誰にしようか……。少年は迷った。

助手席の男が窓を開けてタバコを投げ捨てた。

突然舞い込んできた風が少年の長い髪を巻き上げた。

目を開けるとのっぺらぼうの白い天井があった。

頭の中ものっぺらぼうだった。

しだいに自分が自分だということに気づき、そして今まで眠っていたのかもしれないという考えがポツンと浮かんだ。

頭を横にすると、となりにもベッドがあり、弟の寝顔と片手が毛布から突き出ていた。どうしてここに弟がいて、そしてここはどこなのか。兄は考えてみたが、答は何一つ浮かばなかった。

頭を反対方向に向けると、カーテンの向こう側の世界が陽に輝いているのがわかった。もう一度頭を弟のほうに向けると、兄は弟の名を呼んだ。

「勇貴、勇貴、おい」

弟はびっくりしたように目をぱちりと開けると、兄のほうに顔を向けた。

「ここ、どこ？」

「エミルさんち」

「なんで、ここにいるの、オレ？」

「きのう、クスリ飲まされたでしょ。鈴木たちに」

兄の頭の中に、真っ暗なポニー公園と、その先の路上に止められたクルマの中にいる鈴木たちの姿が、暗室で現像される写真のようにゆっくりと浮かび上がった。

弟はからだを起こして毛布を払いのけると、ベッドの端にちよこんと腰かけた。

「にちゃん、もうろうとして気を失ったようになって。エミルさんたちが助けに来てくれたんだよ」

「てことは、泊まったの？」

「そうだよ。父さんには電話で話してある。クスリのせいとは言っていないけど」

「……オレ、クスリ、飲まされたんだっけか……」

「覚えてないの？」

「いま思い出した……」

兄は両手で顔をごしごしこすると起き上がり、弟と向かい合うようにベッドの端に腰かけた。

「エミルが助けてくれたの？」

「うん。アンジェリーナさんも。それから、ここの家の他の人たちも。みんなして」

「そうかあ……」と兄は目を落とした。はきっぱなしだったジーンズと、紺色のソックスをはいた自分の足があった。

「助けられっぱなしじゃん。オレは誰も助けてねえのに……」

兄は肺の中身がブルブル震えるように感じ、目から涙がこぼれた。

弟は黙ってうつむいた。

……

エミルに最初に助けられたのは小学5年の秋だった。

5時間目と6時間目のあいだの短い休み時間。具合が悪いと保健室に行っていたエミルが教室に戻ってくると、見たことのない真剣な表情で自分に向かってぐんぐん歩いてきた。兄はビックリして身がまえた。いじめの仕返しをされるのかと思ったのだ。

ところがエミルはこう言って涙を流した。

「キミのお父さんが家で倒れた。早く帰って救急車を呼んで。早く、早く、早く、早く!!」

エミルの言葉は固い鉄のかたまりのようだった。目に見えない誰かの腕につかみあげら

れたように、兄はさっと立ち上がると教室を走り出た。

うわばきのまま校舎を出て、家まで休むことなく駆けた。歩けば10分ほどの距離なのに、走っても走っても家はちっとも近づかない。

ようやくマンションにたどりついた。エレベーターは1階にいた。5のボタンを押して「閉」のボタンを押す。すべてがのろまに感じる。

エレベーターが5階に着く。開け切らないうちにドアをすり抜け、廊下を走った。ポケットからカギを出し、玄関を開ける。

「父さん!!」

返事がない。くつをはいたまま中に飛び込む。

その瞬間、リビングルームで胸を押さえながら前のめりに倒れていく父が見えた。兄は電話の受話器を取り上げ、119をブッシュした。

……。

心筋梗塞だった。救急車が早く到着してくれたおかげで命は助かった。

父は手術を受け、1か月ほど入院した。

エミルの不思議な力を知ったのは、このときが最初だった。

エミルは「父が倒れた」と過去形で言った。でも、兄が家の中に飛び込んだとき、父はまだ倒れておらず、言いかえれば、倒れるところだった。エミルは未来を予測したんだと兄は思った。

その翌日、午後になって病院から登校した兄はエミルに礼を言った。いつもいじめているエミルに「ありがとう」と頭をさげるのは不思議な気分だったし、自分の胸の中の堅い何か溶けていくような気分でもあった。

その時エミルはこんなふうに説明してくれた。

保健室でうとうとしていると、体がしびれたようになり、頭の中のスクリーンに女の人の姿がぼんやりと現れた。会ったことのない人だったが、なぜか、高村のお母さんだとわかったという。その女性はこう言ったという。

「見太郎の父が倒れました。すぐ家に帰るように」

正確に言えば、それは言葉ではなく、イメージだったとエミルは言う。そのメッセージがあまりにも強烈で胸に響き、リアルだったので、保健室を飛び出し、高村に伝えたのだという。

そういうことはよくあるのと兄が聞くと、エミルはコクリとうなずいた。

……。

それから1カ月ほどあと、父が退院したころのことだった。

エミルの不思議な力を知った兄は、あることをエミルに聞きたいと思った。だが、言い出せないでいた。

それは2年前、兄が3年生だったときに亡くなった母親のことだった。

12月の命日が近づくと、兄は心を決めた。

冷たい霧雨が降っていた放課後、一足早く校舎を出た兄は校門の陰に隠れてエミルを待った。

友だちのほとんどいないエミルは、案の定、一人で校門を出てきた。

「能流登!!」

兄はエミルを呼ぶと、小走りで駆け寄った。

驚いたエミルは黄色の傘を両手で持ったまま立ち止まった。

「お願いがあるんだけど」

兄はエミルの返事も待たずに一気にこう言った。

「オレの母さんに聞いてほしいんだ、母さんは自殺したのかって」

言い終えると胸がドキドキした。

兄より背が高いエミルは、傘をさしていない兄が傘の下に来るように持ち手を前に少し突き出すと、こういった。

「お母さんの名前、教えて？」

「高村ミエ。美しい絵」

「……じゃ、明日」

そう言っつて、エミルはクルリと背を向け、踊るバレリーナのような独特な歩き方で去って行った。

翌日。

早くに登校した兄は、校門の横のいちよりの木の陰に隠れてエミルが来るのを待った。

やがて、赤いランドセルを背負い、あったかそうな厚手のセーターを着て、ひよろひよろと飛ぶように歩くエミルの姿が校門をくぐった。

「能流登！！」

兄が呼ぶとエミルはきよろきよろとあちこちを見まわした。もう一度「能流登！！」と

呼ぶと、エミルはようやく兄を見つけてこちらに向かってきた。

「きのうお願いしたことだけど……」

またしても胸がドキドキして、声が裏返りそうだった。

エミルの目を見ると、少しうるんでいるように見えた。

「お母さんに会えたよ」

「うん」

「お母さんは事故で亡くなったの」

「そう言ったの？」

「お母さんが亡くなったところが見えたの」

「……」

「キミの前の家はスポーツセンターの近くだった？ キミの家のベランダからスポーツセンターが見えた」

「うん」

「風がとっても強い日で、お母さんがベランダで洗濯物を干していると、洗濯物の中の何かが飛んでいったの。ずっと向こうまで飛んで行って、スポーツセンターの噴水のそばの

フェンスにからまって止まった。お母さんはその洗濯物を取りに外に出て行った。スポーツセンターの噴水の向こう側は崖みたいになっているでしょ？洗濯物はフェンスの崖の側のほうに引っかかっていた。お母さんはその洗濯物を取ろうとしたの。そしたら、フェンスからからだを乗り出していたお母さんに、小さな子が乗った自転車がぶつかった。お母さんはバランスをくずして落ちていった。運が悪かった。お母さんは、あのう……頭から落ちていったの」

兄は自分の心臓がいまにも破裂しそうだと思った。息もできなかった。

「大丈夫？」

エミルにそう言われて、思わず兄はしゃがみこんだ。せきが出た。コホンコホン。

ようやく大きな息をひとつとつくと、兄はしゃがんだままエミルに言った。

「その洗濯物、なんだった？」

「野球のユニフォームだった……」

兄の目からせきが切れたように涙があふれ出た。涙は地面に落下して、黒い点をいくつもつくった。

エミルはだまって、しゃがんだ高村の、小刻みにふるえる黒い頭と青い綿のパーカーの

背中を見つめた。

しゃくりあげるようにして、兄は声を出した。

「あの日の朝、母さんに怒られて、オレ、『おまえなんか死んじまえ』って言ったんだ。だから、それで、母さん、自殺したのかと思ってた」

「違う」

「うん、違ってた……」

兄の吸い上げる息が震えていた。

「母さんが落ちたところのそばに、オレの野球のユニフォームがあったんだ……。なんで、そこにあったんだらうって、オレ、ずっと考えてた……」

「風が……」

「うん」

兄は立ち上がると、エミルの顔を見た。土のついた手で涙をぬぐったから、兄の目のまわりは黒く汚れていた。

エミルがポケットからハンカチを出して兄に差し出した。

「目のまわり、まっくろ」

兄はハンカチを受け取ると顔をゴシゴシふいた。

.....

コンコンとドアをノックする音がして、「朝ごはーん！！」というエミルの声がドアの外で響いた。

「あ、ああ」と返事する兄の声がかすれた。

そのときだ。ガシャーン、ガシャーンと、ガラスが割れる音が聞こえた。

すぐに何人かが廊下を走るパタパタパタという音がして、兄弟は顔を見合わせた。

二人が廊下に出ると、エミルやアンジェリーナや、それから男たちが玄関に集まっていた。

兄弟も駆け寄った。

玄関のドアのガラスの格子窓がこなごなに碎け散り、船腹に開いた穴から海水が流れ込むように、まぶしい朝の光がキラキラと射し込んでいた。

だれもが同じことを考えていた。

あの不良たちのしわざだと。

食堂に勢ぞろいしたケプラーハウスの面々の前に、電話を終えたエミルが暗い表情で戻ってきた。

暖炉の前に立つと、エミルは言った。

「安田家に電話してきました。……安田はきのう入院したそうです」

えっ、という小さな叫び声がいくつか上がった。

「どこの病院かは教えてくれなかった。都内ではなさそうでした。オレが依存症の治療ですかと言うと、おぼさんは少し驚いたけど、『ぜんそくの療養』と言っていました」

天道さんが腕を組んで、「作戦その一はあえなくついでたか」とつぶやいた。

大澤さんがテーブルに両手の手のひらをペタツとつけて、「作戦その二ですか」と言うて口を一文字に結んだ。

カメさんとセー又川が大きくなずいた。

高村兄弟はなんの話かわからずに、ただ皆の顔を見まわした。

調理室の中に消えたセーヌ川がコーヒーカップを手にして戻ってくると、「ポニデ」と言ってニヤリとした。

「わたしが安田のいる病院を探しましょう。むずかしいけれど、できないことではない。時間はかかりますが」

「その一とその二を並行して進める？」と天道さんがきいた。

セーヌ川がうなずいた。

高村兄がモソモソと口ごもりながらこう聞いた。

「あ、あの、その一、その二ってなんですか？」

こんどはエミルが答えた。

「その一は安田を突破口にすること。その二は鈴木を突破口にすること」

「つまり」と、Tシャツから鍛えられた太い腕が突き出している大澤さんが口を開いた。「鈴木を脅すわけ……あ」と片手で口をおおった大澤さんがおそろおそろ向けた視線の先でアンジェリーナが言った。

「くどいようだけど、暴力は無しよ」

「鈴木の実家の住所はわかってる」とエミルが続けた。「不良と言っても中学生だし、家

には帰っていると思う」

「どうやって鈴木から聞き出すんですか？」と兄が聞くと、「ひ、み、つ」とルミさんが笑った。

玄関のほうから「ガラス屋です」という声が聞こえた。

「はい」という返事がした。エミルのママだと高村兄弟は思った。

「またかよ」と車に揺られながら鈴木は舌打ちした。腫れぼったい一重のまぶたがピクピクと動いた。

助手席の刈り上げ男が「そう言うなよ」とニヤニヤした。

「意味不明だし」と鈴木が言った。

「まあな。ま、命令だしよ」

「家にいますかね？」

「行くだけ行くべ」

赤のクルマは渋谷の松濤の高級住宅街に向かった。

途中、刈り上げ男が寄こしたメモを見ながら、鈴木は携帯から電話をした。

「ちーす。……ぜんそく、大丈夫っすか？ おまけしときますよ。……そう言うなよ。バラしてもいいのお？ ……じゃあ、そばに公園があったべ。……ナベシマ公園っていうのか。そこでな。……おお、10分後な。ばっくれんなよ」

携帯を切ると、鈴木は運転する金髪男の後頭部に向かって、「ナベシマ公園だそうです」
と言った。刈り上げ男が、「池に亀がいる公園だったな」とひとりごとのように付け加えた。
山手通りから左に折れ、公園の少し手前でクルマを停めた。人通りはほとんどない。

鈴木だけが車を降りると、迷彩柄のパーカーのフードですっぱり頭を隠し、公園の中へとぶらぶら向かった。

やがて公園の反対側から、池を回り込むようにして、パリッとした青いシャツとコットンパンツをはいた少年が鈴木に向かって歩いて来るのが見えた。まるで足におもりがついてるかのよう、ゆっくりと、ひきずるようだ。つるんとした人形のような顔だちだが、その顔色が真っ青なのが遠目からもわかった。

少年は鈴木の前で立ち止まった。あわててムースで整えたのか、長めの髪の房のいくつかが小さな角のように飛び出していた。

「クルマんなかあるから」

そう言って、鈴木は公園を出た。少年が従順に従うのを背中で感じながら、鈴木はクルマまでやって来ると、後ろのドアを開け、「入れ」とアゴをしゃくり上げた。

少年はおずおずとドアの中からだをかがめて乗りこんだ。

後ろの座席には助手席から移動した刈り上げ男が座っていた。鈴木と二人で少年をはさむと、クルマは走りだした。

少年が驚いて両脇の凶暴な顔をかわるがわる見つめた。

「心配すんなよ。ちょっと、ひと目のないところに行くだけ」と鈴木が言った。

クルマは数分ほど走ると、代々木公園の大きな駐車場に入ってしまった。

少年の目が少し安心したような色を見せたのもつかの間、あたりに人がいないことを確かめた刈り上げ男がすごみをきかせていった。

「袖をめくれ。シャツのだよ」

少年は意味がわからず刈り上げ男を見つめると、鈴木が少年の左腕のシャツの袖をひじの上まで無理やりまくりあげた。刈り上げ男の右手にはどこに隠していたのか、小さな注射器があった。

少年は、「やめて、やめて」とかすれた声で抵抗したが、鈴木がはいじめにすると、

あきらめて力を抜いた。その青白い腕に、刈り上げ男は注射器の針をしずめ、プランジヤをゆっくりと押した。透明な液体が注射器の中からなくなって消えると、刈り上げ男は無表情に注射器を引き抜いた。

少年はぐったりとして頭をのけぞらせ、足を投げ出し、クルマの天井を力なく見つめた。口は半開きになり、目はしだいに陽気な輝きを見せ始めた。頭の中で音楽が流れ始めたのか、少年はリズムカルに頭を前後に揺すり始めた。

鈴木は覚せい剤が人を別世界に連れ去るさまを見るのが嫌いだった。まったく違う人間へと変貌し、しかも羞恥心やプライドも何もかも脱ぎ捨て、ただの肉のかたまりのようになっていくのを見るのは、恐ろしく、汚らわしかった。

鈴木はいつも思うのだ。覚せい剤にだけはぜったいに手を出さないぞと。

「まだここにいますか？」と鈴木は刈り上げ男に聞いた。

「おう」

「飲みもん、買ってきてもいいですか？」

「おれにも、缶コーヒー。つめてえの」

運転席の金髪男も「おれにも」と振り向いて言った。

「ういっす」と鈴木は周囲を用心深く見まわしてから、クルマの外に出た。

自動販売機は駐車場を出てすぐの公衆トイレのそばにあった。ぶらりぶらりと鈴木は歩いて行く。さわやかな春の風が鈴木頬をなでまわし、ほっとするような木々の香りが鼻から入ってきた。そのつかの間の解放感が鈴木を逆泡立てた。

なんか違う。鈴木は思った。

ただの手下じゃん。ただの使いっ走りじゃん。だれかのためにいつも走らされて。たたかれることだってあるしよ。しかも、肝心なことはなんにも知らされねえ。会社でペコペコしているサラリーマンの親父と一緒にじゃん。わけのわかんねえ宗教かなんかのために1日中出かけてばかりのおふくろと一緒にじゃん。

オレの胸の中には吐き出したい黒々としたものが何トンもあったんだ。その黒いものを吐き出せば、親父もおふくろもセンコーも反省してオレにあやまってくれるはずだった。悪かった、一輝、オレたちが悪かった、と。そして黒いものを大量に吐き出したオレは、気分よく、ほんとうのオレに戻るはずだった。

だのに、黒いものはたまる一方だ。頭にくる。理由はわからないが、頭にくる。何もかも壊してしまいたい。世の中がぜんぶ壊れてしまえばいい。オレにはカンケーねえ。

自動販売機にコインを入れて、缶コーヒーのボタンを押す。1本、2本、3本。取り出し口にたまった缶を苦勞して取り出すと、右手に2本、左手に1本を持って鈴木は駐車場のほうに歩き出した。

そのとき、目の前を白いクルマが通り過ぎ、駐車場のゲートをくぐっていった。カミさんが乗っているクラウンだと鈴木は思った。

急に腹が立った。あのガキのために働かされている。その怒りが左手につたわり、缶コーヒーがへこんだ。

白のクラウンは鈴木が乗っていた赤のクルマに横付けされると、わずか数秒でまた走り去った。カミさんは、命令が実行されたかどうかをクルマの窓越しに確認しに来たのだと、鈴木にはわかっていた。

へこんだ缶コーヒーを手にしてその様子をじっと見ていた鈴木の前を、その白いクラウンがもう一度、こんどは逆方向に通り過ぎるとき、プツと短くクラクションを鳴らしたのを鈴木は腹立たしく聞いた。

しんとしたケプラーハウスの自分の部屋で、エミルはベッドに横になり、呼吸をゆっくり繰り返し、この現実にも重なり合ったもう一つの現実に入り込もうとしていた。そのもう一つの現実を通じて、ハヤタと名のる少年と言葉を交わせるはずだ。

部屋のカーテンをしめ、電気を消した薄闇の中で集中しようとするが、近所から聞こえてくる工事の騒音が気になった。エミルはベッドを降りてデスクの引き出しを開け、耳栓を取り出し、両耳に差しこんだ。海に潜ったときのように、外の音は遠くに押しやられ、自分のからだの音だけが聞こえた。

サイドテーブルの上のハトホル像に向かって「手伝ってください」とつぶやき、それからベッドにもう一度仰向けになり、手を胸の上で組み、目を閉じて、そしてまた集中した。頭のとっぺん、まぶた、耳からつま先まで、全身から力を抜いてゆく。そして、ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり呼吸をくりかえす。

エミルは光のエネルギーを大地から吸い上げるイメージを描く。その光は脊髄を通して流れていき、頭のとっぺんからいったん外に出て、それからシャワーのように自分の周囲に降り注ぎ、光の繭をつくる。

エミルは、そうやってイメージで光の繭を時間をかけて作りあげていく。

すると、光の繭は異次元の世界でのリアリティーとなり、エミル自身が光の繭になる。

やがて自分の手がどこにあるのかも、足がどこにあるのかもわからなくなり、自分のからだの存在が感じられなくなると、ふと意識を失ってしまいそうな時間がやってくる。それでも、エミルは自分の意志と記憶を保とうとギリギリの位置で立ち止まる。たそがれのような、眠りと目覚めのあいだの意識を保たなければならない。そうしないとトランス状態は、サーチライトでプラネタリウムの星々を照らしたかのように消え去ってしまう。

エミルは異次元への入り口である真つ暗闇の広間にやって来た。

その暗闇の黒色が、黒色の風にそよぐ森の木々のように揺れ動く。

遠のきそうな意識の中で、エミルはハヤタを呼び続けた。

ハヤタ君、ハヤタ君、聞かせて、キミの話を。

闇の中に、少年の顔がぼんやり浮かんだ。その顔は消えかけたかと思うとピントを結び、そしてまた消えかけた。

それから、少年の全身が見えた。

坊主頭と呼んでもいいほどの短髪、日に焼けた精悍な彫りの深い顔、細く長い眉の下のアーモンド型の目、顔の小ささにくらべて高すぎる鼻、大きな口、優雅な曲線を描くアゴ。

エミルは思った。能流登家の顔だと。

少年の背後にだれかが立っている、背の高い人だ。だが、ぼんやりして顔がよくわからない。

すると少年、つまりハヤタが口を開き、その言葉ははっきりと頭の中で音になって響いた。

「オレの夢の中におまえは誰？」

心の中で「エミル」としつかり答えた。

これまで、「殺してくれ、自由にしてくれ！」と一方的に訴えるだけだったハヤタが、いまは穏やかだ。

「あなたはどこにいるんですか？」という質問をエミルは念として送った。

ハヤタからは答でなく、「キミは誰？ 生きているのか？」という質問がやって来た。

「生きている。名前は能流登エミル」

そうエミルは強く念じた。

「生きているのにどうしてオレの夢の中にいる？ オレは死者としか話したことがない」

「わたしは死者の世界と行き来できる」

「オレと同じだ」

「助けたい」

「なぜ？」

「苦しそうだから」

「どうしてわかる？」

「あなたがわたしにメッセージをくれた」

「おぼえがない」

「殺してほしいというメッセージを毎日何度も受け取った」

「いまも……」

「……」

「殺してほしい」

そのメッセージとともに、ハヤタはエミルにもう一つの姿を見せた。

ハヤタは病院のベッドに、チューブだらけのからだを静かに横たえていた。その肉体は死体のようにピクリともしない。

直後、エミルはとてつもない恐怖の感情を味わった。いや、味わわされた。

それは生きてまま棺に入れられ、土の中に埋められたような、気も狂わんばかりの絶望だった。

死体のような自分の肉体に閉じ込められ、縛りつけられた魂、それがハヤタなのだ。

「ふえいぱりつとを死なせてくれ、ふえいぱりつとを死なせてくれ、母さんに伝えて、母さんに伝えて」

それから切れ切れのイメージがエミルの心を襲った。

飛んでいく。自分が飛んでいく。いや飛ばされていく感覚。

長い髪をまん中でわけ、両肩に垂らした少女の顔。

そしてまた空中を飛んでいく感覚。

突然クネクネと折り曲がる光。

恐怖、恐怖、恐怖が岩石のようにのしかかる。

そしてまた蛇のように光がクネクネとして動きまわり、そしてはじけ飛ぶ。

静けさ。暗闇。ほのかに浮かび上がる少女の顔。

……

エミルの意識が遠のいた。

……。

ふと部屋のベッドの上にいる自分を思い出し、エミルは目を開けた。

サイドテーブルの時計を見た。11…10 A・M。ハヤタとのコンタクトを始めようとしてから、40分もたっていた。

カーテンとカーテンのすき間から洩れ入る一筋の光線を目で追うと、ベッドと自分のおなかの上を横切ってドアと床のあいだで止まっていた。

高村兄弟は食堂でセーヌ川の遠隔透視の結果を待っていた。

もうじき12時。

いまは大きなテーブルには兄弟と、鈴木発見のための出勤を待っているカメラさんしかない。隣の調理室にも人の気配はなく、他の住人たちはそれぞれの部屋でそれぞれのなすべきことをなしているのだ。

1時間ほど前、兄弟はこの食堂でアンジェリーナの「授業」をうけていた。

彼女が教えてくれたところによれば、全員の食事や掃除は佐藤さんという家政婦さんが担当しているのだそうだ。

「佐藤さんはきわめて、極度の、信じられないほどの恥ずかしがり屋なので、キミたちがいる限りけっして姿を現さない」とアンジェリーナはニヤリとした。「でも、朝食だけは村松さんというひとがつくっているの」

「野菜ばっかりの朝ご飯でしたね」と弟が言うと、アンジェリーナは笑いながら「村松さんはベジタリアンだから、野菜が多くなるの」と答えた。

「どうりで」と兄は納得した顔をした。

「早起きの村松さんは毎朝15キロ走って、それからみんなの食事を作って、それが終われば自分の部屋に戻って研究さんまい」

「なんの研究ですか？」と弟がたずねると、アンジェリーナはしばらく考え込んで、「いいわくいいがたい」と答えた。「宇宙とは何か、人間とは何か、人は死んだらどこに行くのか、キリストとは、ブツダとは、物質とは何か、心とは何か、意識とは何か……ま、ゼーんぶ」そう言ってアンジェリーナは微笑を浮かべた。

兄は気が遠くなる思いがした。

「安藤先生は」と弟が口を開くと、アンジェリーナが「アンジーでいいよ。みんな、そう呼ぶから」とウィンクしたので、弟は何を言いたかったのか一瞬忘れてしまった。

「なに？」と兄が弟をせかした。

「あ、えーと、部屋に難しそうな本がいっぱいありましたけど、なんの研究をしているんですか」

「わたし？ 話せば長いなあ。キミたちは他人に無用に言いふらさないだろうと信じて言うならば、まず、大学生の頃、不思議な経験をした。わたしね、金縛りにあうことが多くて、その夜も疲れていたせいかな、うとうととしていたら金縛りにあいそうになったの」

高村兄弟の目が輝いた。

「わかるのよ、からだがしびれてきて、すーっと全身から力が抜けていくような気がして、その反対に意識だけはものすごくクリアになる。よく、肉体は寝て、意識だけが起きていく状態というけれど。」

そのとき、ふといつもの金縛りと様子が違うと感じたの。なにか、音が聞こえるのよ。遠くから、ピー、ザーって、シンセサイザーのような音がね。そのとき、わけも無くなぜかこう思ったの、この音を聴けばいままで体験したことのない体験ができるんじゃないか。

それで、その音に注意を向けたの。そうしたら、その音が突然轟音になってわたしを包み込んだ。その直後よ」とアンジェリーナは言葉をいったん切った。高村兄弟が身を乗り出す。

「わたしは空中に浮かんで下を見おろしていた。そこにはベッドに横たわる私があった。正確に言えば、銀色の蜘蛛の糸のようなこまやかな繊維でできた繭のような形をした『わたし』がいた。ベッドや家具や部屋の様子は、現実のものとまったくかわらない。リアルさも、こうやっていまキミたちという現実とまったく同じだった。ただ、わたしの視点は空中にあって、ベッドの上には、まるでマイクロンの細さの銀色に光るワイヤーでできたような人型の繭があった。そして、わたしはその繭が自分だと確信していた。そうやって、わたしは『わたし』を数秒間、見おろしていた。唐突に恐怖感をおぼえた。その直後、わたしはまた金縛りの状態に戻った……。それ以来、わたしが見たものは何かというのが宿題になったの。それがきっかけ。ま、村松さんみたいに、わたしも、人間ってなんなのか、生きるってなんなのか、死ぬってなんなのか、そういうことに強い関心がある。それをわたしなりのやり方で研究しているってことね。その後、他にも、いろいろな不思議な体験をするようにもなったわ」

「あの、アンジーさんが体験したのって、幽体離脱ってことですか？」と弟が聞いた。

「ま、そう言ってもいいかも。実は大澤君が得意なの。彼ね、『幽体離脱入門』という本を出しているのよ、スゴイでしょ」とアンジェリーナは無邪気な笑みを浮かべた。

「魂がからだを抜け出すわけ？」と兄が聞いた。

「みんなそう言うけど、人間というものはそれほどシンプルじゃないの。肉体という器の中に、魂という目に見えないパイロットみたいなのが入って肉体を操縦している。そういうイメージはある意味、正しいけど、別の視点から見れば、完全に間違っている。これは、もっと複雑で、実に深遠な構造の話なのよ」

「んで、さっきの銀色の繭って、なんだったんすか？」と兄が聞いた。

「エーテル体よ」

高村兄弟の目が点になったのを見て、アンジェリーナが笑った。

「ルドルフ・シュタイナーという神秘哲学者がいたんだけど、彼は人間というものは4つの層からなり立っていると聞いたの。肉体、エーテル体、アストラル体、そして自己。グルジェフという神秘哲学者はね、これをイスラム教神秘主義のたとえを使ってこう表現したわ。馬車、馬、御者、そして主人。シュタイナーもグルジェフも同じことを言っている。

幽体離脱はエーテル体より上が肉体から離れてしまうことと言ってもよいかもしれない。死ぬということもほぼ同じことを意味するけどね」

「金縛りってなんなんですか？」とこんどは弟が聞いた。

「金縛りっていう状態自体は別に不思議でも何でもないの。さっきも言ったけど、肉体は眠っているのに、意識は目覚めているという状態。でも、神秘的な体験をするには、この金縛り状態は最適なわけ」

「どうしてですか？」と弟。

「昼は星は見えないけど、夜にはたくさん見える。なんで？」

「昼は太陽の光が強すぎて星の光がかき消されるけど、夜は邪魔な太陽の光がないから」と弟が答えた。

「うん。それと同じことなの。肉体が目覚めていると、わたしたちの意識は肉体から送られてくる感覚情報の処理に忙しくて、微細な情報は受け取れないでしまう。昼に星の光が見えないようにね。ところが肉体が眠ってしまうと、感覚からの情報が脳に入ってこない。すると、これまでは見過ごされていた微細な情報が意識に届けられるようになる。夜の星の光のようにね。それらの情報は、肉体の感覚に依存しない、いわば異次元からの情報な

の。だから、金縛りにあうと、不思議な体験をしちゃうわけね」

「なんとなくわかりました」と弟が言う、「オレ、さっぱり」と兄は口をへの字にした。「悪霊って、いるんですか？」と弟はまた質問した。

「うーん、そりゃあ宇宙はでかいから、いろんな存在がいるでしょう。『リング』の貞子みたいな存在もいるけど、貞子みたいな凶暴な力は持っていないから心配無用。だいいち、みんな、もとは人間なんだから。貞子だって人間でしょ」

「じゃ、悪霊が取り憑くってことはないんですね？」とまた弟がたずねた。

「取り憑くことはあるわよ。こんなふうにかけてみたら？ 人間のからだの中ではたくさんの細菌が生きているでしょ。乳酸菌とか、聞いたことがあるでしょ？ でも、それを細菌に取り憑かれているなんて言わないよね。だって、その細菌がいなきゃ私たちは生きていけないし、細菌と共存してはじめて私たちの肉体は維持できるんだから。それと同様に私たちの意識にもいろんな存在の想念や言葉が取り憑いている。その影響をわたしたちの意識は受けている。でもね、一番強力なのは生きている人間の影響よ。悪霊なんて、生きている人間とくらべたら屁みたいなものよ」

「屁、ですか？」と兄が言った。

エヘンとアンジェリーナはせき払いをしてから続けた。

「ただしね、エミルみたいに、いわゆる靈感の強い子っているでしょ？　そういう子は霊的存在への感受性が強いから、逆に大きな影響を受けやすいんだ。わたしたち凡人には屁でもないような存在でも、霊的感受性の強い人間には大きな力を振るうことができるの。その中には、性格の悪い奴もいる」

「たとえばどんな奴ですか？」と弟がからだを乗り出す。

「簡単に言えば、この世に未練があつて魂の故郷に帰りきれないでいる存在。生きているときに不幸な目にあつて怒りや恨みと一体化してしまい、周囲を正しく認識できなくなつてしまった人が多い。その人たちを救えるのは、魂の故郷の天使的存在ではなく、むしろわたしたち物質界に生きている人間なの。そういう悪霊みたいな人は、天使のような存在よりも、わたしたちのような物質存在のほうが見えやすい。だから、エミルのような人が、その人の話を聞いてあげて、意識を物質の次元より上に向けてあげる。すると、天使的存在が見えてくる。あとは、その天使的存在にまかせるだけ。悪霊は戻るべき世界があることを思いだし、天使的存在に連れられて魂の故郷に帰っていく。成仏させるっていうでしょ？　わたしの読む本には、リトリーバル、救出と書いてあつたけどね」

「へえ……すごい」と弟は感嘆したようにため息をついた。

「つーことは、人間は死んだらその魂の故郷つーところに帰るわけ？」と兄がきいた。

「ロマンチックに言えば、そういうこと。あのね、つまりだね」と言いながらアンジェリーナは席を立つとピアノのところに向かった。ピアノの屋根に積まれている楽譜のすきまからU字形の一本の音叉を取り出した。

「これ、音叉。知ってるよね？ これはAの音の音叉ね。おなじAの音をピアノで弾くと……」と、アンジェリーナはピアノの鍵盤を一つ、たたいた。ポーンと音が鳴り、同時に、音叉もピーンと鳴り響いた。

「ね？ 音叉がピアノの音に共鳴して、叩いてもいないのに鳴ったでしょ。じゃ、こんどはBの音の鍵盤を叩いてみるわよ」

アンジェリーナは一つ右隣の白鍵をたたいてポーンと音を鳴らした。こんどは音叉はどんな音も発しなかった。

「音叉は共鳴しなかった。音叉は自分と同じAの音にしか共鳴しないからよね。この音叉が人間だと考えてみて。人間も共鳴することによって世界を知ると仮定したら、Aの音叉がAとしか共鳴しないように、一つの世界にしか共鳴しないことになる。とすれば、Aの

世界の他に、Bの音の世界があっても、永遠にその世界に気づくことはできないということになるでしょう。この物質世界に生まれてくるといことは、だから、このAの音叉になってAの音世界に入るといことなの。そして、死ぬと言うことはAの音叉であることをやめて、Bの音叉へと移動していくこと。AとBのあいだには黒鍵のAシャープ—Bフラットでもいいけど、半音の世界があるでしょ。そこを通ってBの世界、いわば霊界に行くわけだけど、この途中のAシャープの段階でグズグズしている人が、さっきいった悪霊だったり、怨霊だったりしているわけ。多くは自分を見失ってさまよっている善良な人たちなんだけれど……。わかった？」

「はい」と弟が言うと、「なんとなく」と兄はもぞもぞした。

「エミルのような人間はね、Aの音叉の他に、AシャープやBの音叉も生まれながら持っている人間と考えるとわかりやすいわね。ルミさんとセーヌ川も似たタイプ。ルミさんはレントゲン付サイキックで、セーヌ川は遠距離リーダーね。大澤君もある意味、サイキックかな」

「なんすか、それ？」と兄が眉をあげてアンジェリーナを見た。

「ま、そのうち、わかるわ。そしてね、ここが大事なんだけど、世界はAとBだけじゃな

い。このピアノの鍵盤のように、上にも下にももっとさまざまな段階の世界、宇宙が存在するということよ。人間はAの世界で冒険するためにやって来た、より大きな存在の分身と考えるといいと思うわ。もっとわかりやすいたとえで言うと、わたしたち一人一人は母艦から切り離された探査機なの。探査が終われば、つまり人生をまっとうしたら、探査機は母艦に戻る。それが死ぬということ」

そしてアンジェリーナはちよつとまじめな表情になった。

「キミたち。一生懸命体験するのよ。楽しい体験も、苦しい体験も、すべてが大事。大事じゃない体験は一つもない。失敗だって、悲しみだって、とっても大事だ。だから、へこたれるな。人生は面白いよお」

そう言って、アンジェリーナはまたウィンクした。こんどは兄弟そろってドキッとした。それから、エミルのママについて兄が質問を始めた。この建物と短い渡り廊下で能流登家のもう一つの家が結ばれていて、エミルのママはそちらで暮らしているということだけはわかったが、「あとはカメ君に聞いて」とアンジェリーナは面倒くさそうに席を立ち、自分の部屋に戻っていった。

兄弟がそろってカメさんに視線を移すと、それまで分厚い本を無心に読んでいたカメさ

んがおそろるおそろる顔を上げて「なにか？」と兄弟に言った。

「カメさんはどうしてここで暮らしているんですか？」と弟がきいた。

「いきなりだなあ」とカメさんは苦笑して、「話が長くなるからなあ」と本をパタンと閉じた。

カメさんはずりおちた眼鏡の位置を直すと、のんびりとした口調で話し始めた。

「キミたちは知らないと思うけどさ、むかしむかし、スイスにカール・グスタフ・ユングという精神科医がいたんだよ。分析心理学という学問を打ち立てた人でさ、歴史に残る有名な人だ。 Emil のひいおじいさんのグスタフ・ノルトって人もスイス人で、そのユング博士と同じバーゼル大学で学び、ユング博士と仲良しだった。ま、ユング博士よりは少し若かったけど、人間の心とはなんなのかって、若い頃からともに議論をし、研究成果を分かち合ったという間柄だったんだよな」

「それ、いつ頃の話ですか」と弟が聞いた。

「日本で言えば、明治から大正にかけてだね、二人の友情が続いたのは。で、ふたりとも

東洋の哲学や宗教にとっても関心があった。そんなとき、エミルのひいおじいさんに、日本政府から日本の大学で精神分析について教えてほしいという依頼があった。もともと東洋に強い関心を持っていたエミルのひいおじいさんは、渡りに船とばかりに奥さんともども日本にやって来た。それで、エミルのひいおじいさんはいまの東大の先生になった。彼は関東大震災で大学の研究施設がめちゃくちゃになってしまうと、自分専用の研究施設を持ちたいと考えた。それで建てたのがノルト病院で、それがつまり、こことってわけさ。当時はここらへんも家なんかなくて、畑と林しかないところだったらしいよ」

「へえ〜」と兄弟はそろって感心したように声を上げた。

「で、ひいおじいさんのグスタフさんは戦争が起きてもスイスに帰らず、戦後、日本国籍を取って日本人になった。で、そのひいおじいさんの娘と結婚したのが、つまりエミルのおじいちゃん、日本人で内田玄明さんという人。養子になったので能流登玄明という名前になったんだけど、彼もまた精神科医で、グスタフさんの使命を受け継いでだね、東大で教えつつ、このノルト病院を守った。グスタフさんご自身は戦争が終わって10年ぐらいして亡くなるんだけどね。で、ぼくの父親だけどさ、その玄明さんの弟子なんだよ。つまり、東大で玄明さんの教え子だったのさ。ぼくの父親はいまは田舎で病院をやっているけ

ど、ま、そのご縁があって、こちらで世話になっているというわけ」

「すげえ、カメさんのお父さんって東大なんだ」と高村兄弟の兄が目を丸くした。

「たいしたこと、ないよ。昔は入るのが簡単だったと思うよ」

「カメさんも精神科医になるんですか？」と弟のほうぎきた。

「いちおうね、そのつもり」と言うときカメさんはほーっと息を吐き、「本を読みたいから、もう、いいかい」と兄弟を上目づかいで見た。

「あ、はい」と兄弟がそろって返事をする、カメさんの携帯が鳴った。カメさんはモゴと何ごとかを携帯に向かつて言い終えると、「じゃ、行ってきます」と席を立った。

どこに行くんですかと聞きたい気持ち呑み込んで、兄弟はカメさんの丸まった背中を見送った。

それからかれこれ1時間、高村兄弟はボーツと食堂でセーヌ川の登場を待ち続けたというわけだった。

兄弟の父にはさっき一度電話を入れた。フリーライターをしている父は、休日のきょうは原稿を書くからおまえたがいないほうが集中できていいと電話口で笑った。

弟の国語や数学が得意なところは父に似た。一方、兄の美術や音楽が得意なところは、

イラストレーターだった母に似た。

母と父の共稼ぎだったときは家計は安定していた。ところが母の死後は、今の中古のマンションの頭金と兄の入学金は母の保険金でまかなうことができたが、不安定な父の収入では弟を私学に入れる余裕はなかった。せめて兄と同じ鷗星にと父は考えていたようだが、父の仕事も減り、出版不況で原稿料も下がると、弟は公立ということが暗黙の了解になった。だから、弟は塾にはもはや通っていない。

つまり、兄弟そろって、きょうも一日中、自由だ。

お腹が空いたなと兄弟が思ったころ、ようやくセーヌ川がエミルとアンジェリーナといっしょに食堂に戻って来ると、大テーブルに並ぶように座った。

兄弟は試験の成績を聞くときのように、緊張してイスに座ったまま背筋を伸ばした。

セーヌ川が言った。

「キーワードがいくつか」

エミルとアンジェリーナが重々しくうなずいた。

「わたしの主観が入っていると思われるものはのぞきます」

セーヌ川は手にしたノートを開き、まつげの長い目を落としました。

「大きな神社が見えました。太陽と関係の深い神社です。富士山が見えました。ほぼ真西に」

「どうして真西だとわかったの？」とアンジェリーナがきいた。

「富士山の頂上の少し右に日が沈むのが見えましたから……。春分の日から1カ月しかたっていないでしょ」

「ああ、なるほど。日没の場所が頂上から少し北にずれて見えている。ということは、春分の日にはダイヤモンド富士が見える場所はずだと。つまり、真西に近い地点だというわけね」とアンジェリーナが納得したようにうなずいた。

「そうです。それからですね、病院の中のような窓から住宅街と小さな川、そして高速道路が見えました……。ごめんなさい、確実なのはこれだけ。あとはブリュイ、雑音」

長い沈黙の後、アンジェリーナの顔が突然パツと輝いた。

「意外と簡単ななあ。富士山が真西に見える。つまり、富士山の真上を通る東西の線上にそれはあるということですよ。とすれば、ご来光の道の上にある神社ということになる」

「ご来光の道？」とセーヌ川がアンジェリーナを見た。

「ご来光の道というのは、北緯35度22分上を東西に走る直線のこと。春分と秋分の日には、

千葉の玉前神社の真東から昇った太陽が、富士山の頂上を通り、いくつかの遺跡や神社を通過して出雲大社の真西に沈むのよ。それがご来光の道。この直線上に位置する神社の近くということじゃないかしら」

「さすが、アンジー」とエミルが笑顔を浮かべた。

「それがもしも大きな神社だとすれば、選択肢は限られる。関東近辺なら、上総国一之宮の千葉の玉前神社、それと相模国一之宮の神奈川の寒川神社だけ。……ちよつと待ってて、マックブックを持ってくる」と言い残して、アンジェリーナは食堂を飛び出た。

兄が言った。力が入っていた。

「オレらが行くんだよね、安田に会いに？」

エミルが黙ってうなずいた。

「会ってくれるかな、安田……」

誰も返事はしなかった。

アンジェリーナが戻ってきて、テーブルの上にマックブックを広げた。

「グーグルマップで見よう。まず、玉前神社。拡大すると……そばを小さな川が流れている。ここかなあ？ ……寒川神社のほうを見てみるね。……ああ、こちらもそばを川が流

れている。どちらもありうる。でも、富士山がよく見えるということは、寒川神社かな

……」

「その近くに病院は？ 精神科で入院できるような……」とエミルは立ち上がってマックブックをのぞき込んだ。

「ちょっと待ってね。……病院、病院、病院。……あった。北湘病院」

「精神科はある？」

「北湘病院、北湘病院。……あるわ。むしろ、精神科がメインの病院ね」

「あおう」と弟が言った。「高速道路は？」

「あるわ」とアンジェリーナがマップを上下に指でなぞった。

「病院のすぐ西を圏央道が通ってる」

「決まりだね」とエミルが言った。

全員が大きくなずいた。

覚せい剤で異様な興奮状態におちいった中学生を乗せ、彼の自宅近くまで戻って来ると、

鈴木は刈り上げ男と二人でクルマからその少年をかかえ降ろし、大きな家の玄関前に置き去りにした。

走りだしたクルマからうしろを振り返ると、少年が道ばたで乾電池で動くロボットみたいにピョンピョンと跳びはねているのが見えた。

すぐに家族に見つかり、そして家の奥深くに隠されるんだろうなと鈴木は思った。体面があるからどの家も警察には届け出ない。自分の子どもが万引きしたとしても、誰もそれを知らなければそのまま隠しておくのと一緒だ。

鈴木は思った。覚せい剤がどんなに怖いものなのか、だれも知らないのだと。

鈴木たちは代々木まで走ると時間貸し駐車場に車を入れて、昼食にした。

小さな中華料理店で、テーブルが油でヌルヌルしていた。

「お姉ちゃん、だいふき」と金髪男は言っただいふきをもらうと、神経質そうにテーブルの上をふいた。店内はちょうどお昼の忙しさが引いたところで、6つあるテーブルの半分が空いていた。

注文をし終わると、鈴木がテーブルをはさんで目の前の刈り上げ男にこう聞いた。

「中学生、クスリ漬けにするのって、いつまでやるんすか？」

「声がデケエよ」と、刈り上げ男の目がとがった。

鈴木はぺこりと頭を下げた。

「聞いた話だと、ちかぢか、メインイベントがあるってよ」

「メインイベントっすか？」

「それが終われば、中坊いじめもおしまっただってよ」

「なんすか、メインイベントって？」

「知るか」

すると金髪男が「殺しじゃろか？」と声をひそめてきた。

「アホか」

「カミさんがらみっすか？」と鈴木が聞くと、刈り上げ男は黙ってうなずいた。

「クソ……」と、鈴木は吐き出した。

「オメエが大事なら、あのガキのこと、忘れたほうがいいぞ。オメエより年下だろうけど

よ、組織にとっちゃん、オメエよりあっちのほうが百万倍大事だべ」

鈴木はくちびるをかんだ。

それから中華丼と餃子を食べて、店の外に出た。

クルマに戻って、ひとごころつくくと、刈り上げ男の電話が鳴った。「へえへえ」「ういーっす」と返事をしながら書きとめたメモを、電話が終わると後ろの席の鈴木に渡して寄こした。

「またっすか……」

メモを見た鈴木はそう言うのと、大きな伸びをしてあくびを一つした。

刈り上げ男が金髪男に「三茶だ」と言った。

金髪男はエンジンをかけ、ゆっくりとクルマを出した。

山手通りに出て南下し、途中の富士見坂で右折し、近道を行った。

しばらく狭い通りを走り、それから左折して少し行くと金髪男は「あっ」と叫んだ。

「バガヤロー、一通じゃねえか！」と、刈り上げ男が怒鳴った直後だ。50メートルほど

前方に突然、パトカーが姿を現した。

「やべ。バックしてさっきの道にケツ入れて止めろ」と、刈り上げ男が金髪男に早口で命

令し、そして鈴木に向かつて「ブツ持って消えろ。まわりに怪しまれるな！」と叫んだ。

クルマはバックで右折してパトカーからは見えない位置で止まると、鈴木は薬物を入れ

てある黒のリュックを引っつかんでクルマの外に飛び出た。サイレンの音が聞こえた。ド

アをボタンと閉めて、鈴木は早足で反対方向へと歩き出し、最初の角を曲がって路地に入り、姿を隠した。心臓がドクドクとはね、全身が鳥肌だったかののようにピリピリした。おそらく今頃は、刈り上げ男と金髪男の二人は警察官たちのさまざまな質問にあれこれすつとぼけているはずだ。いざというときのためにクスリや注射器は黒いリュックの中にぜんぶまとめてあった。危ないものは何も残していないはずだから、交通違反だけですぐに解放されるだろうと鈴木は考えたが、それでも不安でたまらなかった。

鈴木はリュックを背負うと、変わらないペースで歩き続けた。途中、何度か後ろを振り返ったが、鈴木を追ってくるパトカーも警察官の姿もなかった。

やがて大きな通りに出た。国道246だと鈴木は思った。迷彩色のパーカーのポケットから携帯を取りだし、時間を見た。午後3時10分。30分は歩いた。

刈り上げ男に電話しようかと思ったが、やめた。もしもまだ取調中なら、まずいことになる。電話が来るのを待とう。

左に行こうか、それとも右に行こうか。どっちにしても広い通りを歩いて行けば、そのうちどこかの駅に出るだろう。そう考えた鈴木は右の方向に歩き出した。

やがて、マクドナルドのサインが見えてきた。

鈴木は店内に入ると、コーラだけを買って窓際の席に座った。

携帯をテーブルの上に置いて、電話がかかってくるのを待った。

窓の外を歩き交う人々をぼんやり眺めた。祝日だからか、親子の姿が目立った。

鈴木はふと、小学3年のとき、ちょうどゴールデンウィークのいまごろ、家族で出かけたデイズニールランドでの、父と母のケンカを思い出した。母が入れあげていたナントカ教団の話でケンカが始まったんだっけと鈴木はぼんやり思った。

お城の前で言い合いになって、姉ちゃんが泣いたんだよな。声を出さしないで、ボロボロ涙をこぼしたんだよな。その涙が噴き出す姉ちゃんの目をオレはじっと見ていたんだっけ。そしてオレは腹が立って、走り出したんだ。どこでもよかった。とにかく怒りを吐き出したかったから、ただ走り出したんだ。走りつかれて、花壇のようなところで止まって、それからおレは花をむしり取ったんだ。大人につかまって、そしてやって来た親父とおふくろと姉とまた一緒にされた。その日、オレはずっと怒っていた。いろんなものに乗らされ、ゴハンも食べた。だが、オレはひとことも口をきかなかったんだ。

ケンカばかりしていた両親だったと鈴木は思った。

オヤジが「なんでおとなしく家において家事や育児ができないんだ。そんな宗教なんてまやかした」と怒鳴ると、オフクロは「あんたがそんなふうにならぬから怒鳴るから神様にすがらんでしよう」と言い返す。いつも同じパターンだ。オレには、どっちも自己中のアホにしか見えねえ。

で、テメエはなんなんだ。そう鈴木は自問した。黒いリュックを背負って逃げてるテメエはなんなんだよと。

小学生のときは自問などしなかった。ただ、何かわけのわからない衝動にしたがって、まるで動物のように暮らしていたように鈴木は思う。だが、中学生になってからは、こうやって自問するのだ。「テメエはなんなんだ」と。それは答が見つからないという苦痛といっしょに、自分の枠から飛び出すような、開放的な気分も連れてきた。

テメエはなんなんだよ……。

鈴木はじっと携帯のディスプレイを見つめた。

気がつくと4時半を過ぎていた。

ひとまず家に引き上げようかと鈴木は考えた。どうせ、家には誰もいない。

マクドナルドを出て少し行くと、三軒茶屋の駅があった。切符を買い、電車に乗る。表

参道で千代田線に乗り換えて、代々木公園で降りた。

線路に沿って歩く。途中、左に折れて坂を登れば安田の家があるお屋敷町だが、鈴木の家は線路沿いだ。

小さな踏み切りを右に見て、人けのない細い道をさらに歩く。

家が近づくにつれて歩みはのろく、視線もうつむきがちになった。

前から3、4人のグループが歩いてきた。鈴木はよけてやりすごそうと道の右側に寄せた。ところが、なぜかそのグループもまた同じ側に寄せてくる。

鈴木はその連中に素早く注意のピントを合わせた。

3人の男、ひとり頭をそり上げている。そのうしろに隠れるように一人の女。

そしてその4人はあっという間に鈴木を取り囲むと、こう言った。

「鈴木君？」

とっさに警察だと思った鈴木は逃げようとかからだをよじったが、男たちの何本もの腕と手がまるで巨大なタコのように鈴木のからだをからめとった。小柄な鈴木は3人の男たちのまん中で、力なく立ちつくした。

エミルに見せてもらった小学校の卒業アルバムの写真よりも、ずっと引き締まった顔だったけれど、その特徴のある腫れぼったい一重の目で、4人ともがその小柄な少年がすぐに鈴木だとわかった。

ルミさんが「鈴木君？」と問いかけると、その小柄な少年はとっさに逃げようとからだを反転させたが、まず大澤さんが鈴木のを腕を力いっぱいにつかみ、天道さんとカメさんが鈴木の胴体にぐるりと腕を回した。鈴木は観念したかのように、力を抜いた。

鈴木が自分たちを警察と勘違いしているようだった。クルマに乗ってもらうまでは、その勘違いを利用したほうがいいと考えたルミさんはただ、「話を聞いたら、すぐに帰す。こちらに来てください」とだけ告げた。

鈴木を数十メートルほど離れた時間貸し駐車場に連れて行くと、天道さんの黒のCX5に押し込んだ。

大澤さんとカメさんが鈴木の両脇に座り、ルミさんが助手席、天道さんが運転席に座った。

クルマは走り出し、やがて代々木公園の脇道に出た。

鈴木は黒のリュックを背負ったまま、うつむいている。度胸があるのか、それとも状況を理解していないのか、身じろぎせずに座っている。この少年がまだ中学3年生だと思いと、ルミさんは少し鈴木があわれになった。

「話を聞いたら、また家まで送るから、逃げようなんて思わないでね」

そうルミさんが言うと、鈴木は何かが違うと思ったのか、顔をかすかに上げてこう聞いた。

「警察じゃねえの？」

大澤さんが言った。

「このまま警察に行ってもいいんだけど」

「警察じゃねえのかよ」

「警察のほうがよかったか」と大澤さんがすぐみをきかした。

「おちよくんじゃねえよ。誰なんだよ、てめえら」と鈴木は負けじと声をはり上げた。

ルミさんが前を向いたまま言った。

「キミがいまされていることと同じことを、きのう、高村勇貴にしたでしょ？　そして彼の兄を呼び出して、無理やり薬を飲ませた」

「知るか」

「理由を聞かせて。なぜ？」

「知らねえよ。おろせよ、クルマから」と鈴木はからだをゆすった。

大澤さんが言った。

「警察に行くほうがオレらは簡単なんだ。どっちがいい？ 話をするのと、このまま警察に行くのと」

天道さんがハンドルを右に切りながら言った。

「いま参宮橋すぎたところだからね、あと5、6分も走れば、原宿警察だ」

何かを計算するかのように、鈴木は黙った。

ルミさんがうしろを振り向き、まばたきもせずじっと鈴木の顔を見つめ、そしてこう言った。

「わたしにはね、その黒いリュックの中に何が入っているかが見えるのよ。1ダース入りの注射器の箱が4つ。一つはふたが開いたままだわ。それから、いろんなクスリ。小さなノートのようなものもある。そのノートには赤ペンでマル秘って書いてある」

鈴木の色が見る見る赤らみ、鼻の頭と額からいくつもの小さな粒になって汗が噴き出

し、呼吸が荒くなった。

「あたりでしょ？」とルミさんは前を向いた。鈴木は何かを言いかけて口を開いたが、かわりにつばを呑み込んで口を閉じた。

交差点の信号が赤に変わり、天道さんはゆっくりとC X 5を止めた。

「ここを右折すると、300メートルで原宿警察だ。さ、どうする？」

「どうするって、なにがだよ」と鈴木はかすれた声で言った。

ルミさんが、「知っていることを教えるか、教えないか」と、ふたたび頭を後部座席にクルリと向けると鈴木をじっと見つめた。

「オレはなんも知らねえし」

「そう？　じゃその黒いリュックと一緒に警察に行く？」

「クソばばあ、調子こくんじゃねえ」

「調子こいてるのはキミのほうでしょ」

信号が青に変わった。天道さんが「あと200メートル」と言う。

「最後のチャンスよ」とルミさんが言うのと、鈴木は「わかったよ」と言ってふてくされた顔でふんぞり返ると、「そのかわり、知らねえからな。おまえら、組織につぶされてもよ。

組織は人を殺すなんてなんとも思ってたねえし。組織にはむかったらズタズタにされるまで許してくんねえし」と全員の顔をなめまわすように見た。

大澤さんが「キミもな」と言っつて、ニヤリとした。「キミがばらしたと知られたら、キミが最初にズタズタにされるんじゃないの」

鈴木は「チッ」と舌打ちして、天井を見上げた。

天道さんが言つた。「原宿警察はいま通り過ぎた。でも、忘れんなよ。このまままっすぐ行くと10分で渋谷警察だからな」

鈴木の腫れぼったいまぶたがピクピクとふるえた。

「まず」と、ルミさんは前を向いたまま質問を始めた。

「どうして高村勇貴を連れ去り、その兄を呼び出し、クスリを飲ませたの？」

鈴木は目をつむり、口をとがらし、沈黙した。

すると不思議なことに「答えなさい！！」という声が耳からではなく、自分のからだの中、心臓のあたりから聞こえてきたのだ。鈴木は飛び上がるほど驚いて目を見開いた。

「わかった？ 答えないと、いつどこでも、私は自分の言葉をキミに聞かせることができると。キミが眠っている最中もね」とルミさんは鈴木をさとすように言つた。

鈴木は手をきつく握りしめた。

「くりかえします。どうして高村兄弟をあんな目に合わせたの？」

鈴木の小さなど仏がゴクリと上下して、低く小さな声で答えが返ってきた。

「カミさんの命令だ……」

「カミさん？」とルミさん。

「カミさんて呼ばれてるガキだ」

「誰なの？」

「知らねえ。いつの間にかやって来た」

「いつの間にかって、いつ？」

「1年か2年くれえ前」

「ガキって……」

「ガキだよ。中一って噂だ」

「その子の命令ってこと？」

「うそじゃねえよ」

「理由は？」

「知らねえ。ただ言われた通りにやるだけだ」

「カミさんがキミに言うわけ？」

「ちげえ。兄貴に電話で命令する」

『「安田に近づくな』っていうのもそのカミさんの命令？」

「ああ。オレは言われたとおりやるだけだ。いつもな」

「なんで高村兄弟なの？」

「だから知らねえって。でも、前にも同じように脅したことがある。弟のほうだけだな」

「いつ？」

「1年くれえ前か。カミさんが現れたところだ。理由は知らねえけど、弟のほうをまちぶせて、おどした」

「それもカミさんの命令？」

「ああ。その場にカミさんもいっしょにいたし」

「理由の見当もつかないの？」

「まるつきり。オレら、奴隷みたいなもんだ、カミさんのよ」

「ところで、どうしてカミさんというの？」

「神様みてえな力を持つてるからだろ？」

「……超能力ってこと？」

「たぶんな。そういう話。見たことねえけど」

車内が静まりかえった。明治通りを南へと走り続けていたクルマが、渋谷のヒカリエの前で止まった。信号が赤だった。

ルミさんが再び口を開いた。

「安田君にクスリを売りつけたのはキミ？」

「はあ？ なんの話？」

「安田君にクスリを売りつけたでしょ。二、三ヶ月前に」

「売りつけてねえし。逆にアイツがオレに電話してきたんだじゃねえか、クスリ売れつてよ」

「……どうして？」

「知るか。あいつに聞けよ」

「それでキミが売ったのね？」

「売ってくれっつーのをよ、断れねえべ。安くしといたよ、同級生のよしみでさ」と言っ

て鈴木はニヤリと笑った。

クルマがまた走り出した。渋谷警察署の大きなビルが左のウィンドウごしにゆっくり遠ざかっていった。

「今も安田君に売ってるの？」とルミさんが聞いた。

「オレは最近売ってねえけど、オレらとは別の兄貴たちが安田んちに配達してるらしい。なんでだか、わかんねえけど」

「安田君が最初に薬を売ってほしいって電話してきたのはいつ？」

「忘れた。二、三ヶ月前か？」

「正確に」

「オレ、頭悪いからよ。……ああ、正月だったけかな」

「確か？」

「たぶんな」

「今までの話で、ウソ、ついてないよね？」

「ウソこいてオレが得することなんもねえし。いっとくけどよ、安田に売ったクスリ、違法じゃねえから」

「でも、違法なクスリも売ってるし、無理やり飲ませてもあるじゃない。しかも中学や高校の生徒たちに。それはどうなの？」

「……どうなのって、なにがよ」と鈴木はからだをもそもぞ動かした。

「事実でしょ？」

「……だからどうしたんだよ」

「覚せい剤を無理やり注射したりしてるでしょ？」

「知らねえよ」

少しの沈黙の後、鈴木がからだをビクッと震わせた。

「やめてくれよ。へんなことはよしてくれよ。心臓がばくつく」と鈴木はルミさんをさがすような目を見た。

「言ったでしょ。どこにいようと、わたしの言葉からは逃げられない。だから本当のことを言いなさい。ここで聞いたことは、警察には言わないから」

「わかったよ。……中学生とか高校生にヤクを飲ませて、無理やりな。でもな、それカミさんの命令なんだ。オレは本当は、やりたくねえんだ。オレ、ヤク、きれえだし。あんなもん、中毒なったらろくなことねえし」

「理由はわからないのね？」

「さっぱり。カミさんの命令だってことだけだ」

「どの学校の誰に飲ませるといいうのもカミさんの命令？」

「ああ。いちいち兄貴に連絡が来る」

「これからもまだまだするの、同じこと？」

「知らね……。つーか、メインイベント……」と言いかけて、鈴木は口をつぐんだ。

「メインイベントがどうしたの？」

「なんか近々、大きなことがあるって話で。それが済んだら、ヤク飲ませるの、やめるらしい」

「大きなことって？」

「知らねえよ。ほんとに知らねえ。さっき聞いたばっかだし」

「いつあるかも？」

「なーんもわかんね」

ルミさんは大きく息をひとつつくと、天道さんに言った。

「恵比寿から山手通りに向かって戻りましょうか？」

天道さんは黙ってうなずいた。

ルミさんはうしろを振り向き、鈴木の目をじっと見据えた。

「ここまででキミに聞きたかったことのまだ半分。あと半分聞く間に、たぶん、代々木八幡に着くと思うわ」

鈴木は無表情でうなずいた。

天道さんはハンドルを右に切って、黒のCX5を駒沢通りに進めた。

すでに夕陽は落ち、食堂のフランス窓のガラスは紫色の闇がはりついた鏡となり、鈴木
の尋問から戻ってきたルミさんたちケプラーハウスの住人の姿をモノトーンで映し出して
いた。

「やっぱり安田は自分からすすんでクスリを手に入れた……」

エミルはそう言ってテーブルの上で両手をきつく握った。

「ハヤタのことは？」とアンジェリーナが言った。

「聞けたわ」

エミルとアンジェリーナの真正面に座るルミさんが言った。

「少し込み入っている。カミさんの指示というのは他といっしょ。ただ、ハヤタの場合はカミさんの憎しみが感じられる。個人的な。わたしにはね」

「個人的な憎しみって？」とアンジェリーナが聞いた。

「ハヤタをおびき出すために、ハヤタがつきあっていた女の子を鈴木たちはまず無理やりクルマに乗せた。下校中にゆうかいしたのよ。そうしておいてから、ハヤタを電話で呼び出した。電話は鈴木がしたそうよ。あとは高村兄弟の時と同じ。女の子を助けて欲しかったら薬を飲め。ハヤタは飲んだ。ところが、女の子は解放されなかった。ハヤタだけを残して、鈴木たちは女の子をクルマに乗せたまま走り去った。ハヤタは鈴木たちを追いかけた。乗ってきたバイクでね……」

エミルが目を閉じた。ルミさんは続けた。

「ハヤタは事故を起こした。鈴木はリアウィンドウから追ってくるハヤタを見ていたんだそう。ハヤタのバイクはジグザグに走って、ガードレールにぶつかった。ハヤタはクルク

ル空中をまわって地面に叩きつけられた」

ハヤタがエミルに見せてくれた蛇のようにクネクネとうねる光。それはハヤタのバイクのヘッドライトの光跡だったのかとエミルは思った。そしてあの髪の毛の長い少女とは、ハヤタが救い出そうと追った少女なのか。エミルの胸は重い金属でみたされたように苦しくなった。

ルミさんは続けた。

「怖くなった鈴木たちは、女の子を途中で車から降ろして逃げた」

「事故はどこで起きたの？」とアンジェリーナ。

「川崎のほうって言っていたわ。よみうりランドの近く」

「ハヤタはその近所に住んでいたってこと？」とエミルが少しかすれた声で聞いた。

「わからない。でも、エミル。ハヤタの携帯の電話番号はわかる」

カメさんが「鈴木が持っていたマル秘の名簿をコンビニで全ページ、コピーしといた

その中にハヤタシュウトという名前が名簿のはじめに書いてあったんだよ」と手にしていた十数枚のコピー用紙をエミルに手渡した。

「シュペール！」とセー又川が両腕を広げた。

「……シュウトって言うんだ、ハヤタの名前」とエミルがつぶやいた。

「ただし」とルミさんは言った。「リストのほとんどが携帯の電話番号だけで住所はわからない。ハヤタもそう。わかるのは彼の携帯の番号だけ」

「ありがとう」

エミルは頭を下げた。ルミさんが言った。

「鈴木はほんとうに何も知らないのよ。すべてはカミさんという謎の少年の計画。鈴木たちは意味もわからず、ただ言われるがままに動いているだけ。鈴木が言う組織っていうものにとって、カミさんって子は何かしら大きなメリットをもたらしているんでしょね。組織は引き換えにカミさんのしたいことを鈴木たちのような下っぱにやらせている。そんな印象を持ったわ。つまり、ドラッグを使ってカミさんは個人的な復讐をしている。そのため組織を必要とするカミさんは、なんらかのメリットを組織に、いわば代価として支払っている。そんな持ちつ持たれつの関係がある。それがわたしの直感」

ルミさんはそこでいったん言葉を切ると、ゆっくりと全員顔を睨みつけた。

「わたしたちは鈴木たちの犯罪を証明できる名簿を手に入れることができました。彼らの悪事の証拠がここにありません。ということは、選択しなくてはいけない時が来たのじゃない

いかしら」

「選択？」とアンジェリーナが首をかしげた。

「そう、選択。警察に届け出るべきか、否か。私たちは知ってしまった。悪事がまさに行われていることを。それなのに口を閉じたままでもいいのか、どうか」

「ルミさんはいますぐ警察に届け出るべきという考えなのね」とアンジェリーナが言った。ルミさんがうなずいた。

黙ってうつむいていたエミルが顔を上げた。

「ルミさんの言うことは正しい。でも、もう少し時間をください。鈴木は不良で、小学校のときはオレをいじめてばかりいたけど、それでも彼はまだ中学3年生で、わたしの元同級生。万が一、情報が鈴木から漏れたとわかれば、それこそ組織は鈴木に対してなにをするかわからない。命の危険だつてある。安田のこともまだわからないし、なぜ高村兄弟が狙われるのかもまだわからない。いま警察に通報したら、逆にみんなを危険にさらす。だから、もう少し時間をください。鈴木のお安全が確保できて、そしてカミさんという子の力を封じることができるまで。カミさんという子の力に対抗できるのは警察ではなく、きっと、オレたちだけだと思っから」

エミルは言い終えると、大きく息をした。

ルミさんがうなずいた。

「エミルに賛成」とカメさんが言った。

「ぼくも」と大澤さんが言い、「おれも」と天道さんが言い、「モワオッシ」とセーヌ川が言った。

「わたしも賛成」と言ってアンジェリーナはルミさんを見た。

「賛成よ」とルミさんも笑顔で言った。

エミルがうれしそうな顔をした。

「そういえば、高村兄弟は？」と天道さんが聞いた。

「家に帰ったわ。わたしがクルマで送り届けた」とアンジェリーナが答えた。

「大丈夫かい？」と天道さんが心配そうに眉を寄せた。

「家にはお父さんもいるし」とアンジェリーナが言った。

エミルが天道さんに言う。

「あした、高村兄弟は安田に会いに行くのよ」

「えっ、安田の病院がわかったのかい？」と天道さんが目を丸くしてセーヌ川を見た。セー

又川はまつげの長い目でウィンクした。

「すごいなあ、セー又川君」と天道さんはテカテカ光る頭を右手でポリポリかいた。

「あいつら、学校は？」と大澤さんがエミルを見た。

「連休のはざまはナントカ記念日とかで休みになるの」とエミルが答えた。

「二人だけだと心配だから、僕もついていこうか」とカメさんが言った。「いちおう、僕、医者卵だし」

「いい考えね」とアンジェリーナが言った。

「あとで電話しとく」とエミルがカメさんに向かってにこりと笑った。

「鈴木は大丈夫かな」とエミルはこんどは心配そうにルミさんを見た。

ルミさんの代わりに天道さんが答えた。

「そうとう用心して、八幡神社の駐車場であいつをおろしたから、あいつの仲間に見られたということはないはずだ。念のために大澤君があとをつけたけれど、誰にも尾行されている様子もなく、家の中に消えていったそうだ」

ルミさんが言った。

「私の携帯の番号を教える。なんかあったら電話してって。助けるよって」

エミルの顔がパッと明るくなった。

八幡神社の駐車場で解放された鈴木は家に向かった。

小さな建て売りの一軒家には電気はついておらず、案の定、誰も帰ってきていない。祝日だというのに、家族はバラバラに出かけたままだ。姉もどこかに泊まりに行っただけだし、オヤジは仕事かゴルフか。母親はこの家にかげられた呪いを解くために、鈴木がどこにあるかも知らない教団に出かけているにちがいない。母親によれば、鈴木自身が呪いの印、前世のカルマの結果なんだという。そのカルマを帳消しにするために教団に入ったのだと母は言う。鈴木はその話を聞く度に、順序が逆だとも思った。

二階の自分の部屋に行き、ベッドの上に黒いリュックを降ろし、パーカーのポケットから携帯を出してディスプレイを見た。着信はなかった。

組織を裏切ってしまったという恐ろしさからだが引き裂かれそうだった。

背筋がブルブルと震えた。

屈辱や怒りや、恥ずかしさや恨みや、そんな感情とはいっても親しくしていたが、振り返ってみれば、心の底からの恐怖というものは今初めて知ったのかもしれない。

とにかく連絡を待つしかない。

鈴木はベッドの上に仰向けに転がった。

天井を見ながら、さまざまな可能性という考えにふけた。

裏切りがバレた場合。バレなかった場合。兄貴たちがパクられた場合。パクられて自分のことも警察に知られた場合。自分はどうなるのか？ どこに逃げる？ 捕まったら？ 組織は自分をどうする？ 少年院のままで追いかけてくるだろうか？

そのとき、携帯が鳴った。時計は7時をまわっていた。

ディスプレイを見る。兄貴だった。鈴木はほっとして通話アイコンをタップした。

「もしもし」

「オレだ」

「大丈夫ですか？」

「警察でションベンさせられた」

「ションベンですか？」

「シヤブの反応が出ねえってんで、ようやくいまさつき無罪放免だ。オレ、ヤク中じゃねえしな」

「よかったっす」

「いまどこ？」

「家っす」

「あのあと、どうした？」

「三茶まで歩いて、マクドで兄貴からの電話を待つて、んで、電話、なかったんで、電車乗って家に……」

「そのあとは？」

「ずっと家にいたっす……」

すると受話器を手でふさいだような奇妙な沈黙が数秒続いた。

刈り上げ男が言った。

「ブツ、なくしてねえだろうな？」

「ちゃんと持ってます」

「これから取りに行く。代々木公園の駐車場で待つてろ。10分、かかんねえ」

「ういっす」

「よし」

携帯を切る。裏切りも何もかもが帳消しになって、すべてが元に戻った。そんな気がして、化け物と錯覚した影のように恐怖はあとかたもなく消え失せた。

鈴木はリュックを背負うと、家を出た。代々木公園の駐車場なら歩いて10分もかからない。

人通りの少ない路地から、参宮橋にぬける広い道に出る。

目の前に広がる代々木公園は黒々とした巨大な丘のようだった。

駐車場は水銀灯で青白く浮き上がり、そこだけが異世界に見える。

道を渡り、駐車場に入ると、すでにいつものクルマ、赤のスカイラインが止まっていた。

クルマの到着が早すぎる、そう鈴木は思った。

近づいていくと、助手席のドアが開き、刈り上げ男が出てきた。

刈り上げ男はうしろのドアを開けて鈴木を待ち受けると、後ろに乗れとアゴで鈴木に指示した。

鈴木はリュックを背中からはずして手に持つと、頭をさげてクルマの中にもぐりこむよ

うにしてからだを入れた。

そのときだ。鈴木は後部座席の奥から自分を見つめるすごい二つの目を見つけた。兄貴たちが狐さんと呼ぶ男だった。

「すわれ」

鈴木がシートに腰をおろすと、となりに刈り上げ男が乗りこんできた。

鈴木はその意味がわからず、混乱した。

狐さんは鈴木の手からリュックを取り上げると、中身をあらためた。それから、狐さんは自分のジャケットの内ポケットから何かを取り出した。ポケットナイフだった。

狐さんはそのナイフでリュックの底を切り裂いて、そこから携帯と同じくらいの大きさの黒いプラスチックの箱をつかみ出した。

狐さんはそれを鈴木の目の前に突き出すと言った。

「なにかわかるか？」

鈴木は首を振った。

「GPSだ。知ってるか？」

鈴木はまた首を振った。

「教養のねえガキだな」

鈴木の胸に、さっき消え去ったばかりの恐怖がふたたび姿を現した。

「こっから電波が出てるんだ。てことはだ。このリュックが東京のどこにあるのか、オレにはいつだってわかるってわけだ。何言われてんのか、まだわかんねえのか？ 組織にホラ吹いたってことだ、おめえがよ」

鈴木は自分の体がガクガク震えだしたのがわかった。

「出せ」と狐さんが言うと、金髪男は無言のままエンジンをかけ、クルマは静かにすべりだした。それはまるでお葬式に向かう霊きゅう車のようにだと鈴木は震えながら思った。

3章 安田と鈴木とハヤタ

もう少ししたら、自分も死の世界をさまようのだ。

少年はぼんやり考えた。

怒りにとらわれて宙づりになった、あいつらのようにはなりたくない。死後は、異世界に自分が作りあげたあの大理石の館ですごしたい。

そう思いつつも、少年はどこかで、それはきつと無理だと観念していた。結局、怒りにとらわれたまま、自分もまた死んでしまうのではないか。そう思った。

幼稚園の記憶も少年にとっては怒りでしかなかった。

もちろん、小学校もだ。

楽しいことなど、何一つなかった。怒りだけだ。

すべては受験勉強に捧げられた。……いや、それは正しくない。

受験勉強などたいしたことはない。少年のすべてが捧げられたのは、第一に両親への服従にだ。

テレビのアニメなど見たことがなかった。

ディズニールランドなんてものがどこにあるのかも知らない。

夏休みの海水浴だって、冬のスキーだって知らない。

心のそこから楽しくて笑ったこともなく、だれかに愛おしくてだきついたこともない。

もちろん、幼稚園の遠足にも行ったし、小学校の修学旅行にも行ったし、運動会にも出た。

だが、家では両親に服従するこの色白でやせっぽちの少年は、幼稚園や学校ではこんどは別の存在たちに服従しなくてはならなかった。だから、遠足だって、運動会だって、少しも楽しくないどころか、服従のバリエーションが増えるだけだ。それは苦行でしかない。

父親はいつだって家にいない。

母親がすべてをとりしきった。

おまえの兄は失敗作になってしまった。だから、おまえの失敗はけっして認められない。それが母親の定めたルールだ。少年は失敗をおかしてはならない。必ずや勝たないといけない。

そのためには暴力もいとわないと母親は心に決めた。従わないときはたたき。失敗したときはさらに強くたたき。

でも、なぜ？ なんのため？ いい学校に入ることがそんなに大事なことか？

いや違うだろう。少年はそんな単純なことではないとだんだんに知る。

自分は父と母の壊れた関係が生んだ奴隷なんだと思った。母へ対する父の無関心な傲慢、父へ対する母の度を越えた卑屈。無慈悲な王と恐れおののく臣下という父と母の関係。それが自分という奴隷を生み出した。それが少年の結論だ。

少年は辞書で「奴隷」という言葉を引いたことがある。ずいぶん前のことだ。そこに「他人の支配の下に諸々の労務に服し、かつ売買・譲渡の目的とされる人」という一文を見つけ、ああ、まさに自分は奴隷だと思ったのだった。

家では両親の支配によって、学校では同じ学年の子どもたちの支配によって、まさに自分は諸々の労務に服している。そして成功しても、失敗しても、売り買いされるモノのように愛されることもなく、どこかにほうり出されるだけなのだ。

筋肉のつかない少年の細い腕は、家でも学校でも簡単にだれもがねじ上げることができた。抵抗するだけの力はない。

少年の下目がちの視線は、ますますご主人どもをイライラさせた。

通学路や校庭や廊下で、追い抜かれざまに後頭部をぶたれる。

授業中、うしろから背中をどつかれる。背中に消しゴムのカスを注ぎ込まれる。

黒板消しで顔をふかれる。はがいじめにされ、チョークを鼻の穴に入れられる。

金を持ってこいとおどされる。持っていくことができないと、男子トイレでズボンとパンツを脱がされる。ズボンとパンツはトイレの外に放り投げられる。下半身がはだかのままそれを取りに行かないといけない。

宿題を他の連中の分までやって来いと言われ、命令に従うと筆跡が同じじゃ意味がねえと、片脚を一人ずつにつかまれて2階の窓から宙づりにされる。その恐怖たるや！！

体育の後片づけのときに、サッカーボールのまとにされる。ドッジボールのまとにされ

る。バスケットボールのまとにされる。動く腕をひね上げられる。じっとしていないといけない。奴隷のように。

うわばきに画びょうを入れられる。うわばきにミミズを入れられる。

ノートを油性マジックで真っ黒に塗りつぶされる。

机の上一面にノリを塗られる。

女子のスカートをめくってこいと言われる。できないでいると、女子目がけて押し飛ばされる。

ほかにも数限りない「諸々の労務」。

成績がよければよいほど、奴隷でいなければいけなくなる。

成績がよければよいほど、憎しみの対象になる。

成績が下がれば、こんどは母親の憎しみの対象になる。父が母をあざ笑うからだ。

成績が下がれば、母親に狂ったようにたたかれる。父が母をなじるからだ。

成績が上がるのは当たり前だから、ほめられることはない。たたかれないだけだ。

兄はいい。兄は一度も叩かれたことがない。

叩かれるのは少年だけだ。

やがて少年は逃げこむ場所を見つけた。それは異世界にあった。

そこにはライがいた。

3000年前のエジプトに生きていたというライがいた。

3000年前の怒りと恨みという重力につながれ、大蛇のように巨大化したエーテル体を持つライがいた。

1年前、そのライが言った。おまえに魔の力を分け与えよう。

そしていま、主人と奴隷の関係は逆転した。

少年に「諸々の労務」を強いたものたちは精神のゴミ焼却場に次々と突き落とされていった。

父と母もまたいまや少年に服従し、少年の思うがままだ。

復讐はもうすぐ終わるだろう。

4月30日、火曜日。朝の10時に小田急線の代々木上原駅でカメさんと待ち合わせた兄弟は、急行電車で海老名まで行き、相模線に乗り換えた。

大きなマンションや似たような住宅がいくつもいくつも流れていくなか、突然、畑や空き地がポカンと口を開ける、そんな郊外の風景を窓の外に見ながら、3人は寒川神社がある宮山を目指した。

宮山駅に着いたのは11時過ぎ。

小さな川にかかる橋を渡って少しゆくと、寒川神社の広々とした境内が見えてきた。病院はこの先、神社の南側にあるはずだった。

カメさんの「こっち」という指示に従いながら、兄弟は歩いた。

やがてクリーム色で3階建ての大きな病院が見えてきた。屋上に巨大な看板が立ち、「北湘病院 精神科・心療内科」と書いてある。

病院の裏手は雑木林になっていた。

兄弟の鼓動はそろって速まった。

はたしてセーヌ川の遠隔透視どおりに、ここに安田がいるのだろうか。

カメさんを先頭に、3人は正面玄関に向かった。

「あつ、きょうは臨時のお休みか」とカメさんが大きなガラス戸の張り紙を見て頭をかいた。

「会えないの？」と兄が聞くと、「いや。面会は大丈夫。通用口に行行って書いてある」とカメさんは答え、キョロキョロとあたりを見まわすと、「こっち」と左側に向かって歩き出した。

建物の角を曲がると、通用口があった。ガラスの自動ドアが開いて3人は中に入ると、受け付け窓口をのぞいた。

そこは警備員室になっていて、一人が窓口ごしにこちらをギョロリと見つめた。そのうしろで2人の警備員がお茶を飲んでた。3人とも6代のおじいちゃんに見えた。

「面会なんですが」とカメさんが言った。

「患者さんのお名前は？」と警備員が聞く。

「安田さんです」

警備員はパソコンのキーをパチパチと叩くと、ディスプレイを見て「ああ、安田翔一さんね」と言った。

セーヌ川の透視は正しかった。安田はいたのだ。3人は顔を見合わせ、小さくガッツポーズをした。

すると、ディスプレイを見る警備員の顔が少し曇った。

「安田さんはね、面会は無理ですね」

「えっ、どうしてですか？」とカメさんが窓口のカウンターに手をつけて顔を突き出した。
「隔離病棟におりますんで」

「隔離病棟でも面会は可能なはずですが」

「いや、その、いまは隔離室におられるんで。面会禁止です」

「隔離室に？」

カメさんは振り向いて兄弟の顔を見た。どうしようかと、表情が言っていた。

「無理なんですか？」と兄がカメさんにきいた。

「隔離室なら無理だね」とカメさんは言うと、警備員に向き直った。

「いつまで隔離室に入っているんですか？ それ、先生に聞いてもらえませんか？」

「いやあ、そういうことは、あんまり……」と警備員が迷惑そうに頭を振った。

「せっがぐ、いわでのモリオガがら、しはずのしんがんせんのにのってきだでば、なんどがなんねっぺが？」と、突然カメさんはなまった。

「偶然がすな。わたすも出身はモリオガでがんすよ」と警備員も突然なまった。

「わたすのいえはウエダ町でがんす。ウエダのカメダイいんって知ってますがなは？ そ

「このむすごです」

「おお、わだすの母親が世話になったつすな。んだらば、ちよっくら待ってけだんせ」と警備員は受話器を持ち上げてボタンをプッシュした。

なかなか電話がつながらないらしく、しばらくして警備員は「出ないなあ」と言いながら受話器を置いて立ち上がった。

「休みでひどがすぐねえもんでなは。もすごしここで待ってでけだんせ」と言うと警備員室を出て廊下の奥のほうにスタスタと歩いて行った。

「どうして盛岡出身ってわかったんですか？」と弟が小さな声でカメさんに聞いた。

「故郷のなまりは隠していてもわかるもんなんだよ。それにしても、スゴイ偶然だ」とカメさんは嬉しそうに眼鏡の中の目を丸くした。

ところが、その警備員はなかなか戻ってこなかった。

カメさんの顔からニコニコが消えていた。

「どうしたのかなあ……」

「おそいですね」と兄も心配そうに言った。

そのとき、警備員室の電話が鳴り、電話に出た一人がなんども「本当か、本当か？」と

驚いて聞き返した。

電話を切ると、その警備員は3人に向かって、「安田さんが隔離室にいないそうだ」と言うと警備員室を飛び出し、廊下を走って消えた。

3人は顔を見合わせた。カメさんが言った。

「とにかくここにしよう。くわしいことがわかるまで。だいたい、隔離室からいなくなるわけがない。何かの手違いだよ」

受付に一人残った警備員が不安そうに窓口に座った。

入院患者がいる病棟はおそらく2階から上なのだろう。人の呼び交う声が聞こえ、騒がしい気配が広がっていくのを3人は頭上に感じた。

すると白衣を着た男性が廊下をこちらに向かって小走りやって来ると、こう言った。

「あなたたち、安田さんに面会に来た人？　どういうご関係？」

「友人です。えーと、親友です」と兄がきっぱりと答えた。

「きょうはね、安田さんには会えない。お引き取りいただけるかな」

「どうしてですか」とカメさんが少し強い口調で言った。

「理由は言えません」

「安田が脱走したんですか？」とカメラさんの口調はさらに強くなった。

医師は黙った。

「だって隔離室に入れられてたんでしょ？ モニターで監視しているんでしょ？ 脱走できるとは思わないじゃないですか」

医師は黙ったままだった。

カメラさんが「だれか、脱走を手伝った人がいるんじゃないですか」と、きつい口調で言うとき、医師は突然怒りだした。

「何を言ってるんだ、キミは！！ 出て行きなさい！！」

警備員も加勢して、3人はあつという間に外に追い出され、自動ドアの電源も切られた。3人がもう一度ドアの前に立ってもびくともしなかった。

「とにかく、駅に戻ろうか。安田がほんとうに脱走したのなら、駅に向かったかもしれないね」というカメラさんの言葉に、兄弟はそろってうなずいた。

来た道をまた引き返した。3人とも、頭の中がアンテナ線がはずれたテレビのように混乱したままだった。

寒川神社の大きな鳥居が見えてきたときだった。その鳥居の横の松の木の陰からだれか

が手を振っている。最初は自分たちに向かって振られている手だとは3人とも思わなかった。

だが、兄がこう言った。「安田だ」

カメさんと弟は立ち止まると、その手を振る男を目をすがめて見つめた。

兄がまた言った。「安田だ」

そして兄が走り出した。カメさんと弟が追った。

鳥居に走り着いた兄は、その男に抱きついた。

ややあつて、カメさんと弟が兄とその男の横に息を切らして立った。

兄は泣いていた。

「おまえ、なにしてんだよ」と兄は鼻水をすすりながら言った。

「わるい」と、安田は彫刻のように整った顔をほころばせて言った。

カメさんが「駅へ行こうよ。病院の人たちに見つかったらまずい」と兄と安田の肩に手を置いた。

4人は急ぎ足で駅へと向かった。

相模線の電車に乗ってからは、4人ともほとんど口をきかなかった。達成感でもなく、疲労感でもなく、なにかしらほっとした不思議な感情にとらわれて、力が抜けたのだ。

海老名で小田急線に乗り換えようとしたときに、カメさんが「お昼を食べながらこれからの計画を練らないか」と提案した。

駅ビルの中のカフェに入った。

はじっここのほうのテーブルに陣取ると、カメさんが全員分の飲み物とサンドイッチを買って戻ってきた。

コーヒーをすすると、カメさんが言った。

「まず、僕としては、密室からの脱出トリックの種明かしをしてもらいたいな」

安田がニヤリとした。

「トリックなんてないです。運が良かっただけです」

そう言うと、オレンジジュースを安田はゴクゴクと一気に飲みほした。

「病院に無理やり連れてこられたのがおとといかな。その瞬間から脱走のことばかり考えてました。隔離病棟だけど、意外と自由で、面会する人も多くて管理が甘い。それにゴー

ルデンウィークのせいだと思うんですが、医者の数も少ないんです。脱走するのは簡単かもしれないと思いました。ただ、スタッフが多いから、目くらしが必要だと思ったんですね。で、どうしたらいいんだろうと、そればかり考えてた。だって、超ヒマだから」

そう言って、安田はこんどは水をゴクゴク飲んだ。

「精神科の病棟って、幼稚園みたいなんですよ。みんな優しいし、いろんな人がいて、みんなで遊んだり、オシャベリしたり。だから、ナースステーションに入りびたっても誰もヘンだと思わない。で、わかったのはですね、患者一人一人の状態やどの病室にいるのかをネットワークで管理しているってことなんですよ。隔離室ってのがあって、暴れたり、自殺の恐れがあったり、そういう人がそこに入れられるんだけど、どの患者が隔離室に入っているのかも、当然ネットワークで管理するわけです。で、ひらめいた。僕の姿が見えなくなっても、僕が隔離室に入っていることになっていけば、だれも探さないんじゃないかって。少なくとも時間稼ぎにはなる。で、ナースステーションで看護婦さんたちがパソコンに入力するのをずっと見てて、自分が隔離室に入っているように見せかけるためにはパソコンでどう設定するか、頭の中でシミュレーションしてたんです」

「なるほど」とカメさんが言った。

「でも、問題は、お金でした。着るものはこうして私服でOKだけど、お金とかそういう私物は入院するときに没収されるんですよ。だから、もしも脱走できたとしても、無一文のままというのがネックなんです。そんなときですよ。ぼーっと窓の外を見ていたら、高村と勇貴とあなたがやって来るのが見えたんです。やったあ、高村から金借りれるぞって。奇跡だと思った。それで即座に計画実行です。ナスステーションにはちょうど誰もいませんでした。パソコンをいじって3秒で自分が隔離室にいるように見せかけた。それから、隔離病棟の出入り口のすぐそばに、手に病院のスリッパを持って、ぼんやりしたふうを装って立って、だれかが入ってくるのを待った。出入り口は内側からも磁気カードがないと開けられないんです。そうしたら、警備員のおじさんが入ってきました。スライド式のドアが閉まる直前、すかさず、スリッパをドアと壁のすきまに入れました。すると自動ドアがスリッパにぶつかってまた開いた。素早く外に出て、あとは1階に降りて非常口から出たというわけです。きょうは外来が休みだったから、誰にも見られずに外に出ることができたんです。ラッキーだった。で、あなたがたが戻ってくるのをあそこの神社で待った」

そう言って、安田はもう一度水をゴクリと飲んだ。

「おまえ、頭いいなあ」と兄は嬉しそうに言った。

「中毒症状はどうなの？」とカメさんが聞いた。

安田は視線を落とし、水の入ったグラスを両手で包むようにした。

「なんとかか。……覚せい剤とは違うので、いろんなクスリを飲んで禁断症状的なものは緩和できます。そのクスリは持ってきました。あとは、意志の力」

「ところで、入院には誰がつきそったの？」と、またカメさんが聞いた。

「母親と、オヤジの部下たちですね。部下と言っても、警察官ですよ。オヤジの命令はなんでも聞く。秘密も守る。死ぬまで言うなっていたら、死ぬまで言わない。そういう部下たちですよ」

「お父さんは警察庁でしょ？」

「ええ。でも、都内のどっかの警察署にいますよ。署長かなんかで。どこの警察署か、興味ないんで、知らないですけど。オヤジとあまり話さないから」

カメさんは「ふーん」と言っただけでズズッとコーヒーをすすった。

兄がまじめな顔で切りだした。

「おまえ、なんでさ、おかしなクスリなんか飲んだんだよ。鈴木に買わされたんじゃないか」

て、自分から買いに行ったって話じゃねえか」

安田はぼつが悪そうに下を向いた。

「そうか、バレてたか」

「さっぱりわかんねえよ。なんで自分から……」と兄も下を向いた。
だれもが静かに安田の答を待った。

安田が顔を上げた。

「悪い、高村。今は言えない」

「なんだよ、それ」と高村が口をとがらした。

「今は言えないんだ」

「じゃ、いつなら言えんの？」

安田は少し考えてからこう答えた。

「明日が過ぎたら」

「どうして明日が過ぎたらなんだよ」

「……」

「なんでなんだよ」

「……明日、弟の誕生日なんだ」

兄と弟とカメさんは、あきれた表情で顔を見合わせた。

「悪い、ほんとに悪い。それ以外は何も言えない。でも約束する、明日が過ぎたら、すべてをおまえに話す」と安田は頭をテーブルにつくほどに下げた。

3人はため息とともに安田を見つめた。

兄が言った。

「エミルたちが、ものすごくおまえのことを心配して、いろいろ助けようとしてくれてるんだ。カメさんもエミルの仲間なんだ。だからおまえも、ひとりでかかえこまないで、おれたちに相談してくれ。たのむよ」

「ありがとう。でも、悪い。明日が過ぎるまで待つてくれ……」

そう言っつて安田はまた頭を下げた。

「わかった」

兄はそう言うしかなかった。

カメさんがサンドイッチをつまみながら、「さあ食べよう。腹が減っては戦ができない」と言うやばくっつと食いついた。

安田も「いただきます」と食べ始めた。

兄と弟は食欲がわかず、皿の上のサンドイッチをじっと見つめた。

「これからどうするつもり？」とカメさんがもぐもぐと口を動かしながら安田に聞いた。

「家には帰れないでしょ？」

「いえ、家に行きます」と安田はキツパリと言った。

「キミの家にはもう病院から連絡がいつているはずだよ、脱走したって。また病院に連れ戻されるだけじゃない？」とカメさんが言った。

「ぼくの家、でかいんです。だから、家族に知られずにいられる部屋がいくつもあるんです。それに秘密の出入り口もあるし」と高村を見てニヤリとした。

「ふーん」とカメさんがまたサンドイッチにかぶりついた。

「それで、お願いがあるんですが。……その 아이폰、2、3日でいいので貸してもらえませんか？」と安田がテーブルの上のカメさんの 아이폰に視線を向けると、カメさんは口の中のサンドイッチをブツと噴き出しそうになり、あわてて両手で口をおさえた。

カメさんは口の中のサンドイッチを苦勞して飲み込むと、「えええ」とようやく驚きの声をあげた。そして少し目をつむって考え込むと、カメさんは「いいよ」と答えた。「ど

うせ電話をくれる彼女なんてのもいないしね。みんなと行動をいっしょにしていれば 아이폰も必要ないし。電話しなくちゃいけないときは、iPadでスカイプするよ」

「ありがたいございます」と安田はカメさんに向かって深々と頭を下げた。

するとカメさんは「お金も必要でしょ？ そうだな、5万円くらいあればたりる？」と安田にきいた。兄と弟は額の大きさにびっくりして顔を見合わせた。

「必ずお返しします」と安田はまた頭を下げた。

「何をしようとしているのか、ぼくにはわからないけど、ピンチのときは、絶対に連絡をしてね。高村君にでもいいし、エミルにでもいいし。番号は 아이폰の電話帳に入っているから。約束してくれ」

「はい」と安田はカメさんに向かってコクリとうなずいた。

カメさんは名残惜しそうに 아이폰を安田に手渡すと、ジャケットの内ポケットから財布を出し、1万円札を5枚つまんで「はい」と安田に差し出した。

安田は何度も頭を下げて、 아이폰を長袖のダンガリーシャツの胸ポケットに、お札をブラックジーンズのお尻のポケットにねじ込んだ。

「それにしても」と安田は不思議そうな表情を浮かべた。「どうして、オレがあそこの病

院にいらってわかったんですか？」

カメさんと高村兄弟は顔を見合わせた。

「あんな」と兄が口を開いた。「セーヌ川さんの遠距離レーダーでだ」

安田はポカンとした顔で兄を見つめた。

4人はそれから小田急線の急行に乗った。

安田は渋谷の東急ハNZに用があるから井の頭線に乗り換えると言って、下北沢で下車した。

別れ際に兄が東急ハNZで何を買うんだと安田に聞くと、安田は「痴漢撃退スプレー」とだけ言ってホームに降り立ち、車内の3人に向かって手を振った。

その安田を見て、高村兄弟はなぜか切ない気持ちになった。

安田の表情にはキリリとした覚悟のようなものがあつた。いったい安田は何をしようというのだ。

兄はつり革をきつく握りしめ、遠ざかるホームの安田に向かって「気をつけろよ」とつぶやいた。

きのう、狐さんになぐられたあとが何カ所もはれていた。

右のまぶたのはれは目をふさぎ、左目だけではものがよく見えなかった。あごも骨がくだけたのではないかと思うほどはれて痛い。さわるのも恐ろしかった。

蹴りを入れられた腹には、まだ重々しい痛みが残っていたし、転倒したときにどこかにぶつけた背中もヒリヒリと痛んだ。

きつと気絶とはこのことを言うんだろうと鈴木は思った。恐怖と痛み以外の記憶がすっ飛んでいた。

まぶしい昼の光がブラインドのすき間から射しこむことは、いったいどこなんだろう。どこかのビルの一室のようだが、家具はなく、まるで空き部屋のようにガランとしている。

誰もいない。いや、いるのかもしれないが、ここからは何も見えない。

鈴木はからだを起こすと、ブラインドを背にあぐらをかいた。視線の先には鉄製のドアがある。右手にも鉄製のドアがある。

立ち上がり、ドアを開けてみようかと思ったが、恐怖にその考えは押しつけられた。だが、ずっとここにこうして座っているわけにもいかない。

鈴木はおずおずと小さくせきを試みた。ゴホッ……。

右側のドアの向こうでゴソゴソと音がして、ドアがカチャリと開いた。

金髪男がのそりと顔をのぞかせた。

「起きたけ？」

そう言って金髪男は鈴木の前に向かって来ると、あぐらをかいてすわった。

「おまえ、殺されるとこやったんよ。覚えおるか？ 兄貴が必死にな、おまえのために命

乞いしてな、狐さんも根負けしよったんよ」

金髪男の声は優しかった。

「狐さんがな、おまえがパクられれば芋づる式に全員パクられるっちゅーてよ、殺してしまおう言うたんよ。兄貴は、こいつはまだガキですよって、かんにんしてくれ言うて、狐さんにすがってお願いしたんよ。そうこうしているうちに、電話で呼びがかかって狐さんは出ていきよった。それがきのうじゃ」

鈴木は胸が凍えて氷のようになっていくのを感じた。

「兄貴に見張つとれ言われてからに、ずっとおったんやが、まだなんも連絡がねえもんでよ、オレもこれからどうすればいいか、わからんよって。逃がす言われてるしよ」

鈴木がかすれた声で聞いた。

「ここ、どこっすか？」

「来たこと、あるじゃろ。倉庫じゃ、クスリの」

鈴木は思い出した。新宿のはずれにあるマンションだ。兄貴に言われて荷物を取りに来たことが何度かあったが、中に入ったことはなかった。

「カミさんのことしか言つたらんとおまえはゆうとつたし、名簿も盗まれんかったからに、なにも殺さんでもいいのにと、オレも思いよるんが。おまえをさらったんは、あの高村っちゅー兄弟の身内つー話じゃろ。警察にも言わんと約束しよって、実際のところ、警察の動きはないからに」

金髪男はまるで死刑囚をなぐさめる刑務所の刑務官のように、とつとつと話した。

「オレ、殺されるんすか？」

鈴木がぼつりと聞いた。

「五分五分じゃなからうか……」

「いつわかりますか？」

「さあな。狐さんの胸三寸じゃけ」

「狐さん次第っつーこと……すか？」

「ああ」

「逃がしてくれませんか。お礼は何でもします」と鈴木は頭を床にこすりつけた。

「おまえを逃がしたら、オレが殺される。すまんの」

「お願いです。気がついたらいなかったことにしてください」

涙がこみあげてきた。

「お願いです、お願いです、お願いです」と声をふるわせて鈴木は訴えた。

「悪いのう。無理じゃけ。オレもおのれの命が惜しいからに」

「お願いです、お願いです」と鈴木はひたすら頭を床にこすり続けた。

すると金髪男は突然怒り始めた。

「うるさい言うとするじゃろがあ！！言うこときかんと、オレが殺したる！！」

鈴木は黙った。涙があふれて止まらず、床にポタポタと音を立てて落ちていく。

「わかったか、おい！！ 静かにせえや！！」

鈴木はしゃくりあげた。

家の自分の汚れた部屋が、狭い茶の間が、姉の声が、母親の笑顔が、父親の笑顔が、急になつかしく、愛おしく心に迫った。もう二度とあの家には帰ることができないのかと思うと全身がぶるぶる震えて止まらなかつた。

すると、金髪男の携帯が鳴った。

「へえ、へえ」と金髪男は携帯を耳に当てながらペコペコ頭を下げている。

「……へえ、大丈夫ですんで。……へえ……へえ」

携帯を切ると、金髪男は鈴木をニヤニヤして見た。

「兄貴からじゃ。よかったのお。死刑は延期じゃ。なんでもな、カミさんの予言があつてな、組織ぜんぶが急に忙しくなったからに、きょうは兄貴も狐さんもここには来んと」

金髪男はダブダブの戦闘服のお尻のポケットから手錠を取り出して鈴木目の前に掲げて見せた。

「ワツパ、使わんでええように、おとなしくせーや。のう？」

金髪男は立ち上がると、奥のドアのほうに向かいながらこう聞いた。

「腹、減ったじゃろ？」

突然、金髪男の声が優しくなった。

「カップ麺、作るからに、待ちんさい」

金髪男が奥の部屋に消えたのを見ると、鈴木は衝動的に立ち上がり、右側の部屋に飛び込んだが、倉庫になっているその部屋に出口を見つけられず、次に金髪男が消えたほうのドアを勢いよく開けた。左側に小さなキッチンが見え、廊下の奥に玄関が見えた。

キッチンの流しに立つ金髪男が無表情に鈴木を見た。鈴木はかまわず玄関に向かって突進した。

ドアノブをつかんで回し、引いた。サムターン錠も回した。そして何度も何度もガタガタとノブを引っぱったが、ドアはびくともしなかった。なぜ？ どうしてドアが開かない？

金髪男が鈴木を背後からはがいじめにした。

大柄で腕力の強い金髪男にとって、小柄な鈴木は文字通り子ども同然だ。がっしりと押さえ込まれて、鈴木の中からだまると太いロープでがんじがらめに縛られたように身動きできなかった。

「静かにせえや。この玄関はのう、中からもロックされててな、暗証番号、打ち込まんとあかんようになってるけに。無駄や。観念せえ」

鈴木はからだからあつという間に力が抜けていくのを感じた。金髪男は鈴木を引きずるようにして奥の部屋に連れて行った。鈴木はもといいたブラインドの前に荷物のように投げ出された。

立ち上がる気力も失い、鈴木はそのまま仰向けに横たわった。

しばらくすると、金髪男がキッチンから戻ってくる気配がした。

「カップ麺、食うか？」

鈴木は返事をしなかった。いや、できなかった。何も考えられず、言葉というものをすっかり忘れてしまったように、頭の中はからっぽだった。

金髪男がカップ麺を食べるズルズルという音が聞こえてきた。

お昼過ぎ、高村兄弟とカメさんが戻って来たとなると、ケプラーハウスの住人たちは続々と食堂にやって来た。

あらましはすでにカメさんがエミルに電話で伝えてあった。

セーヌ川がパチパチと拍手をした。

一方の高村兄弟には何かを成し遂げたという気持ちはなく、むしろ安田をまた一人にさせた不安のほうが大きかった。しかも、謎は一つも解けていないのだ。明日が過ぎたらண்டும்話すと安田は言った。なぜ明日なのかと問うと、明日は弟の誕生日だからと言う。話をはぐらかされているのか、それとも、そこに何か重大な意味が隠されているのか、兄弟には少しもわからなかった。

もちろん、謎が解けないことで気持ちが沈んでいるのは、ケプラーハウスの住人たちもいっしょだった。

走り続けなければいけないことはわかる。でも、どこを目指して走ればいいのかだろう。ゴールが見えないマラソンみたいだとだれもが感じていたのだ。

アンジェリーナが冷たいお茶が入ったグラスを3人のために調理室から持ってきて大きなテーブルの上においた。

「気になるわね、明日という日が」

そう言うと、アンジェリーナは席につき、頬づえをつくくと、同じように頬づえをついていたエミルのほうにチラリと視線を向けた。

「エミル、大丈夫？」

エミルは「大丈夫」と言いながら、大きなため息をついた。

「大丈夫じゃないらしいわね」とアンジェリーナが言うと、「実は」とエミルが話し始めた。「きのうの夜、またハヤタの叫びが聞こえたの。とてもつらい……」

「言葉は悪いかも知れないけど、生き霊ってことね」とアンジェリーナが言った。

「彼は必死に助けを呼んでいるの」とエミルが答えた。

「死なせてくれってことかい？」と天道さんが言うと、エミルは黙ってうなずいた。

「電話してみたらどうだい、ハヤタの携帯に。番号はわかったんだからさ。おふくろさんが出るんじゃないか。そうして、正直に伝えてみたらどうだい？」と天道さんが穏やかな口調で言った。

「実はオレもそう思ってます。でも、その前にどうしても知っておきたいことがあるの」

「ハヤタの素性かい？」と天道さんが言った。

「うん」

「そうか」と天道さんはうなずくと、「それじゃ、ママさんと話をしておいでよ。むずかしいことじゃねえ。話をすればすむことだ。いつかはしないとイケない話だ。いま、それをすりゃあいい」と言った。

エミルはコクリとうなずくと、「そうだね」とスックと立ち上がった。

「ママと話をしてくる」

そう言っつて、エミルは思い詰めた顔で食堂を出た。

高村兄弟は、天道さんとエミルのやり取りの意味がわからず、ただポカンとしていた。

エミルは食堂を出ると右手の奥にあるドアを開け、渡り廊下になっているガラス張りの通路を通つてこじんまりとした洋館ふうの建物へと歩いて行つた。ケプラーハウスを取り囲む緑の木々の中に建つ、それは白の漆喰と黒く太い柱の連なりが抽象画を思いおこさせるような美しい家だった。

通路の端にある木のドアを開けると、そこは広いキッチンに続いていた。グスタフ博士も、それからおじいちゃんも、このキッチンを通つて自分たちの病院に毎日通つたのだと、エミルは小さい頃にリリーから教わつた。

キッチンの黒光りしているダイニングテーブルにひじをついて、ママはちょうどお茶を飲んでいたところだった。

「どうしたの？」とママはびっくりしたように背筋を伸ばした。

「お話があるの」とエミルは言う、ママの真正面に座った。

南向きに大きく取られた窓からはお昼の光が木漏れ日となってキッチンの中に射し込み、光のまだら模様となって揺れていた。

ママの背後にはリビングルームが見え、食堂のものと変わらない立派な暖炉があった。

暖炉の右手には2階へと続く階段があり、踊り場の壁にはエミルのひい祖父、グスタフ・ノルト博士の肖像画が飾られている。

ママが先に口を開いた。

「みなさんと一緒になにかの事件を解決しようとしているのはなんとなくわかってる。信賴してるわ、エミルのことも、みんなのことも。リリーの計画でもあるし。でも、危険なことはしないでね。お願いだから」

「うん」とエミルはうなずいた。

「……聞きたいことがあるんでしょ？ ……わかってるわ」

エミルはママの目をのぞき込んだ。穏やかな光が揺れていた。

「ハヤタさんのことでしょ？」

エミルはうなずいた。

「その前に、あなたたちの取り組んでいる事件のこと、かいつまんで教えてくれる？」
ママはそう言ってマグカップのお茶をすすった。

エミルは高村兄弟がやって来てからきょうまでのことを手短かに伝えた。そして最後に、ハヤタと名のる少年がエミルに取りついたようになっていっているいまのことを。

ハヤタ少年のことにエミルが初めて触れたとき、ママのまぶたがピクピクと動いたのにエミルは気づいていた。

エミルは言った。

「ハヤタという少年は能流登家と関係のある子なんでしょう？　パパとも関係あること？」

ママは一度大きく息をすると手に持っていたマグカップをテーブルの上に置いた。

「少し待ってて」と立ち上がると、ママはリビングルームを抜け、階段を上っていった。

1、2分して、ママが階段を降りてきた。手には1枚の写真があった。

テーブルにつくとママはその写真をエミルに向けて置いた。写真の中では大勢の若者たちが笑顔でカメラのレンズを見ていた。

「美術大学の時の写真よ。これがパパで、これがわたし。このヒゲの若者が天道くん。ま

だ髪がふさふさ」とママは若者を一人ずつ指し示しながら言うとかスリと笑った。

それからママは息を深く吸って、「そして……このひとがハヤタさんよ」と、一人の女性の胸の上に人さし指をおいた。

パパの横に立つハヤタさんという女性は、髪の毛を肩の上でそろえた目元の涼やかな美しい女性で、ひとりだけ笑わずにカメラを見ていた。

「21か22のころの写真ね。私たちは油絵科の同級生だった。ママはね、このころからパパに夢中だったのよ」

そう言って、ママは恥ずかしそうにほほ笑んだ。

「でもね、大学時代のパパの恋人はわたしではなく、ハヤタさんだった。苦しかったわ。卒業すると、パパとわたしは大学院に進学した。ハヤタさんは就職をした。大きなデザイン事務所だったと思う。すると仕事で忙しいハヤタさんより、同じ院で勉強するわたしのほうがパパという時間のほうがずっと長くなった。わたしは猛烈にアタックした。おかしいね、若い時って……」

ママは笑って、そして少し黙った。

「わたしは強引にパパを奪い取った、ハヤタさんから……。わたしはパパの気持ちにハヤ

タさんに戻らないように、パパは自分のものだといいことを確かにしておきたかった。だから、すぐに結婚した。自分に自信が無かったのかもね。ママは心配だったの、パパの心がハヤタさんにいつまた戻るかもしれないって。リリーも、あなたのおじいちゃんも、もう少し時間をかけたらと言ったけど、わたしはきかなかった。パパをせっついて、まだ大学院生なのに結婚式をあげた。欲しいと思ったら自分のものにしなないと気がすまないわがままな子だったから、小さい頃から……」

ママはテーブルの上の写真を取り上げると、懐かしそうに見入った。

「結婚して1年後、あなたが生まれた。パパはたいそう喜んだ。でも、あなたが1歳の誕生日に、パパは事故で亡くなった。お葬式にハヤタさんは来なかった。その1年後のパパの命日るときだった。美大のときの友だちがうちにやって来た。そして聞かされたのよ。ハヤタさんはパパと別れたとき、パパの子どもをお腹に宿していたということだね。ハヤタさんはひとり悩み、そしてパパにも知らせずに、その子を生むことを決断した。その子はあなたの3歳上で、ハヤタさんは一人でその子を育てている。そんなことを友だちは教えてくれた。それが、ママが聞いたハヤタさんの最後の消息よ。……あなたに話しておくべきだった。……ごめんね、エミル」

ママは手にしていた写真をテーブルの上にそっと戻した。二人とも黙ったままそれを見つめた。

「ありがとう、ママ」

言い終わらないうちに、エミルの両頬を涙がっつたい落ちた。

エミルは男の子のように手の甲で何度も何度も涙をぬぐった。

その涙が何を意味するのか、エミル自身にもわからなかった。

部屋に戻ると、エミルは携帯電話を手を取った。

机の上には、鈴木が持っていたノートのコピーのうちの1枚があった。上から下へ整然と並ぶ十数人の名前とは別に、ノートの端にまるで殴り書きしたようにハヤタシュウトというカタカナと11個の数字が書いてあった。

電話をするのに勇氣は不要だった。必要なのは、覚悟のような、あともどりはしないと決断だった。

エミルは大きく息を吸い込むと、ハヤタシュウトの横に書いてある番号をタップした。

呼び出し音が鳴り、すぐに女性が出た。

「はい、ハヤタシュウトの携帯です。どちら様ですか？」
呼吸が震えた。

「はじめまして。能流登エミルと申します」

電話の向こうで女性が息を止めたのがわかった。

「……シュトルム君の娘さん？」

「はい」

「……どうしてこの電話番号がわかったの？」

女性の声は穏やかでありながらも悲しみの湿り気を含んで低くくぐもった。

「すこし、複雑なんです……」

「……」

「シュウトさんが事故にあった原因はご存知ですか？」

「娘から聞きました」

「娘？ おじょうさんですか？」

「シュウトは不良たちから妹を助けに行って、それで事故にあったんです」

エミルは驚きとともに、あの長い髪をした少女の顔を記憶庫から呼び出した。鈴木は少女をハヤタの彼女と言っていたが、違っていた。ハヤタの妹だったのだ。

「ハヤタさん、結婚されたんですか？」とエミルはおずおずとたずねた。

「ええ……。娘のことも知っていますか？」

「いえ、直接お会いしたことはありません」

「直接？」

「はい、シュウトさんもです。……あのう、わたし、ほかの人と少し違っていて、亡くなった方とコンタクトができるんです。信じてもらえないかもしれませんが……」

「シュトルム君もそうだったわ。あなたのお父さんも死者とお話できたのよ」

「……ご存知だったんですね」

「ええ」

「シュウトさんは亡くなってはいませんが、なぜか、わたしにコンタクトしてきて……。メッセージをお母さんに伝えてくれと言われて。どうしようか悩みましたが、シュウトさんの意志がとても強いので、お伝えしたほうがよいと思って、それでお電話したんです」

「そう……。そう……。どうぞ、シュウトの思いを教えてください……」

女性の語尾が震えて止まった。

エミルはまた大きく息を吸い、そしてその息を言葉にした。

「ふえいばりつとを死なせてくれ、ふえいばりつとを死なせてくれ……」

沈黙があり、そしてすすり泣く声が聞こえてきた。エミルは無言で待った。やがて女性がこう言った。

「ふえいばりつとと言ったのね……。そうかあ……。ありがとう、ありがとう。さっき、なんと言いました、お名前？」

「エミルです」

「エミルさん、ありがとうございます」

「……お願いがあります」

「話して」

「そこは病院だと思いますが、いまからうかがってもよいですか？」

「ここに？」

「シュウトさんに会いたいんです」

「……エミルさんは、シュウトの父親がだれか知っているの？」

「知っています」

また沈黙があった。

「ここはね、小田急線の生田駅のそばにあるセント・テレジア病院というところ。脳神経外科の入院病棟はどこですかって聞くといいわ」

「わたしの家も小田急線ですから、1時間ほどで行けると思います」

「代々木上原ね。何度かお邪魔したわ、若い頃、あなたのお家に。あなたのお父さんのご両親にも会ったことがあるわ。大きな病院がお家と渡り廊下でつながっていたっけ」

「いまはもう、病院はやめました」

「シュトルム君が画家になるって言ったからね……」

「はい」

「……エミルさん、じゃ、あとで」

「はい」

電話を切ると、エミルはしばらくのあいだ目を閉じた。

それからエミルは中学の制服に着替えると、食堂に行き、集まっていたみんなに事情を説明した。

みんなはエミルを静かに送り出した。天道さんがエミルの背中を元気づけるように1回バンと叩いた。

小田急線の急行に乗り、登戸で各駅停車に乗り換え、そして生田で降りた。駅の時計は午後3時を指していた。

周囲を見まわすと、「セント・テレジア病院」という看板があり、方向を示す矢印が書いてあった。エミルはその矢印に従って、ゆるやかな坂を上り始めた。

道の両脇には新しくできたばかりの大きなマンションや住宅が並び立ち、道ばたのクスノキやケヤキの木々が大きな日陰をつくりだしていた。

やがてセント・テレジア病院の建物が見えてきた。周囲には高いビルもなく、宅配ピザの箱を積み重ねたような形のクリーム色の建物は、まるでどこかの高原の広大なリゾートホテルのようだった。

エントランスホールを抜け、エミルは面会受付と書かれた窓口を見つけた。

ハヤタシュウトさんのお見舞いですがと窓口の女性に伝えると、パソコンのキーボードをカチャカチャと叩いてから、「A棟3階の集中治療室ですが、面会謝絶になっていますねえ。患者さんのご家族の方ですか？」と言った。

「はい」とエミルは返事をした。

「それではナースステーションで直接、担当の者に相談してください」

そう言っ、窓口の女性はA棟への行き方を教えてくれた。

エレベーターで3階に上がり、「脳神経外科入院病棟」を示す矢印に従って廊下を曲がってゆくと、U字形のカウンターがある立派なナースステーションが見えた。中では数人の女性看護師が忙しそうに立ち働いていた。エミルは「すみません」と声をかけた。

一人の看護師がエミルのもとにやって来ると、「はい？」と首をかしげた。

「ハヤタシュウトさんに面会したいんですが」とエミルが言くと、看護師は手元の帳簿のよなものに視線を落とした。

「ノルトエミルさん？」と看護師は上目で見た。

「はい」

「ハヤタさんからあなたがいらしたら、病室に案内してと言われていますね。この奥のほうに集中治療室があるんですけど、そのうちの『C』と書かれたお部屋です」と、看護師は右手でエミルの行くべき方向を指し示した。

「ありがとうございます」とお礼を言っ、エミルは廊下を進んだ。

Cと書かれたドアの前に立ったエミルは少しためらった。

エミルはあらためて、なぜここにやって来たのだろう、何をしに来たのだろうと自問を始めた。やがてカメラのピントが合うように、エミルの気持ちは一つになった。「会いたい」

——それだけだった。

ドアをノックした。

引き戸になっている薄いブルーのドアが横にスライドした。

目の前に小柄でやせた女性が立っていた。女性は驚いたような表情で自分よりも頭一つ分ほど背の高いエミルを見上げた。

「お父さん譲りね、背が高いのは」

そう女性が言った。こわばっていたその表情はエミルの存在をゆっくりと受け入れるかのように、控え目な微笑みに変わっていった。

ママが見せてくれた写真の中のハヤタさんとぜんぜん変わらないとエミルは思った。アゴの少し下でそろえたボブの髪型、涼やかな目元、小さな鼻に、意志の固そうな唇、ほっそりとしたからだ。

「どうぞ」と彼女はエミルを病室に招き入れた。

そこは部屋というよりも、壁で仕切られたブースのようになっていて、その奥は医師や看護師たちが立ち働く大きな部屋につながっていた。

手前には、いくつもの大きな機械に取り囲まれたベッドがあった。白いアッパシーツの右端からたくさんのチューブや電線がつながれた白い大きな球がのぞいていた。エミルはよく見ようと目を見開いた。包帯でできた白い球の中に黄色の鼻や口が見えた。それがシュウトだった。

ハヤタさんが「娘のミサです」と背中と言った。振り返ると、小柄で長い髪の少女が小さなおじぎをした。エミルもあわてておじぎをかえした。エミルを無表情で見つめる少女の顔は、トランス状態で見たあの少女の顔そのままだった。

「ベッドのそばに行ってもいいですか？」とエミルはハヤタさんに聞いた。

ハヤタさんはうなずくと先にたってシュウトの枕元に向かった。

エミルはベッドの横に立ち、シュウトを見おろした。閉じた目の上や鼻の横には青あざが残っていた。唇の端とあごの大きな切り傷はかさぶたになっていた。そんなあざや傷が痛々しい顔の他は、まるでベールをかぶったアラブの人のように包帯やガーゼで白くおわれ、喉もとを隠すガーゼの下からはひときわ太い透明なチューブがベッドの横の大きな

機械に伸びていた。

その光景の重々しきはエミルを圧倒した。

トランス状態の中、切れ長の目で死なせてほしいと訴えた、あの言葉を持った少年とはなにもかもが違う。シーツの胸のあたりだけがかすかに上下する以外、目の前のシュウトはみじんも動かない。そんなシュウトを見つめていると、あの恐怖が再びエミルを襲い、エミルの頭脳は凍りつくかのようにみるみる働きを止めていった。

そして、それがゼロに達したとき、体から力が一気に抜けた。エミルはしゃがみ込み、今まで自分でも聴いたことがない声を出して泣いていた。

だれかの腕がエミルの肩にまわされた。涙でぼんやりした目で横を見ると、腕の主はシュウトの妹だった。少女は何も言わず、エミルの肩を抱き続けた。気づけば、少女もまた涙をポロポロこぼしていた。

しばらく二人して泣き続けた。ハヤタさんが二人の手をとって同時に立ち上がらせた。

「あなたがた二人のお兄さんよ。さあ、お別れを言って」

「お別れ？」

エミルの声がうわずった。

「エミルさんの電話で、シュウトの思いを聞いて、ようやく決心ができたの」

そう言ってハヤタさんはシートからのぞいているシュウトの左手を握った。

「シュウトのからだはポロポロなの。頸椎も、脊髄もポロポロ。頭蓋骨の内側に内出血があつて手術も無理なの。脳死状態なんだそう。助かる可能性は百パーセントないって先生が言うんだけど……それでもこうして目の前に息をしている息子の肉体はあるんです。人工呼吸器をはずしてくださいなんて言うわけがない。このままでもいい。もう一生目を開けなくても、言葉が話せなくてもいい。このまま眠っていてくれればいい。この肉体があるだけでいい。わたしが死ぬまでずっと世話をして抱きしめてあげる。……わたしはそう心に決めていた。きっと、親だったら誰でもそう思うに違いない。だって、どうしてこの目の前の、動いている心臓をとめられるっていうの」

ハヤタさんはベッドの上にかがみ込むと、包帯の上からシュウトの頭を何度も撫でた。

「……でも、それがシュウトにとってどんなに残酷なことなのか……。わたしはそのことに目をつむってたの。自分のことばかり考えて、シュウトのことはちっとも考えてあげていなかった。……この部屋に泊まってね、けさ、明け方に夢を見たの。小学生のシュウトがいた。ただニコニコしていた。わたしはとっても幸福だった。なんのお話もない夢。た

だシュウトが笑って、わたしはこれほどの幸福はないという幸福を味わっているの。それだけ。夢と現実が重なって、どちらが本当かわからない、そんな気持ちでわたしは目が覚めた。そのとき、少しだけ心が決まったの。いままでありがとう、お別れのときだねって」

ハヤタさんはからだを起こすと、ふりかえってエミルを見た。

「エミルさんの電話がわたしの決心を後押ししてくれた。本人が『もう行く』と言ってるんだから、それを引き留めたらいけないよね。親のエゴよ」とハヤタさんは小さな笑みを浮かべた。

「あのね、わたしはシュウトのことを小さいときから、ふざけて『マイ・フェイバリット』って呼んでいたの。おはよう、マイ・フェイバリット。元気か、マイ・フェイバリット。おかえり、マイ・フェイバリット。たくさん食べるよ、マイ・フェイバリット……」

また涙があふれるのを感じたとたん、すでに幾筋かはエミルのほほをつたって制服の胸にポトポトと落ちていた。

帰りは急行に乗り換えるのも忘れて、生田駅からずっと各駅停車で代々木上原駅まで

やって来た。車両の一番端っこに座って、いろんな想いのどうどうめぐりや、突然わきおこる恐怖や、胸がふるえてしかたがない悲しみや、それらがエミルの心を振りまわすのをどうにもできないまま、1時間近くをかけて代々木上原に着いた。

集中治療室で泣きはらしたあと、エミルはハヤタさんと娘のミサと3人で、病院の喫茶室でお互いのことをしばらく語り合った。

シュウトが2歳のころ、ハヤタさんは仕事を通じて知り合った同じデザイナーの仕事をしている男性と結婚した。ところが、ミサが生まれてから3年後、その男性はがんで亡くなった。シュウトもミサも、それぞれの父を物心つく前に亡くしたことになる。そのせいか、シュウトは妹思いで、まるで父親のようにミサの世話を焼いたという。それが、あんな事故を招く原因にもなったのだと、ハヤタさんは痛みを耐えるようにふるえる目をつむった。

それからシュウトの話をした。事故にあうその日までずっと野球を続けてきた快活な少年だったこと。高二の夏休みにバイクの免許を取り、コンビニのアルバイトでお金を貯め、高三に進級するこの春休みにバイクを買ったばかりだったこと。おかしな夢を見ることがある少年だったこと。会ったことも、写真すらも見たことがない父親の、つまりエミルの父親の容貌を幼いころにシュウトは絵に描いたことがあった。夢に出てくるおじさんだと

シュウトは言った。神秘主義に傾倒し、自分自身も死者と話ができると語っていた父親に似たのだとハヤタさんは思ったという。

それからハヤタさんはぼつりと言ったのだった。

「先生に相談するね。シュウトは臓器移植の意思表示もしていたから」

それはシュウトの「死の予定」についての話だと気づいたとき、エミルは突然、厳肅な思いにうたれた。自分もその死に立ち会いたいという気持ちが生まれたが、言い出せなかった。

ミサの話もした。ミサは中一で、難関校の雄心学園に入学したばかりだということ。エミルは、雄心学園の名をつい数日の間にどこかで聞いたように思ったが、それがどこでか思い出せなかった。でも、なぜかこの私立校の名前は心に引かかった。

それから、ミサが不良たちに連れ去られたこと。シュウトが電話で呼び出され、バイクで出かけたこと。無理やりクスリを飲まされたこと。不良たちが約束を守らず、ミサをクルマに乗せたまま発進したこと。それをシュウトが追いかけて、事故に至ったこと。事故の瞬間をミサはクルマのリアウィンドウから見ているという。それだけにミサのショックは大きかった。半月ほど前のことだという。

事故はよみうりランドの丘を越えたあたり、道路が急カーブを描く地点で起こった。クスリを飲まされていたシュウトはカーブを曲がりきれずにバランスを崩し、ガードレールに激突した。

シュウトの横たわるロウ人形のような姿を集中治療室で見た瞬間から、心の中にわきあがった焼けつくような感情を、エミルは消し去ることができないでいた。それは暗い炎のようにずっと燃え続けた。だから、事故の話を終えてミサが口を閉じたとき、エミルはこう告白したのだ。

「その不良の一人はわたしの小学校の同級生です」

ハヤタさんとミサは驚きに目を大きく見開いた。

「鈴木という同級生です。住所も電話番号もわかります。何かメモできるものがありますか？」とエミルはトートバッグから携帯電話を取り出した。

ミサがリュックの中から出した小さなメモ帳と、小さなボールペンをエミルの前に置いた。

「ありがとう」と、エミルはメモ帳の空白のページに、携帯電話のディスプレイに表示された鈴木の名前と住所と電話番号を写しとった。

エミルはメモ帳を開いたままハヤタさんに差し出した。

「どうして、知ってるの？」

ハヤタさんが聞いた。

「わたしの親戚の子が薬物依存症にかかりました。その子に薬物を売り渡していた不良の一人が、この鈴木という同級生なんです。その鈴木から、わたしの友人たちが直接聞いたそうです、シュウトさんの事故のことを……」

エミルは鈴木がすぐに警察に追われ、逮捕されることを承知でハヤタさんに鈴木の名を告げた。いや、むしろ逮捕されることを願っていた。死の境界線上に横たえられたシュウトの肉体を見た瞬間から胸に灯された怒りと憎しみの炎がそうさせた。

おそらく、エミルが病院を出た後、ハヤタさんはすぐに警察に連絡したはずだ。とすれば、いまごろ、鈴木はすでに逮捕されてしまったかもしれない。

電車の車両のすみっこで考えたことの半分は、その鈴木のことだった。

きのうの食堂での話し合いで、時間をくださいとみんなに言ったのは自分なのに、怒りと憎悪からその言葉をひるがえしてしまった。一方で、ハヤタさんとミサさんの苦しみを思えば自分は完全に正しいことをしたのだという思いも強く心を満たした。

それでも、代々木上原の駅を降りて、ケプラーハウスに向かう静かな屋敷町の坂道を上り始めると、エミルの心は罪の意識のようなもので暗くふさがれていった。

そのとき、トートバッグの中で携帯が振動した。出ようかどうか迷った。でもハヤタさんかもしれないと思い、携帯を取りだして耳に当てた。

「もしもし、エミルさん？」

やっぱりハヤタさんだった。

「はい」

「これだけお伝えしておこうと思って。さっき、警察に電話をして、シュウトの事故の担当刑事さんに鈴木という子のことを知らせました。ありがとうございます。でね、匿名の電話がわたしにあったことにしました。刑事さんは少し不審そうでしたけど、とにかく、わたしの携帯に匿名の電話があつて鈴木という子のことを教えてくれたと話したの。匿名の相手の電話番号はわかりませんかと聞かれたので、非通知でしたと答えておきました」

エミルは驚いて聞き返した。

「あの、わたしはかまわないんです、警察に調べられても」

「それはダメよ。だって、死んだ人と話ができるとか、シュウトと話をしたとか、そういう

う話をしなくちゃならなくなる。警察はそんなことは真に受けないでしょ。だから、あなたに迷惑がかかることになる」

「ありがとうございます」とエミルは携帯を耳に当てたまま頭を下げた。

「シュウトのこと、連絡しますね」

その言葉に、エミルの胸の内側はまた荒々しくかき乱され、息が詰まった。ハヤタさんが言った。

「大丈夫？」

なんとか呼吸ができるようになると、エミルは震える息を吐き出した。

「はい」

「エミルさんも電話してね」

「はい」

「じゃ」

電話が切れた。

エミルは手の甲でゴシゴシと目のまわりをこすると、また、ゆっくりと坂を上り始めた。すると「エミル！！」と呼ぶ女性の声が聞こえた。

坂の上のほうを見上げると、夕焼けを背負ったママがこちらに向かって下りてくる。

ママは「そろそろ帰ってくるころかなと思って！」とエミルに聞こえるように大きな声で言った。

坂を登るエミルの歩みが早足になった。

坂の途中で二人は向かい合うと、ママが言った。

「どうだった？」

エミルは何も答えず、ママの右肩に涙でぐしょぐしょの顔を押しつけた。ママはエミルの背中に優しく両腕を回して、きつく抱きしめた。

「さあ、家に帰ろう」

ママはそう言って、回した両腕をほどくと、右手でエミルの左手をにぎった。

二人は手をつないで坂道を上り始めた。

いまは何時だろう？ 夜なのは間違いない。ブラインドのすき間から規則的に射しこんだり、消えたりする赤や黄の光はきつとどこかのネオンサインだろう。

となりの部屋で、金髪男はさつきからテレビを見ている。ときおり、大きな笑い声が破裂するように響きわたる。

じっと何も動かず、長い間、床の上に仰向けで横たわっているうちに、しだいに鈴木の中の言葉というものが戻ってきていた。

オレは生きてここを出る。鈴木は自分にそう言い聞かせた。オレは生きてここを出ると、でも、どうやって？

その時思い出したのが、きのう、自分をつかまえ、連れ回し、この窮地の原因を作った張本人のあの女性の言葉だ。助けが欲しいときは電話をしろと言ってたっけ。電話番号を書いたメモを渡された。あれはどこにある？

鈴木はジーンズのポケットをまさぐった。コインポケットにクシャクシャの紙があった。出して広げると、電話番号が書いてあった。

だが、問題は どうやって電話をするかだ。

ずっと着たままの迷彩模様のパーカーはビリビリに裂けていて、ポケットの中にあったはずの携帯はない。

いずれにしても障害は金髪男だ。彼がいる限り、何もできない。

腕力では確実に負ける。おそらく、ナイフだって隠し持っているだろう。それにヘタをして手錠をはめられたら最悪だ。

金髪男に覚せい剤を注射する？ どうやって。

何かでなぐって気を失わせる？ 失敗したら手錠だ。

トイレに閉じ込める？ 外から鍵はかかるのか？ それに携帯電話を持ったままだったら。

眠るのを待つ？ おそらく、眠る前には逃げられないように鈴木を手錠でどこかにくりつけるだろう。

もっと大きな問題がある。

この部屋の窓はすべて腰の高さから上の腰窓で、ベランダというものがない。しかも、確かここは5階か6階だ。窓から脱出するのは不可能だ。

さっきトイレを使わせてもらったときにわかったが、トイレには窓がないし、浴室というものもなかった。

つまり、密室だ。

たとえば高村の親族に助けを求めたとしても、連中はどうやってこの部屋に入ってくるの

だ。カギがないのだから、この場所がわかったとしても鈴木を助け出すことは不可能だ。どう考えても、状況は絶望的だった。

そのとき、金髪男の声がとなりの部屋から聞こえてきた。携帯電話でだれかと話をして
いるのだ。

話が終わった金髪男がのっそりとドアを開けて鈴木のもとにやって来た。

どかりと鈴木の前に座り込むと、金髪男はニヤニヤ笑った。

「鈴木よお。やっぱ、おめえ、死刑じゃけ」

いまは恐怖心よりも金髪男への腹立ちのほうが勝った。

「なんでですか」

「おめえ、警察に追われちよるんよ。おまわりが、おめえを探しまわっとるけえね、上のほうの方々がおめえを消せゆうたんじゃと。あしたの夜遅くな、狐さんたちがここに来るよって、それまでの命やのう。かわいそうに」

そう言いながら残酷な喜びに金髪男の唇はへの字に緩んだ。

「でも、よかったのう。あと24時間は生きられるし。これもカミさんのおかげじゃ。なんでもな、例のメインイベントな、明日の夜8時から始まるっつー話じゃ。それでケリつい

たら、いよいよ鈴木のいっちゃん死刑執行じゃ」

「メインイベントってなんすか？」と鈴木が聞いた。

「自分の死刑よりも、メインイベントのほうが気になるか。度胸あるのう。ま、オレも詳しいことはわからんよって、想像じゃが、カミさんが一番復讐したい連中をいてえ目にあわせる。んでな、それが組織にとっての利益にもなる。一石二鳥、ゆうの？」

「相手は誰っすか？」

「知るか」

「超能力者なんすか？」

「カミさんか？ おう。わしな、カミさんが組織の事務所にいっちゃん最初にきたときな居あわせたんよ。おなごみたいに長い髪して、やせこけた子どもでな、まだ小学生じゃった。1年ちょっと前じゃよって、5年生か6年生じゃろか。親分に会わせろゆうーから、狐さんが面白がってからかったわけじゃ。バタフライナイフを出してな、カミさんの首に刃をあててな、お子ちゃまの来るところじゃねえ、とっとと帰ちなゆうた。そしたらな、なにが起きたと思う？ 急にな、狐さんの顔が真っ青になってのう、ナイフを自分で自分のノドに当てよる。わやじゃ。わやわやじゃ。カミさんがまた親分に会わせろゆうた。狐さん

はあわてたようすで、わかったとゆうた。したら、狐さんの手からナイフが落ちたんじゃ。それから狐さんはカミさんをクルマに乗せてどこかに連れていったんよ。親分のところじゃと思うが」

「それ以来っすか？」

「それ以来よ。カミさんは予言もするっちゅー話じゃ。ガサ入れがいつあるかもわかるよつてに、組織はカミさんをよう手放せん」

そう言つて、金髪男は大きなあくびをした。

「寝るか。12時過ぎとるし。悪いが、ワッパ、せんじゃあ。ワッパしながらでもシヨンベンはできるやろ。わしは倉庫で寝るよつて。ドアには鍵かけるけん、おまえは入つて来れん。外にも出れん。この部屋か、便所か、そこにしかおれんちゅーことじゃ。台所には包丁もなんもない。なんもできんからに、へんなこと、すなやあ」

戦闘服のポケットから手錠を出すと、金髪男は鈴木の両手にカシヤカシヤと手錠をかけた。最悪だと鈴木は思った。

金髪男は立ち上がり、うおーっと奇声をあげて伸びをすると、「へんなこと、すなやあ」とまた繰り返して、倉庫部屋へと消えた。

まだまだ希望はある。鈴木は自分に言い聞かせた。ここであきらめるもんか。

とはいえ、なんの手段も思い浮かばないことにかわりはなかった。

明日、金髪男が目をさましたら、なにかチャンスが訪れるかもしれない。それまで待とう。時間はある。鈴木はおなかに力を入れた。

やがて、鈴木はゆっくりと眠りに落ちていった。

その眠りの中で鈴木は異様なほど現実味のある夢を見た。

夢の中で、高村兄弟の親族と名のつたグループの、あのショートカットの女性が、鈴木を異様な輝きをしたなまなざしで見つめていた。彼女はチカチカまたたくネオンを背に立ち、鈴木に向かってこう言った。

「静かに後ろの窓を開けて外を見なさい」

鈴木が「えっ？」と夢の中で問うと、女性はもう一度言った。

「静かに後ろの窓を開けて外を見なさい」

鈴木はブルっと体を震わせて目をさました。

確かに夢だった。だが、その声は現実のもののようにハッキリと聞こえたし、今も頭の中で反響しているようだった。

静かに後ろの窓を開けて外を見る……。

鈴木は連れ回されたクルマの中で、あの女性が自分にテレパシーのようなもので語りかけたことを思い出した。

もしや、と鈴木は静かに立ち上がると、ブラインドをからだで持ち上げるようにして上半身をそっと内側にくぐらせた。手錠をかけられたままの手だったが、アルミサッシの窓のカギはかんたんにおろせた。

鈴木はとなりの部屋の音に耳をそばだてながら、そっとアルミの窓枠に手をかけるとゆっくりと右に引いた。窓が開いた。

そこから見えた光景に鈴木は息をのんだ。

窓のすぐ下で、昨晚、鈴木のベルトをがっちり握って放さなかったあのブルース・リーに似た男子が、こちらを見上げていたのだ。

彼は、人さし指を口に当て、唇の形で「シー」と伝えた。鈴木の前は何が起きているのかわからず、混乱した。

目をこらすと、鈴木は理解した。脚立を伸ばしてハシゴにしたものを、隣のビルの屋上からこちらのビルに立てかけていたのだ。ハシゴの下のほうには数人の黒い人影があった。

きつとハシゴを支えているのだと鈴木は思った。

ブルース・リーに似た男子が、こんどは手招きをして、何段か下りていった。鈴木に下りてこいと言っているのだ。

手錠をしたままハシゴを下りることができらうかと不安が頭をよぎったが、やるしかない。鈴木は心を決めた。隣のビルの屋上とこの部屋との高低差は3メートルか4メートルだろう。たとえ途中で落ちたとしても、屋上に落ちればケガですむ。

鈴木は窓のレール枠を両手でつかむと、そろそろとからだを窓枠にのせ、足が外側に向くまで回転させた。それから、レール枠を両手でしっかりつかんだまま、足をそろそろと下におろした。右足が、そして左足が、ハシゴのステップにのった。鈴木はからだ全体をハシゴにあずけるようにして、ゆっくりとハシゴを下りていった。ブルース・リー男子が鈴木の下にいて、何かあったら補助しようと思がまえているのがわかった。

やがて、堅いコンクリートの上に両足が着いた。

見まわすと、鈴木を連れ回したあのメンバーがそろっていた。スキンヘッドのおっさん。メガネを掛けて顔の下半分がひげだらけの男子、そしてあのショートカットの女性。

鈴木は思わず、ペコリと頭を下げた。

ブルース・リー男子は急いで脚立をたたんだ。

スキンヘッドのおっさんが、「さ、こっちだ」とささやいた。

脚立の前後をブルース・リー男子とヒゲモじゃ男子がかかえ、鈴木はスキンヘッドのおっさんに背中を押されるようにして、屋上出入り口へと小走りに向かった。

鈴木は一度後ろを振り返ったが、開けっ放しの窓にはブラインドが白々とかかっているだけで、恐れていた金髪男の顔はなかった。

麻雀屋やら、小さな飲食店やらが入っているそのビルの階段を下りて外に出て、近くの駐車場に向かった。そこにあの黒のCX5があった。

ブルース・リー男子とヒゲモじゃ男子がクルマの屋根のキャリアーに脚立をロープで固定すると、全員がクルマに乗った。一昨日と同じように、鈴木はブルース・リー男子とヒゲモじゃ男子にはさまれて後部座席に座った。

クルマをすぐさま駐車場から出すと、スキンヘッドのおっさんは手慣れたハンドルさばきで路地から路地へと走り抜け、やがて大きな幹線道路に出た。

模型飛行機の巻いたゴムが勢いよくほどけるように、張りつめていた神経がちまちむるんでいくのを鈴木は感じた。殺されないですむ。生きていられる。うれしかった。

ショートカットの女性が言った。

「わかった？ 組織というのは、あなたがペコペコして上の命令に従うことしか求めないの。奴隷と同じよ。邪魔とみれば、誰にだってそうやって手錠をかけるのが組織つてもよ」

確かにそうだと鈴木は思った。それまでは学校や家とは違い、組織の中では自分は大事にされていると思っていた。自分が自分だという手ごたえがあったし、自分の行い一つで人を苦しめたり、反対に許したりという、全能のような力を持っているという感覚もあった。でも、すべては錯覚だったのだ。なんの価値も無い歯車にすぎなかったのだ。

それにしても——と、鈴木は急に不思議に思った。

「なんでオレがあそこにいるって、わかったんすか？」

女性が答えた。

「キミがいるだいたいの居場所がある人間が遠隔透視をして見つけ出した。とても時間がかかったわ。それから、その場所に行って、こんどはわたしが近くから透視をして、キミのある部屋を特定した。中の様子もなんとなく透視できた。それからどうやって助け出すかみんなで相談して、脚立を車に積んで出直してきた。そんなところ」

「……」

「ある人から連絡があったの。よみうりランドの事件で警察がキミの家に行ったら、おとといから帰ってきていないって家の人に言われたって。財布が机の上に置きっぱなしだったって」

そうだった。兄貴にリュックを渡したら家に戻るつもりで財布を置いて出たのだ。

「わたしたちは心配した。おととい、あなたを連れ回して話を聞いたことが組織にバレたんじゃないかって。わたしたちにも責任があると思った」

スキンヘッドのおっさんがバックミラーごしに鈴木をちらと見て言った。

「なあ、何か新しい情報は聞かなかったか？」

鈴木は遠い昔のことのように、あの部屋で金髪男が話したことを思い出した。

「メインイベントは明日の夜の8時だっつー話で」と言って、鈴木は「ああ、もう、きょうだ」とダッシュボードのデジタル時計を見てつぶやいた。午前2時をまわっていた。

「場所は？」とスキンヘッドのおっさんが聞く。

「わかんねっす。でも、カミさんが一番憎い連中を痛い目に合わせるんだそうっす。あとは、なーんも……。あ、カミさん、他人の行動を超能力で操れるみたいっす」

「行動を操る……？」と女性がつぶやいた。

「他には？」とスキンヘッドのおっさんが言った。

「ないっす……。すんません」

「いいのよ、あやまることじゃない」と女性が言った。

すると鈴木がポツリと言った。

「おれ、殺される予定だったんす。きょうの夜……」

車内に数秒の間、沈黙が広がった。女性が母親のような口調で言った。

「怖かったですか？」

鈴木は小さな子どものように何度もうなずいた。

またしばらく沈黙が続いた。

やがて助手席の女性がゆっくり振り向いて、鈴木の顔を見つめた。

「これから、このクルマは新宿警察のそばまで行きます。そこでキミをおろします。そう

したら自首してください。どうせ手錠したままだどこにも行けないでしょ？」

鈴木は全身から力が抜けていくのを感じた。それは絶望と安堵がないまぜになった不思議な感情だった。今までの生活にはもう戻れなくなると言う絶望。一方で、もう逃げなく

ていい。もう命の心配をしなくていいという安堵。そしていまフツフツと湧き起こってきたのは、もう一度やり直そうという希望だった。

殺されると観念したとき、突然、家族が愛おしく思えた。まるで取り替えのきかない自分のからだの一部のような、決して失っては生きていけない、唯一無二の価値を見出したような気がした。

そうだ、自首しよう。自首して組織とキツパリと縁を切ろう。そしてまたやり直そう。こんどは勉強もちゃんとしよう。そう鈴木は力の抜けたからだの中で考えた。

やがてクルマが止まった。

女性が言った。

「ここから20メートルほど歩くと新宿警察よ。大丈夫？ それから、わたしたちのことは内緒にしたほうがいい。遠隔透視だのテレパシーだの、どうせ信じてもらえないから。見張りのすきを見て逃げ出してきたと言えればいいわ」

鈴木はコクリとうなずいた。

「じゃ」と女性が言った。

「がんばれよ」とヒゲもじゃ男子が言った。

「くじけんなよ」とスキンヘッドのおっさんが言った。

「希望を捨てるな。ブルース・リーだって新聞配達をしながら高卒資格をとって大学に入ったんだぞ」とブルース・リー似の男子が言った。

そのブルース・リー男子がまず車を降り、続いて鈴木が降りた。

鈴木はクルマに向かってペコリと頭を下げると、手錠をしたまま歩き出した。

鈴木は一度も振り返らずに歩き続け、やがて新宿警察の玄関の中に消えていった。

金髪男は朝の6時ごろに目がさめた。

となりの部屋からバサツバサツという物音がする。

あわてて起き上がり、ドアを開けて飛び込んだ。誰もいない部屋で窓のブラインドが風にはためいていた。

ブラインドを手でかきあげた。窓が開いている。下を見れば、隣のビルの屋上があった。まさか。手錠をしたまま、いや手錠をされてなかったって、ここから飛び降りられるわけがない。

そう思った金髪男は次にトイレに向かって声をかけた。

「おーい、いっちゃん。ションベンかい？」

返事がない。トイレのドアを開けた。鈴木はいなかった。

金髪男は再び窓に駆け寄った。

ここから飛び降りたのか？ ケガもせずには？ あいつ、スパイダーマンか？

次に金髪男が考えたのは、こんな大きなヘマをしたんだから自分もきつとただではすまない、兄貴たちに知られる前に、自分もできるだけ遠くに逃げてしまおうということだった。

退職金がわりだと、売り物になりそうなドラッグを紙袋にせっせと詰めこむと、金髪男は玄関のロックを解錠してドアを開け、部屋を飛び出した。

そのときだ。数人の屈強な男たちと鉢合わせした。金髪男は心臓が止まるほど驚いた。向こうも驚いたように目を見開いた。よく見ると制服を着た数人の警察官もまじっていた。

金髪男がダッシュしようと同傾姿勢をとった瞬間、「こら、待て！！」という怒声とともに、金髪男は廊下に倒され、大勢の男のからだのがのしかかった。中学の体育館でマットです巻きにされていじめられたときのことを、金髪男はぼんやり思い出した。

4章 化身

ねえ、ライ。

ぼくはこうして死者たちの世界をこの目で見てきたけど、どうしてぼくに見える死者たちはみんな怒りに顔をゆがめ、この世に執着してるんだろう。

他の死者たちはどこにいるの？

安らかに旅立った死者たちはどこにいるの？

ねえ、ライ、教えてくれよ。

ぼくはきょう死ぬつもりだ。

心が空っぽだからね。

きょう、やらなくちゃいけないことがある。

それがすんだら、ぼくは死ぬ。

死んだらぼくはどこに行くんだろう。

ここにいる怒りに顔をゆがめた死者たちと同じところには行きたくない。

死んだらもっと別なところに行きたい。

でも、どんなところに行きたいのかわからないんだ。

心が空っぽだからさ。

もう考える気力もない。

もう何もしたくない。

ただ一つの喜びだったあの少女の笑顔も、ぼくは怒りにまかせてはぎ取ってしまった。

まるで絶対の王のような、傲慢で強欲な自分がそこにいた。

それは憎い父親とうり二つだ。

だから、最後の復讐をすませたら、ぼくは死ぬんだ。

ねえ、ライ、聞いている？

5月1日、水曜日。

鈴木が自首したとルミさんから聞かされたエミルは、逮捕されたのでなくてよかったと思っただ。そこには希望がある。きのうから感じていた罪の意識が、すこしだけ軽くなった。昨夜、「鈴木の家に行ったら、おとといから留守で部屋の様子もおかしい」という連絡が警察からあったと、ハヤタさんがエミルに連絡をくれた。それでルミさんたちが動いたのだった。

鈴木のことはこれで終わったわけじゃない。これからずっと、できる限りの応援をしていかなくてはとエミルは誓った。

そしていま、エミルは食堂にひとり座り、アンジェリーナからの連絡を待っている。アンジェリーナは雄心学園の教師をしている友人に会うため、出かけていったのだ。

もうすぐ11時。ルミさんたちはすっかりつかれてしまって、まだやすんでいる。ルミさんは絵本作家、天道さんはプロの占い師にして画家、大澤さんはフリーのプログラマー、カメさんは医大生、セーヌ川はカメラマン。カメさんを除く4人は比較的自分の時間を自

由にコントロールできるが、カメさんはそうもいかない。連休中で本当によかったとエミルは思った。

玄関のドアが閉まる音がかすかに聞こえた。アンジェリーナかと思ったが、近づくとスリッパの音は2人分だった。高村兄弟だとエミルは思った。

案の定、食堂のドアが開いて、兄弟が顔をにゅっと突き出した。「連絡もしないで来ちゃって、ごめん」

「いいの」

兄弟はおずおずとエミルの正面に座った。

「落ち着かなくてさ」

「オレも」とエミルは言うのと立ち上がり、「お茶をいれてくる」と白いシャツの袖をまくり上げながら調理室に向かった。

調理室にエミルが入った直後、ジーンズに赤いジャケットのアンジェリーナが入ってきた。

「エミルは？」

「ここー！！」と調理室からエミルが大声で返事をした。

アンジェリーナがテーブルについて、ふーっと大きなため息をついたところに、トレイに冷たいハーブティーが入ったグラスを4つのせてエミルが調理室から出てきた。

グラスをそれぞれの前に置くと、エミルはテーブルにつき、アンジェリーナの顔をじっとうかがった。

「エミルの思った通りだった」とアンジェリーナが少しかすれた声で言った。

「うん」

「ハヤタミサと同じクラスにヤスダシヨウジという名前の生徒がいたわ。翔るの翔に数字の二。安田の弟だわ」

高村兄弟はポカンとして顔を見合わせた。

「な、なんの話？」と兄が聞いた。

「ちょっとだまって」とアンジェリーナがピシヤリと言った。兄は首をすくめた。

「しかも、ハヤタミサと安田翔二は出身小学校も同じだった。これでいろんな謎がとける」

「うん。安田のおかしな行動の理由もね」

高村兄弟の弟が「ハヤタミサ？」と不思議そうにつぶやいた。兄はゴクリとお茶を飲んだ。

きのう、ミサが中一で雄心学園の生徒だと聞いたとき、エミルはなにかが気になってしかたなかった。中一、そして雄心学園。この二つの言葉がエミルの胸をザワザワさせた。帰ってから、まず、雄心学園という名をどこで聞いたのかモレスキンのメモ帳を開いてみた。すると、アンジェリーナが調べた、最近のドラッグ事件の舞台となった有名校リストにその名があった。

そして「中一」という言葉。それは鈴木だ。カミさんという不思議な少年は中一だと鈴木が言っていたとルミさんから聞かされた。

その鈴木は今朝、「きょう、メインイベントがある」とも話していたという。

その「きょう」という言葉と安田の言葉がクロスした。「弟の誕生日の明日が過ぎたらすべてを話そう」——その「明日」とは「きょう」だ。きょうがメインイベント……。そういうえば安田の弟も中一で、有名校に進学したと聞いていた。中一、有名校……。

エミルはブルッと震えた。もしも安田の弟がカミさんだとしたら……。能流登家のDNAを持つ彼なら超自然的な能力を持っていても不思議じゃない。

安田が守ろうとした秘密。そして「安田に近づくな」と警告を発したカミさん。そのカミさんが守ろうとした秘密。その二つが同じ秘密だとしたら？ それは、安田の弟がカミさ

んであるということではないのか。

そう推理したエミルが、ハヤタミサの通う雄心学園に安田の弟がいないか調べてくれるようにアンジェリーナに頼んだのだった。

ハヤタミサだけは本人が薬物を飲まされていない。ターゲットはシュウトのほうだった。しかも、鈴木たちはシュウトをミサの恋人だと勘違いしていた。もしも、カミさんの嫉妬が動機だとしたら、カミさんはミサの近くにいる。そう直感したのだった。そしてその直感の中だとエミルはいま確信した。

エミルが言った。

「オレが最後に安田の弟に会ったのは、たぶん彼が小学5年くらいするとき。何かの法事だったと思う。そのときの彼はやせっぽちで、色白で、長い髪が左目を隠していた。暗い子っていう印象だった」

「それは鈴木の写真と矛盾しないわね」

「あ、あのう」と高村勇貴が口を開いた。「ぼく、1年ちょっと前に鈴木たちにつかまって、夜、プールに突き落とされたことがあるんです。そのとき、ぼくと同じくらいの男の子が鈴木の間において、その子もやせっぽちで髪が長くて、左目が髪に隠れていました。その

子は、このあいだ、ぼくがさらわれたときも、白いクルマに乗っていました」

アンジェリーナが弟に向かって言った。

「ルミさんたちが鈴木から聞いた話と一致するわ。鈴木はね、真冬にカミさんの命令でキミをさらって脅したって言っていたのよ。その場にカミさんがいたとも。だからキミが覚えてるその男の子はきっとカミさんだし、そしてそのカミさんとは安田の弟のことなんだわ」

「え、え、え……」と驚いた兄の口がまん丸になった。

高村勇貴がアンジェリーナとエミルを交互に見ながらこうきいた。

「つまり、すべては安田さんの弟が仕組んだということですか？」

「うん」とエミルが重々しくうなずいた。

「キミが言ってたでしょ」とアンジェリーナは高村勇貴に視線を戻して続けた。「カミさんはクルマの中にずっといて姿を現さないって。カミさんは鈴木たちとは違うクルマにいつも乗っていて、しかもそのクルマの中からほとんど出ることがない。だから、ハヤタミサもクラスメイトの安田翔二が自分をさらった現場にいたとは気づかなかった」

「ここからは想像なんだけど」とエミルが言った。「安田の弟はハヤタミサに小学校の頃

から好意を寄せていたんじゃないかしら。ところがミサの兄のシュウトは安田の弟をミサから遠ざけようとした。あるいは、そう思われてもしかたない何かがあった。シュウトは妹思いだったからね。それで安田の弟は怒り、復讐した」

アンジェリーナはため息をひとつつくと、ひとりごちのようにつぶやいた。「鈴木はきょう、メインイベントがあると書いていたわ……。とりかえしのつかないことが起きないといいけど……」

エミルはハッとした。

「安田は知っていたんだ！ 弟が自分の誕生日のきょう、とんでもないことをたくらんでいるということを知っていたのよ。だから、あんなことを言ったんだわ」

「きょうが過ぎたらすべてを話す……」

「でも過ぎてからでは遅い。いまずぐ、安田と話さなくては。でも、どうやったら……」

エミルは檯のテーブルの上に置いた両手をきつく握った。

「あ、あ、あのう」と高村見太郎が右手を上げた。全員の視線が集まった。

「や、安田はですね、カメさんの iPhone を持ってます」

「早くそれを言え！！」とアンジェリーナが大声で言った。

「や、で、でも、だれも聞かなかったし……」と高村見太郎はまた首をすくめて小さくなった。

「エミル、カメさんの iPhone の番号、知ってる？」とアンジェリーナがきいた。

エミルは首を振った。

「カメさんどこに行こう」とアンジェリーナは立ち上がると、エミルとともに走るようにして食堂を出た。

残された兄と弟は顔を見合わせた。「わからん！」と言って兄はテーブルの上につつぶした。

ノックをするとドアが開いて、髪の毛に寝ぐせをつけたままのカメさんが現れた。エミルは「ごめんなさい」と言って、状況をかいつまんで話した。

それから散らかっているカメさんの部屋からみんながエミルの部屋に移動した。

高村兄弟もいたほうがよいということで、カメさんが食堂から二人を連れてきた。

エミルがパソコンの前に座り、その横にアンジェリーナが机に寄りかかるようにして

立った。高村兄弟とカメさんはベッドの上にちょこんと座った。

まずエミルが自分の携帯からカメさんの iPhone に電話をした。

呼び出し音が鳴り続けるが、安田は出ず、カメさんの声で留守録メッセージが流れた。

「安田くん、エミルです。君の弟のこと、そして今夜8時からおこなわれるものこと。

キミと相談したいです。すぐにオレにスカイプしてください」

そう言って、エミルは自分のスカイプアカウントを告げた。

「スカイプ、くれるかな」とエミルはひとりごとのようにつぶやいた。

するとパソコンの画面上でスカイプのアイコンが飛び跳ね、着信音が鳴った。エミルが

マウスで「通話」をクリックした。

「もしもし」

エミルがパソコンのマイクに向かって言った。

「もしもし」と安田の声がスピーカーから流れ出た。

「安田くん？」

「うん。エミルか」

「いまどこ？」

「タクシーの中」

「タクシー？」

「うん」

「タクシーでどこに行くつもり？」

「追いかけてるんだ」

「翔二くんを？」

「察しがいいね」

「尾行？」

「ま、そうだ……」

「翔二くんはカミさんと呼ばれている少年のことよね？」

唐突にエミルが切りだした。安田は沈黙した。

「安田くん、聞いている？」

「……知ってるのか？」

「キミの幻覚に出てきたハヤトっていう少年のことを追いかけた。そうしたら、いろんなことがわかってきた」

「ハヤトは実在したのか？」

「うん。名前は違っていただけだね。ハヤタシュウトっていう」

「そのハヤタって人に弟は何かしたのか？」

「うん。した。とつてもひどいことをね」

「……そうか……」

「教えてほしいの。どうして安田くんは自分からすすんで薬物を飲んだの？」

「……翔二に見せたかったんだ。どれだけ悲惨か。あいつはクルマに乗っているだけだからな。自分がどんなにひどいことをしているか、わかっちゃいなかった。だから、オレが自分の体で見せてやった……。そしたらさ、逆に弟はオレを薬物依存にしようとしたんだ。ヤクザたちが毎日のように家にやって来てはさ、オレに力づくで薬を飲ませた。で、実際に中毒になっちまった」

「……そうだったの……」

「残念ながら、あいつにとっては兄弟愛より憎しみのほうが強かったんだ」と言って安田はクツクツと笑った。「あいつはずつといじめられっ子だったんだ。ほんと、ひどいイジメにあったんだ……。親からもね……」

「親からも？」

「ああ……」

「組織のこと、いつ知ったの？」

「1年ちょっと前だ。高村の弟がおどされたことがあって、そのころに初めて知ったんだ。あいつの様子がおかしいんで、オレ、あとをつけた。そしたら、不良どもと待ち合わせして、そして勇貴をさらって……プールにけ落とした。あいつはいかれてる……」

「ねえ、今夜8時に何があるの？」

「8時？ ……どうして知ってる？」

「鈴木から聞いた。鈴木、警察に自首した」

「自首したのか……」

「教えて、何があるの？」

「……わからない」

「じゃあ、うちに来て」

「……いまから？」

「何時なら来られる？」

「無理だよ。行けない」

「どうして」

「エミルたちに迷惑をかけるわけにはいかない。危険な目にはあわせられない」

「キミ一人ではそれこそ危険だよ」

「オレの家族の問題なんだ」

「でも、たくさんの人をすでに巻き込んでいる」

「ごめん。切る」

スカイプが切れた。

エミルは肩を落としてうなだれた。

アンジェリーナが言った。

「安田は弟を尾行して、今夜8時に何かが起こるといふ場所を突き止めようとしている」

高村兄弟がそろって「はぁー」と大きなため息をついた。

するとカメさんが「そうだ!!」と声を上げた。

「ぼくのiphoneを安田くんが借りたのは神様の思し召しだよ。だって、ぼくのiphoneだから、ぼくはそのiphoneがどこにあるかを知ることができるんだ」

アンジェリーナが「どういうこと？」と首をかしげた。

「あのですねえ、ぼくのiPhoneには……とゆーか、すべてのiPhoneにはGPSが内蔵されています。で、iPhoneには盗難にあったときのために、所有者がパソコンを使って盗まれたiPhoneがどこにあるかを知ることができる機能があるんです」

こんどはアンジェリーナがパチンと手を叩いた。

「なるほど。カメラさんのiPhoneがあるところ、イコール安田のいるところというわけか。すごい、カメラさん!!」

「いや、ぼくじゃなくて、ステイブ・ジョブズがすごいんですが」

「カメラさん、それ、いまできる？」とエミルが振り向いた。

「うん。エミルちゃん、パソコン、使っていい？」

エミルが立ち上がり、カメラさんがかわりにイスに座った。

カメラさんはアップルのiCloudにアクセスすると、自分のIDとパスワードを入力した。現れたメニュー画面から「iPhoneを探す」というアイコンをクリックする。

するとすぐに地図が現れ、その地図の中央にブルーの点が出現した。

「安田くんはいまここにいます。港区ですね。神谷町のあたりを移動している」

「カメさん」と、エミルが腕組みをした。「夜の8時ごろまで、定期的に安田のいどころを調べてもらってもいい？」

「もちろん。10分に1回のスパンで調べるよ。ぼく、ずっと部屋にいるからさ、いつ来てもいいから」

「ありがとう」とエミルが頭を下げた。

「食堂に戻って作戦を立てよう」とアンジェリーナはそそくさと部屋を出た。高村兄弟もカメさんも追いかけるようにして食堂に向かった。エミルは「もうちょっとしたら行く」と言って部屋に残った。

部屋の中がシーンとした。

エミルは目を閉じ、心を落ち着けた。

エミルは携帯を取り上げると着信履歴の一つをタップした。呼び出し音が鳴り、そしてハヤタさんの声があった。

「もしもし」

「もしもし、エミルです」

「ああ……わたしもいま電話しようと思っていたの」

「はい」

「……午後3時に決まりました」

「……はい」

「お願いがあるの」

「はい」

「シユウトがちゃんと天国に行けたかどうか教えてくれる？」

「……わかりました」

語尾がふるえた。泣くのを我慢したが、涙は意志に関係なくほほをつたった。

「ほんとうのことを、教えてね？」

「……はい」

「じゃ」

電話が切れた。

午後3時。その時間にはこの部屋で一人にならなくては。

胸の動悸が収まるのを待って、エミルは食堂に向かった。

観音開きの大きなドアを開けると、全員顔が一斉にエミルを向いた。

エミルは暖炉の横に立ち、みんなの顔を見た。

「みなさんに相談があります」

エミルは、カミさんとは安田の弟だと断定した理由を説明し、安田自身がそのことをスカイプでの会話で認めたことを伝えた。

「鈴木が今夜8時にメインイベントがあると言いました。安田はそのことも知っていました。でも、そのメインイベントとは何で、場所はどこなのかは話しませんでした。おそらく、安田自身も知らないでしょう。だから、安田は弟の乗ったクルマをタクシーで尾行しているんだと思います。8時に弟が行く場所をつきとめるためにです。中三の鈴木を口封じのために殺そうとするような残忍な連中と、安田の弟は一緒に行動しています。ですから、8時のメインイベントというのは、とても危険なものかもしれません」

「警察に連絡するという選択肢は？」とルミさんが聞いた。

「あります。これまでは安田の父親が警察の署長だということから、ためらいがありました。でも、今夜は警察に来てもらうしかないと思っています。ただ、今の段階では警察に連絡しても、警察は信じてくれるでしょうか。まず、私たちの不思議な力というものを理

解してもらえない」

ルミさんがうなずいた。

「オレはこう考えます。まず、8時の場所を特定する。それにはカメさんが頼りです。そして、オレたちが行って様子を探ります。そこで警察を呼ぶべきだと判断したら、警察に連絡します。警察は現行犯で逮捕できます。これが一番よい方法じゃないかって思うんです」

「賛成」とルミさんが言った。

「ほかに賛成の人」とエミルが言うと、全員の手が上がった。

「では、そうします」とエミルは唇を一文字に結んだ。

すると、「親だろうなあ」と天道さんが唐突につぶやいた。

「えっ」とエミルが天道さんを見ると、「親だよ、両親だよ」と天道さんは繰り返した。

エミルが言った。「オレもそう思います。安田の弟が一番憎んでいるのは両親じゃないかって」

「とすれば」とアンジェリーナが言った。「8時のメインイベントの場所は安田の家ってこと？」

「たぶん。でも、カメさんにはちゃんと iPhone を見張ってもらわないと」
カメさんが力強くうなずいた。

午後 2 時半すぎに、エミルは自室のドアの前に「瞑想中!!」と大きく書いた画用紙を貼り付けた。

それからベッドに仰向けに横たわり、静かにその時を待った。

ちようど顔の横にあるハトホル像に向かって、エミルは「手伝ってください」と小声で二度言い、目をつむった。

全身の力を抜き、ゆっくりとした呼吸を繰り返す。

大地からのエネルギーを自分を包み込む光の繭に変える。

その光の繭をどんどん厚くした。

肉体の感覚が無くなり、エミルは光の繭とともに異なるリアリティーの中に浮かんだ。

遠のきそうになる意識を引き留めながら、エミルはシュウトを呼んだ。

暗闇の中から明るいグレー色のトレーナーにチノパン姿のシュウトが現れた。

シュウトは空港のような、多くの人が行き交う建物の中に立っていた。

シュウトは理解しているようだった。文字通り、自分がこれから、ようやく旅立てるところを。

お兄さん——エミルはシュウトに向かって、そう呼びかけた。

「妹か」

そう言ってシュウトが笑った。

未練や執着は感じられなかった。

まるで憧れの外国への旅に出かけるかのように、シュウトは晴れやかだった。

すると「エミル」という別の声があった。

シュウトのうしろに背の高い人が立っている。

前もそうだった。そのときは、ぼんやりして顔がわからなかった。

その顔がいまははっきりとした。

エミルと同じ栗色のカールした髪。大きな口。アーモンド型の青みがかった目。

パパだった。

まるでおそろいのようなグレーのトレーナーを着て、パパも晴れやかにほほ笑んでいた。

「パパ」とエミルは呼びかけた。

「シュウトは胸を張って帰還する。帰り道はパパが一緒だ。心配するな。リリースも助けてくれる」

そしてシュウトとパパの背後に、とつてもモダンなデザインのエスカレーターが現れた。すべてがガラスとアルミ合金でできたような、銀色に輝くエスカレーターだった。それは青空のずっと上、気が遠くなるほどの高みまで伸びていた。

「またな」とシュウトが言った。

「またね」とパパが言った。

ふたりはキラキラ輝くエスカレーターのステップに足を乗せた。ゆっくりと二人は上昇していった。二人はずっと笑顔のままだった。やがて二人は遠近法の消失点で消えた。

と、突然、頭の中をおかしな音がかけめぐった。エミルのトランス状態は蒸発するかのようにならなくなり、エミルは目を開いた。

携帯電話の着信音だった。

重い体を横にして、サイドテーブルの上の携帯電話を手に取った。

「もしもし」とハヤタさんの声でした。

「はい……」

「……シュウトね、いまさっき、行きました。静かに、静かに……」

ハヤタさんの声は、しっかりしていた。「シュウトは……どうでしたか？」

「パパと一緒に、天国に帰っていきました」

「そうですか」

「晴れやかでした」

「うん、うん」

「とっつても、晴れやかでした」

「うん」

「パパが言っていました。シュウトさんは胸を張って帰還するって」

「……」

「お兄さんとわたしが呼んだら、シュウトさんは『妹か』と……」

エミルは息苦しくなり、あとの言葉が続かなかった。

「エミルさん……ありがとう。安心した。ミサにも伝えておくね」

「はっ」

エミルの声はかすれた。

「ありがとう」

そう言って、ハヤタさんの電話は静かに切れた。

しばらくのあいだ、エミルの心はほどけたゼンマイのように力なくただよった。

それから、エミルはその心のゼンマイをゆっくりと自分で巻き始めた。やらなければならないことがある。

そしてまず、ハヤタさんへの手紙を書いた。

死者は肉体を脱ぎ捨てた状態で1週間前後、地上に残ることが多いけれど、シュウトさんがすぐに上昇していったのは、きっと、脳死状態のあいだにハヤタさんやミサさんとの別れをすませていたからだと思うこと。

そのために、パパが準備を手伝っていたに違いないこと。そう思うのは、シュウトさんがエミルのビジョンに現れるとき、いつも背後に背の高い人がいるのが感じられたこと。

それはきつとシュウトさんの旅立ちの準備を手伝いに来たパパではなかったかと思うこと。また望めば、ハヤタさんもミサさんも、シュウトさんとコミュニケーションができること。それは夢の中で起きるかもしれないこと。だから、どうか、悲しみから一日も早く立

ちなおってくださいということ。

そしてエミルは最後にこう書きしたためた。

《わたしはひとりっ子でしたが、ミサさんとはこれから姉妹としておつきあいできれば、こんなに嬉しいことはありません。ミサさん、わたしの妹になってくれますか。》

それから便せんを丁寧に折りたたんで、封筒に入れて封をし、ハヤタさんの住所と名前を書いた。そしてエミルは引き出しの中をひっくり返して80円切手1枚を見つけた。

早めの夕食を終えたケプラーハウスの面々は緊張した面持ちで食堂で待機した。エミルとアンジェリーナが交代でカメさんの部屋に行っては、安田の最新のいどころを確認し続けた。

カメさんによれば、安田は午後1時ごろからずっと東京タワー周辺からまったく動いていない。安田がiPhoneをそこに置き忘れてでもない限り、東京タワー周辺に安田の弟か、一緒にいる組織の何者かがそこに用事があるということだ。

いずれにしても、待つしかない。

エミルからハヤタシユウトの死を知らされていたこともあり、だれもが口数が少なかった。

午後7時20分頃、アンジェリーナがカメラさんの部屋から戻ると、こう告げた。

「安田はいま西に向かって移動している。いま南青山のあたり。おそらく、安田の実家に向かっているんだと思う。もう4、5分で表参道に入るはずだから、早ければ15分ほどで安田の実家に着くわ」

エミルが立ち上がり、言った。

「こうしませんか。まず、安田の弟たちが安田の実家に入るのを確認する役として、高村見太郎と大澤さんの二人にこれからすぐに向かってもらいます。高村はあのあたりは詳しくでしょ？ 安田たちに見つからないように監視できる？」

エミルが高村に視線を向けると、高村は「大丈夫っす」と胸を叩いた。

「あおう、ぼくは？」と高村の弟が自分を指さした。

「キミはここでカメラさんと留守番して。連絡役が必要だし」

「はい」と残念そうな表情を浮かべて高村の弟はコクリとうなずいた。

「高村と大澤さん、すぐに出発してください。連絡はオレの携帯に。アンジー、クルマ、

借りてもいいでしょ？」

「どうぞ」と、アンジーはポケットから取り出したキーを大澤さんに向かって放り投げた。片手でそれをすくい上げるようにキャッチした大澤さんは、「さっ」と高村に言う二人そろって食堂を出た。

「わたしたちもすぐに出発しましょう。八幡神社の駐車場で待機すれば、すぐに安田の実家に行けるはず。それから、警察に連絡する役を決めておきます。アンジー、お願いしていい？ どのタイミングで通報するか、最後はアンジーの決断にまかせたい」

「オッケーよ」とアンジェリーナがうなずいた。

「じゃ、行きましょう」

エミルが先頭に立って玄関へと向かった。

靴をはき、外に出ようとしたとき、廊下の奥のほうから「エミル！」と呼ぶ声があった。めったに話をしない村松さんだったから、みんなが驚いた。

ずり落ちそうになる銀縁の眼鏡を右手の人さし指で押しあげながら、村松さんは小走りで廊下を駆けてくると、エミルを手招きした。

エミルが怪訝な表情で村松さんの前に立つと、村松さんはエミルの耳元でコソコソと何

かをつぶやいた。

「ありがとうございます」とエミルはおじぎをして玄關を出た。

空にはまだかすかに太陽の光の余韻が青紫色のオーラとなって残っていた。

黒のCX5に乗りこむと、天道さんの運転で八幡神社を目指した。道が混んでいなければ、5、6分で着く。

大山町の坂を下り、代々木上原の駅前商店街を抜け、そして山手通りに出る。新宿方向にいったん進んで、途中でUターンして戻るようなかたちで黒々とした森におおわれた八幡神社の下にやって来た。坂を登って駐車場にクルマを入れ、天道さんがエンジンを切ったそのとき、助手席に座るエミルの携帯に電話が入った。

「もしもし、大澤さん？」

「いま、安田がタクシーを降りてひとりで家の中に入っていった。安田の弟はまだのようだね。きっと安田が先まわりしたんだと思う」という、大澤さんのさやくような声がした。

「了解。わたしたちはいま八幡神社の駐車場。動きがあったら、教えてください」

「了解」と大澤さんは電話を切った。

エミルの隣に座るルミさんが「エミル、なんか、イヤな感じがする」と寒そうに両手で

二の腕をさすった。

するとまたエミルの携帯が鳴った。反射的にエミルは受信をタップする。

「エミル！！」

耳に飛び込んできた声は高村見太郎だった。

「だまされた。すぐにクルマを出して。駐車場の入り口の前を白いクラウンが通るはず。それを追っかけて！！ 安田の弟はそれに乗ってる！！」

「天道さん、クルマをすぐ出して！！」

エミルは叫んだ。

天道さんはエンジンをかけると大急ぎでクルマを発進させた。

「駐車場の出口で止めて、白いクラウンが来たらつけてください。それに安田の弟が乗っている」

「よし」と言いながら天道さんは駐車場の出口に向かう坂道を下ると一般道への出口でいったんC X 5を止め、ヘッドライトを消した。すぐに白のクラウンがやって来ると、エミルたちの目の前を通り過ぎ、山手通り方向に向かった。

「逃がさねえぞ」と天道さんはアクセルを踏み、白のクラウンを追った。

おびただしい数の車が光の列になって流れる山手通りが見えた。通りに合流する交差点でクラウンは止まり、信号が青に変わるのを待っている。エミルたちの乗ったCX5はそのまうしろにそろりと止まった。

クラウンのリアウィンドウ越しに、少年の長髪と2人の男の後頭部がぼんやりと見えた。「エミルちゃんは顔を隠している。弟に見つかったらまずい」

天道さんが言うと、エミルはさっと顔を伏せた。

その姿勢のまま、エミルが電話を折り返すと大澤さんが出た。

「大丈夫？」とエミルがきくと、「大丈夫。あとでこちらから電話します。心配しないで」と言っ、大澤さんは電話を切った。

CX5は動きだし、左に曲がった。エミルのからだは右にふられ、そしてすぐにまっすぐに戻された。

「どこに行く気だ？」と天道さんがつぶやいた。

富ヶ谷の交差点を越え、東大裏の交差点にさしかかったときだ。高速道路との合流地点で、高速から出てきた大きなトラックが、白のクラウンとCX5のあいだに車体を無理やり割り込ませてきた。

「やべえ」と天道さんは車線を変えようとしたが、午後8時すぎの山手通りは混雑していて、とても無理だった。

しばらくそのまま南下し、国道246号線とまじわる神泉の交差点にやって来たときだ。信号が赤になり、前を走るトラックが止まった。

「くそ!!」

からだを右によじってしきりに前方を監視していた天道さんが叫んだ。

「行っちまいやがった……」

白のクラウンが交差点を右折して、そしてビルの陰に消えていった。

その10分前のことだ。

高村と大澤さんは安田の屋敷の門が見えるように、斜め向かいのマンションの植え込み
に隠れていた。1分もしないうちに、タクシーが停まり、デイパックを肩にかけた安田が
降りてきたのだった。安田はキョロキョロあたりをみまわすと、ジーンズのフロントポケッ
トから鍵を取り出し、大急ぎで門を開け、中に入ってしまった。

大澤さんがエミルに第一報を入れたのが、そのときだった。

それからまた1分か2分して、こんどはその安田家の門からだれかが出てくる。だがそれは安田ではなかった。しかも男二人だ。一人が門の鍵を閉めていると、白いクラウンがすーっと二人の視界の右側から現れて止まった。高村はこの白のクラウンに見覚えがあった。どこだろうと思っっている間に、男たちはクラウンに駆け寄り、一人は助手席に、もう一人はうしろに乗った。その後部座席のドアが開いたとき、長い髪の少年の横顔が車内灯に照らされたのを高村見太郎も大澤さんも見逃さなかった。高村が自分の携帯から大急ぎでエミルに電話したのがそのときだ。

「エミル！！　だまされた。すぐにクルマを出して。駐車場の入り口の前を白いクラウンが通るはず。それを追っかけて！！　安田の弟はそれに乗ってる！！」

高村と大澤さんは植え込みから飛び出し、門に駆け寄った。鍵がかけられた門はもちろんビクともしない。大澤さんが吐き出すように言った。

「あの二人、安田に何をしたんだ。ちきしょう、中に入れないじゃないか」

そのとき、高村は思い出した。安田が木戸の鍵は壊れていると言ったことを。

「大澤さん、こっち」と高村は石塀と隣のマンションの間へと大澤さんを引っばっていっ

た。そして、あのすき間からからだを入れ、カニ歩きをしているとき、エミルからの電話が鳴ったのだ。

「大丈夫。あとでこちらから電話します。心配しないで」と大澤さんは言うと、電話を切った。

高村と大澤さんは木戸のところまでやって来た。高村が木戸のステンレスのノブを回した。さびているのかまったく回転しない。こんどは思い切って押してみた。すると、木戸はあっけなく開いた。

そこは広い庭の隅だった。生い茂る木々のすき間から2階建ての大きな屋敷が見えた。屋敷にともる光が手前の池に金色に反射して揺れている。

高村と大澤さんは薄闇の中、屋敷をめがけて走った。

大きなバルコニーがあり、ガラス戸が何枚もつらなり、閉じられたカーテンは内側からほのかに明るく照らされていた。高村がガラス戸を引くとガラリと開いた。

「失礼します」と高村は土足のまま飛び込んだ。大澤さんが続いた。広いリビングルームだった。

「安田！！ 安田！！」

高村が呼んだが返事はない。

廊下に目をやると奥のほうの部屋から洩れ出ている電灯の光が見えた。

二人が駆けていくと、そこは応接間で、フロアランプがだいたい色の明かりをつけたまま床に倒れていた。

「安田！！」と高村がまた呼ぶ。すると、ガタンガタンという音が部屋の隅でした。二人が視線を向けると、ソファの暗い陰で、口に粘着テープが貼られ、両手両足をひものようなもので縛られた安田がしきりにもがいていた。

高村は口から粘着テープをそとはぎとった。大澤さんが安田の手足をしばっている梱包用のナイロンひもをほどこうとしたが、うまくいかず、「ハサミはどこにある？」と安田に聞いた。「キッチンになんかあると思います。この廊下の先」と安田が答えた。大澤さんはキッチンに向かって駆けていった。

「高村、すまん」

安田が頭を下げた。

「すまんじゃすまん」と高村が言った。「エミルたちの助けを借りると言ったのに、断りやがるからだ」

「迷惑をかけたくなかったんだ、家族の問題でさ」

「わかった。もういい」

大澤さんが戻ってくると、料理ばさみで安田の両手両足のひもを切った。

大澤さんは安田を支えて立ち上がらせた。

「ありがとうございます」と安田が大澤さんに頭を下げると、こんどは「よくわかったな、ここにいるって」と高村に向かって言った。

「iPhoneだよ、カメさんの。盗まれたときのために、位置がわかるようになってるんだって」

「そうか」

「おまえの弟だけど、どこに行ったの？」

「わからない。父親も母親もだ。来たら誰もいなかった」

「おまえをしばった二人、誰だかわかる？」

「弟といつも一緒にいるヤクザだ。弟たちのクルマが先にこっちに向かったんで、オレはとっくに弟たちが家にいるもんだとばかり思ってたんだけど、だれもいなかった。そして、突然うしろからはがいじめにされて、あつという間にしばられた」

「さあて」と大澤さんが腰に両手を当てて言った。「詳しい話はクルマの中で聞くとして、まずは君の弟さんがどこに向かっているのかを突き止めるのが第一だ。思い当たる場所はない？」と大澤さんは安田にきいた。

「あの、いま、ふと、思ったんですけど、あのお借りしたiPhoneです、あいつら持ってっちまったんです。オレの財布も一緒に。オレの動きを封じるつもりなんだろうけど、あいつら、大馬鹿です」

大澤さんもニヤリとして、「そりゃ、確かに大馬鹿だ」と言った。

高村もクスリと笑って、「エミルに伝えよう」と携帯をジャンパーの内ポケットから取り出した。

「もしもし、エミル？ あかね、安田は無事。……うん、元気。それでね、ヤクザたち、安田のiPhoneと財布を持っていった。……うん、そういうわけ。大馬鹿だ。……そうなんだ。……オレらもエミルたちのあとをこれから追うから」

高村が電話を切ると言った。「白いクラウンを追いかけたけど、見失ったらしい。246に入ったって」

「iPhoneを飛ばさなければよかった。ようし、オレたちも行こう。安田くん、

大丈夫？」と大澤さんは安田を心配そうに見た。

「大丈夫です」と安田は言う、そばに落ちていたデイパックを拾い上げ、玄関に向かって大またで歩き出した。

安田家からコインパーキングまで小走りで行き、アンジェリーナのミニクーパーに乗りこむと、大澤さんは素早くエンジンをかけ、山手通りに向けて狭い通りを駆け下りた。

山手通りに出たところで、兄の携帯に弟から電話が入った。

「兄ちゃん、安田さんの弟たちは、いま、池尻大橋を過ぎて三軒茶屋に向かっている」

「了解。また動きがあったら教えろよ」

「わかった。がんばってね」と弟は電話を切った。

助手席の高村は後ろの安田を何度も振り向きながら、これまで聞けなかったことを聞き始めた。

「結局さ、なんで入院したの？」

「翔二の差し金だ。たぶん、きょうの邪魔をされなくなかったんだ」

「でも、おまえのオフクロさんとオヤジさんの部下が連れてったんだろ、おまえを病院まで？」

「ああ。親父とおふくろは翔二に弱みを握られてるから、あいつの言うことは聞かざるを得ないんだ。だから翔二に言われるがまま、わけもわからず、オレを病院に入院させた。

だから、オレが脱走したと知って、翔二はあわてたんじゃないかな」

「それで、きょう、ヤクザにおまえを待ち伏せさせたのか……」

「うん。翔二は、オレが脱走したんで計画を変えたんだ。たぶん、オレが尾行しているのはわかってたんだろうな。オレにあいつをつけさせておいて、そのあいだに親父とおふくろをどっかに連れてったんだ」

「なんで、そんなに、おまえを怖がるんだよ、おまえの弟は？」

「オレに今夜の計画を知られてしまったと翔二は思った。だから、計画を邪魔されると考えたんだろ。肉親だし」

「なんの計画だよ？」

安田はごくりとのをならした。

「親父とおふくろをなんとかしようって計画さ」

「なんとかかって？」

「……最悪、殺す、かな……」

「……ええ？」

高村はうしろを勢いよく振り向いた。安田は目をつむっていた。

「そこまではしないと信じたい。でも、翔二はもう死ぬつもりなんだ……」

高村は前を向いて、「ふーっ」と大きくため息をついた。

「でも、どうして、親父さんとオフクロさんに逃げるとかさ、言わなかったのさ？」

「翔二の様子から、あいつの誕生日の夜8時に何かデカイことがあるというのは気づいていた。でも、そのターゲットが親父とおふくろだということまでは確信できなかった」

「だって、さっき、おまえ——」

「翔二のクルマがオレらの家の方角を指したとき、やっぱりって思ったんだ。標的はオヤジとオフクロかってな。で、やって来たら、家の中にいたヤクザにオレはつかまってしまった。で、親父とおふくろはいない。それで確信したんだ。遅きに失したがな」

大澤さんはさっきからひとことも口を開かず、ハンドルを握りながら二人の会話を聞いていた。

弟から電話が入った。

「もしもし。……うん、わかった。……了解」と電話を切った高村は「連中は246を直

進して用賀方向に向かつてるそうです」と大澤さんに告げた。

「オッケー」と大澤さんが低い声で言った。

ミニクーパーはどこまでも続く巨大な屋根のような高速道路を上に見て走る。

高村は横目で安田のようすをうかがいながらこう聞いた。

「親父さんとオフクロさんが握られている弱みって？」

安田はその質問にしばらく黙った。

「答えたくないなら答えなくていいよ」

「いや。どうせわかることだし。……オヤジはさ、捜査情報を翔二に漏らしていたんだ。

それを弟はヤクザたちに知らせていた。だからヤクザたちはその見返りとして弟の悪事に手を貸した。ヤクザたちにしてみれば、翔二の悪事なんて遊びみたいなレベルだもんね」

「なんで、親父さん、そんなことを？」

「簡単だよ。翔二が自分で、『ぼくはこんな悪いことをしている。それを警察に知られたくなかったら言うことを聞いて』って言ったわけだ。オヤジはものすごく苦しんでる。これだけでも復讐はもう十分果たされたのに、翔二はさらに……」

安田は言葉を途中で飲みこむと、小さなため息をついた。

「どうやっておまえはそれを知ったんだ？」

「翔二の様子がおかしくなったからさ。それで、あとをつけたり、あいつの電話を立ち聞きしたり、とにかくいろいろなことをした。ことが大きくなる前に翔二を救い出したかったんだ。でも、もうだめだろうな」

「勇貴を助けてくれた日のことは、エミルから聞いたよ。勇貴が脅された理由はなんだったの？」

「あれは完全に翔二の思い違いだった。何の意味も無かった」

「えっ？」

「翔二は勇貴に何度もあとをつけられたと思いついていた。おまえの弟、あのころ、西新宿にある塾に通っていたはずだ」

「うん」

「翔二が出入りしていたヤクザの事務所がその近くにあったんだ。勇貴は西新宿から歩いて西原の家まで帰っていただろう？ そのコースがさ、途中まで翔二のコースとかぶってたんだ。翔二はおまえという勇貴を何度か見たことがあるから、顔を知っていた。それで翔二は恐れたんだ。ヤクザの事務所から出たところを勇貴に見られたんじゃないかって。」

それで脅した。ところが、プールに勇貴が突き落とされたところにオレが突然現れたもんだから翔二はびびった。次の日かな、翔二に聞いたんだ。なんであんなひどことをしたんだって。そうしたらあいつが言ったんだ。『ぼくをつけ回すからだ』って。オレはあいつに言った。高村の弟はおまえがだれか知らないし、あいつは歩いて塾から帰っているだけだって。そのころからなんだ、あいつの行動を本気でオレが心配しだしたのが。あのときも、翔二をつけていて、ほんとによかった」

「そうだったのか……。それにしても、おまえの弟はなんであんなことを始めたんだ？」

「復讐だよ。自分をいじめてきた同級生たちへの復讐。自分を決して愛することのなかった親への復讐……」

「そんなにいじめられたのか？」

「あいつはオレらと違う小学校だろ。二、三年前まで気づかなかった。私立の賢いやつらだから、翔二へのイジメは陰湿っていうか、ドロドロっていうか、高村、おまえがやってたようなわかりやすいイジメじゃないんだ」

「お、おれはカンケーネエだろ、いまは……」と高村ははまだ消えない罪の意識が痛んであわてた。

「翔二に無理やり聞いたことがあるんだ。あいつ、どんなイジメをされたか話しているうちに泣き始めて、泣いて泣いて途中でからなんにも話せなくなった。あいつには逃げ場が無かったんだ。いじめられていることを家族に告げることは、自分のプライドってゆーか、恥だからさ、できないんだ。しかも、親とのコミュニケーションなんてのもないしな。家では勉強のことばかり言われてたし。牢獄だよ、まるつきり。だのに、オレは何にもしてやれなかった……」

安田は黙り込んだ。

高村がつぶやくようにこう言った。

「安田、ハヤタって高校生はさっき亡くなったんだよ……」

「亡くなったのか……」

ショックを受けた安田は息がふるえてしばらく話すことができなかった。

高村は続けた。

「おまえの弟をいじめたことなんかいいんだ、ハヤタって人は。だのに、おまえの弟のせいで亡くなってしまった。いじめの仕返しって話じゃなくなってきてね？」

「……そうだな……」

「しかもな、ハヤタって人は、エミルのお父さんの子どもで、エミルのお兄さんにあたる人だったんだ……」

「ほんとうか？」

「うそつくか……」

安田は頭をのけぞらせてリアガラスごしに高速道路を見上げた。突然涙でにじんだ視界を両手でごしごしふき取って、それから深呼吸を何度かしてまた前を見た。

しばらくの沈黙ののち、高村がまた質問を始めた。

「なんで親父さんたちはおまえの弟にきびしいの？」

「……オレが小学校に入るくらいかな、そのころまでは親父もおふくろも仲良くてさ、楽しい思い出しかないよ。でも、いつからなんだろ。おじいちゃんが死んで、おばあちゃんも死んで、で、オヤジが単身赴任してからかな。だんだんオフクロが壊れてきた。小学3年か4年のころから翔二にひどく当たるようになった。翔二のこと、叩いてたし。オレ、おふくろの前に立ちはだかってよ、『翔二を叩くな!!』ってかばったこともある……」

「なんで、そうなったんだ？」

「オヤジはだんだん仕事に命みたくなった。警察の仕事だったってよ、正義の味方で悪人

をやつつけるってえのはうわべのことだけで、中じゃ誰が出世するとか、のけ者にされないようにしようとか、そんなレベルでひーこら言ってんだ。小学生と変わんねえよ。オヤジにはもはや夢も理想もない。頭の中は出世の綱渡りで必死さ。むしろ、交番でニコニコ立っている年取ったおまわりさんのほうが理想に燃えてんじゃねえかって思う。オヤジは家のことをぜんぶおふくろに押しつけた。オレや翔二の成績が落ちると、おふくろのせいにして、おふくろを怒鳴りつけた。おふくろは、そんなオヤジのもついで、自分がとつもなく一人ぼっちになった気がしたんじゃねえか。さみしかったんだよ。それでだんだん自分を見失っていった。そうしているうちに、グシャッ……壊れていった……」

「長男はおまえだろ？」

「オレには見切りをつけたんだろ。オレ、学校の成績悪かったし……。そういえば、おまえに貸した、ザ・バーズのデビューアルバム、聴いたか？」

「いまそんな話、してる場合じゃねえだろ」

「あのアルバムの最後の曲さ、オレの今の心境だ。もし、オレに何かあったら、葬式でかけてくれ」

「お、おまえ、な、なに馬鹿なこと言ってんだよ！！ それ以上縁起でもねえこと言った

ら、しょうちしねえぞー！」と高村はうしろを振り向いて怒鳴るように言った。

「ツバ、飛ばすなって」と安田は少しだけほほ笑んだ。

カメさんが最後に伝えてくれた iPhone の現在地は、多摩川に沿って走る道沿いにあった。Google マップには「リバーサイド多摩川ボウル」という名前が表示されていた。だが、そのホームページの URL をクリックするとエラー表示が出る。つまり、そのホームページはもう存在しないということだ。

だから、カメさんはエミルにこう伝えた。

「おそらく、閉店になったばかりのボウリング場かなんかだと思う。まわりは浄水場や大
学だから、静かで暗い一帯だと思うんで、気をつけてね」

天道さんはカメさんが伝えた住所に近づくと、スピードを落として川沿いの道を南下した。クルマの右手が多摩川で、河川敷は広大な闇となって横たわっていた。

やがて明かりのついていない廃墟のような大きなビルが見えてきた。助手席から上を見

上げたセーヌ川によれば、ビルの上には巨大なボウリングのピンが見えたという。

一方、ビルの周囲を観察していたアンジェリーナには、白いクラウンの姿はビルの近辺には確認できず、ビル自体に窓もほとんど無いので人がいるかどうかもまったくわからないということだった。

天道さんは別の道からアプローチしようとハンドルを切った。

「ヤクザたちが汚え手を使って手に入れた物件なんだろうなあ」と天道さんがつぶやくように言った。

ビルの側面を通り過ぎたが、白のクラウンは確認できず、人がいるのかもわからなかった。

「車を降りて見に行くしかないな」と天道さんが言った。

「リバーサイド多摩川ボウル」から数百メートルほど離れた川沿いの空き地にクルマを停め、まずは高村と大澤さん、そして安田を待つことにした。

10分ほどして、ミニクーパーが静かに接近し、音もなく停車した。現れた安田が、みんなに頭を下げ、「すみません」と言うのと、エミルが「久しぶりだね」と笑顔を見せた。

まず大澤さんとセーヌ川の二人が様子を見に行くことになり、二人は「リバーサイド多

「摩川ボウル」に歩いて向かった。

しばらくしてマナーモードにしていたエミルの携帯が震えた。

「もしもし、大澤さん？ ……了解です」

エミルは電話を切った。

「どうだった？」と天道さんがきいた。

「地下駐車場に白のクラウンともう1台、クルマが止まっているそう。非常灯がついているだけで、ものすごく暗いので、逆に気づかれずにすむんじゃないかって。駐車場の入り口は多摩川を背にしてビルの左側の奥にあるそうです」

「ぞろぞろ行くと目立つから、二人一組で地下駐車場に行こう」と天道さんが言うと、みんなは無言でうなずいた。

天道さんとルミさん、エミルとアンジェリーナ、高村と安田のそれぞれが、順番に1分おきに「リバーサイド多摩川ボウル」の地下駐車場に向かっていった。

入り口で大澤さんがみんなを待ち、そこから地下へ続くスロープを降りていくと、どこが壁かわからないほど真っ暗な駐車場の奥のほう、緑色の非常灯の下でセーヌ川が待ちかまえていた。

全員がそろると、こんどはルミさんの出番だった。

ルミさんはコンクリートの床にあぐらをかいて座ると、手を組み、目を閉じ、静かで規則的な呼吸を始めた。非常灯の光だけが青白く浮き上がる地下駐車場のすみっこで、みんなは、じっとルミさんの瞑想を見守った。

やがてルミさんが目を開けた。

ルミさんはささやくように言った。

「ポーリングのレーンがあつて、そのレーンの奥のほうに、二人の男女が座らされているのがぼんやり見える。きっと、安田くんのお父さんとお母さんだと思う。横に一人か二人男が立っている。そして客席側にも男がいる。そして蛇のように細長くて大きなエーテル体が見えた。安田くんの弟だわ。彼には強力で邪悪な霊的存在が取りついている。だから、わたしには蛇のような姿しか見えない。この蛇のような存在は自分の名前はライだとわたしに言った」

「ライ？」と天道さんが聞き返した。

「ええ。エミルが話せばもつとよくわかると思うけど、たぶん古代エジプトで死んだ少女の怨霊だわ。そういう思考のかたまりが届いたの」

「男の人は全員で何人いるの？」とエミルがきいた。

「3人、いや5人……かな」

「当然ながら、ガチではかなわんなあ……」と天道さんがひとりごとのようにつぶやいて腕を組んだ。

そのときだ。

突然、安田が猛然と階段に向かって走り出すと階段を駆け上がった。

全員が呆然と立ちつくす中、反射的に追いかけてしようとした高村の腕を天道さんががっしりとつかまえた。

エミルは「静かに」と高村をにらむと、アンジェリーナに向いた。「アンジー、すぐに警察を呼ぼう。救急車も」

「盗まれた携帯を追ってきたら、友だちと携帯を盗んだヤツらがケンカになったと言うわ」「天道さん、いい考えはある？」とエミルがきいた。

「とりあえず上に行って様子を探る。オレたちには武器は何にもねえから、大澤さんの空手とエミルとルミさんのパワーが頼りだ。もしも相手が二人だったら、4対2でなんとかなるが。その場合は、オレとセー又川くん、大澤さんと高村くんがタッグを組もう。ボー

リングの球は使えるかもしれない。ただ、相手はヤクザだからな……。高村くんにケガさせるわけにいかんし……」

「オレは大丈夫っす」と高村が言った。「安田を助けたいんっす」

「とにかく、警察が来るまでなんとか時間稼ぎをすることね」とルミさんが言った。

「あとは運を天にまかせるしかねえ」と天道さん。

「行きましょう。アンジー、電話をお願い」

エミルに向かってアンジーは親指を立て、うなずいた。

大澤さんが先頭にたち、音を立てないように用心しながら、みんなは真っ暗な階段を一段一段上っていった。

ボウリング場は2階にあった。言いあう男たちの声や断続的な叫び声が聞こえたが、反響が大きく、なにを言っているのかわからなかった。

身をかがめて階段から暗い場内を用心深くのぞくと、目の前に横長の大きなボールラックがあり、エミルたちにとってはおかっこうのバリケードになりそうだった。

音を立てないように腰をかがめてボールラックの背後に移動すると、息を殺してボールラックのすき間から目をこらした。

非常灯の青白い光に照らされたうす暗い場内に、ボウリングのレーンがいくつも並んでいた。まん中のレーンの奥、ピンデッキの手前に安田の両親らしい男女が正坐し、その右横に安田が両手に何かを持って立っている。その足もとで、男が二人、目のあたりをおさえて、苦しそうに転げ回っている。「痛えよお、痛えよお」と叫ぶ声が場内に反響する。

「うるせえ！！ ガキみてえにさわぐんじゃねえ！！ 静かにしてろ！！」と安田ではない男の声が響き、「イテー」という声はびたりとやんだ。

レーンの手前、アプローチのあたりに、3人の男に囲まれるようにして小柄な少年の後ろ姿が見える。安田の弟だ。

男のうちの一人が右手に持った何かを安田たちに向けている。それが何かは男の背中に隠れて見えないが、エミルは銃だと確信した。

男が言った。

「おめえの父ちゃん母ちゃんを殺そうってわけじゃねえんだよ。ただ、お二人さんにシャブを注射してよ、今後のために証拠写真をとらせてくれりゃあそれでいいんだよ。だから、興奮すんなくて。おとなしく、こっちに来いや」

その言葉には耳を貸さず、安田は叫ぶように言った。

「翔二！！ もう、やめろ。これまでにしる。十分だろ。もう親父もおふくろもこれ以上は耐えられない」

すると、声変わり前の高く澄んだ声がこう言った。

「兄さん。どうして父さんと母さんの味方をするの。この人たちは、クズだよ。一生、罪の意識と恐怖の奴隷になって生きていくべきだ」

「とっくの昔にそうなっている。だから、これ以上はやめろ」

「兄さんは知らないんだ、ぼくがどんなに苦しんだか」

「そうだ、知らなかった。あやまる。ほんとうに、あやまる。でも、いまは知っている。おまえがどれだけ苦しんだか」

「うそだ」

「翔二、おまえはオレの弟なんだ。おまえがいなくなると、オレは困るんだ。おまえと一緒に、大人になりたいんだ。お願いだ。これで終わりにしてくれ」

「うそだ！！」

「うそじゃねえ！！」

そのとき、安田の父親が口を開いた。

「翔二。いっそのことわたしを殺せ。わたしにはもうこの裏切りに耐える力は無い。お願いだ、殺してくれ」

となりで母親は流れる涙をぬぐおうともせず、ただうつむいていた。

男が言った。

「父ちゃん母ちゃん、あんたらに死んでもらったら、いままで、坊ちゃんのためにウチらが苦労してきたのが水の泡だ。とくに父ちゃんにはこれからずっとウチらのために働いてもらわないとね」

安田が叫んだ。

「調子のんじゃねえ!!」

「威勢がいいな。てめえ、いいかげんにしろよ」と男がすごんだ。

「オレはな、弟が大事なんだ。オレの命よりも大事なんだ。オレを殺せ。そのかわり、親父とおふくろと、弟を解放しろ」

「おめえ、ばかじゃねえか。石ころとダイヤモンドを交換しろってか。笑わせんじゃねえ!!」

男は安田の弟に顔を近づけるとこう言った。

「なあ、カミさん。あんたの兄ちゃんはききわけがねえ。このままじゃらちがあかねえ。兄ちゃんにあの世に行ってもらいたいところだが」

安田の弟は返事をしなかった。

父親が叫んだ。

「やめろ！！ もしも翔一を殺したら、オレも死んでやる。そうしたら、おまえたちにとつては元の木阿弥だろう」

「さすが警察の署長さんだ。頭がいいな。じゃあ、こういうんじゃない？ あんたが自殺したら、あんたのかわいい女房とこの翔二さんの二人をオレたちが一生葉漬けにして生き地獄にたたき落とすってのは？ それでも死にますかい？」

安田の父親は頭を振り、こぶしで自分のひざをたたいた。

そのとき、安田の母親がぼつりと言った。

「わたしを……殺して。……翔二、ごめんね、わたしはひどい母親でした。だから、殺して。それでおしまいにして」

「夫婦そろってまぬけなことばかりぬかしやがって！！」と男はイライラしはじめた。「それじゃ、何の意味もねえんだって、さつきから何度教えたらわかるんだよ。ここは大丈夫

かい？」と男は左手の人さし指で自分の頭を指した。

「おい！！」と男は隣に立っている短髪の屈強そうな男にこう命じた。「組に電話しろ。やっかいな飛び入りを片づけてえから、10人ばかり応援を寄こせって言え」

「はあ」と男は言うのと携帯を上着から取りだして電話をかけた始めた。

このままではダムが決壊するように、一気に恐ろしい事態へとなだれ落ちていく。エミルはそう思った。どうすればいい？ そうだ、翔二の力を逆に利用すればいい。エミルはそう思った。

エミルは呼吸を整え、この目の前の物質世界を意識しつつ、非物質の次元をも同時に認識するバイロケーションの状態に素早く入った。リリーが教えてくれたテクニクだった。

翔二の背後に、青白い蛇か巨大なナメクジを思わせるエーテル体がぼうっと浮かび上がった。あの存在が翔二の悪意の炎に油を注ぎ、風を送り込んでいるのだ。まずはあの邪悪なエーテル存在を救い出さなくては。その後、翔二に残された力で男の銃口をそらそう。それにはリリーの助けがある。瞬時にエミルはそう考えた。

エミルは蛇のような、ナメクジのような霊に語りかけた。

——あなたはだれ？

——ライ。

エミルはその靈にさらに近づいた。蛇のような、なめくじのような醜悪な形の向こうに、その靈が生きていた時代がパノラマのように現れた。そしてその時代に生きていたライという名の存在の姿も。それはおそらくエミルとほとんど年齢の変わらない少女だった。そして、彼女の怒りの源となった事件が早送りの映画のようにして見えてきた。エミルはさらに集中した……。

「カミさん」

しびれをきらしたように、男が弟に向かって言った。

「あんたの兄貴もシャブ中にしちまっていいかい？」

残る二人のヤクザの男がジリジリと前に進み出た。安田が叫んだ。

「来るな!!」

安田はスプレーを持った両手を振り上げて威嚇した。

「翔二、聞け。ハヤタシュウトっていう高校生な、きょう、亡くなった。おまえをいじめたことなんかないのにな。おまえのせいで亡くなった。翔二、彼はな、エミルのお兄さん

だったんだ」

安田の弟のからだがりびりびりと電気が流れたように一瞬振動した。

シュウトの名字はハヤタ？ ミサと同じ名字？

シュウトはミサの恋人ではなく兄だったというのか。

兄が言ったことが意味すること。それは自分はとりかえしのつかない過ちをおかしたということだ。翔二の脳は激しく震えた。

「だから、もう、やめろ！！ これでおわりにしろ！！」

エミルは重なり合う物質の次元と非物質の次元の両方をしびれたような頭で見つめながら、心の力を振り絞った。

そこはルミさんが言ったように古代のエジプトだった。

ライという名の少女が男たちによって家から連れ出されていく。ライは自分の身になにが起きているのが理解できない。

ライは助けを求めて叫び、手足をばたつかせ、からだをよじって暴れるが、両親はひとことも言葉を発せず、男たちが我が子を力づくで連れて行くのを無表情に見ている。ライ

は両親がなぜ助けしてくれないのか理解できず、それは激しい怒りへと変わっていった。

ライは縛られて荷車に乗せられていく。大理石がキラキラまぶしく輝く神殿があった。建設が始まったばかりの神殿のようで、滑車のぶら下がったたくさんの木の柱やロープなどが見える。

その神殿からほどないところにある屋敷で、ライは奴隷として暮らしはじめた。

ライがエミルと同じ年頃になったとき、ライの主は毎日、月の出とともにライに月への祈りを捧げさせ、さまざまな魔術の儀式をおこなった。そして満月の夜、ライは柱に縛りつけられた。もがくライのからだを毒蛇がはった。ライは苦しみ、死んだ。

その恐怖、そして両親への恨みと一体化したライは、この地上でエーテル体のまま時を越え、さまよっている。

そしてエミルにははつきりとわかった。ライは翔二の前世でもある。時間は直線的には進まない。だから、ライと翔二がともに存在してもよいのだ。

そして、ライの両親は、翔二の両親の前世であった。

前世とは、より正確に言えば、時空を越えて重なり合う魂だ。同じ樹の隣り合う葉だ。数秒のあいだに、これだけの情報がエミルの意識に流れ込んだ。

エミルはライという名の少女に呼びかけた。

「もうこれでおしまいにしましょう。さあ上を見て、あなたを女神が迎えに来るわ」

男が言った。

「カミさんよお。あんたの父ちゃんと母ちゃんは組織にとっては宝もんだ。でも、あんたの兄ちゃんは一銭の価値もねえ。こんだあ、マジに聞く。殺しゃあしねえ。足にちよつとケガしてもらうだけでいいんだ。オレのハジキでほんのちよつとだ。ちよつとばかり痛い眠り葉って程度だ。どうすか？」

安田の弟はうつむいた。心を決めたのか、小さな両手をグッと握りしめると、下を向いたまま言った。

「わかった」

「翔二、よせ！！ 家族みんなでやりなおそう！！」

安田が叫んだ。

「号令はぼくにかけて」と弟は言った。

「んなら、ご自由に」と男は答えた。

「母さん、ぼくはね、小さいぼくをお風呂に入れてくれたとき、母さんが歌ってくれたこの歌をね、ときどき、思い出すんだ」

そして澄んだボーイソプラノの声で唱え始めた。

「いち、にーい、さーん、しーい、ごーお、ろーく……」

エミルはリリーを呼んだ。

リリー、リリー、リリー……このライという名の魂を救い出してください。リリー、リリー……。

するとハトホルが空中に姿を現した。リリーはハトホルに化身したのだ。2本の野牛の角のあいだに輝く円盤がのった冠をかぶり、真っ白な筒型の衣服を着ている。黒く縁取られた大きな目とわし鼻、首には幾重ものビーズの飾りが巻かれている。ハトホルは青白い蛇のような存在に近づくと、そのぬらぬらした表皮に指を触れた。するとその蛇のようなものは、一瞬にしてライという名の少女に姿を変えた。

ライのからだをこんどは黒い煙のようなものがグルグルと回り始めた。ハトホルはその指をライの頭の中にスッと差し込んだ。するとライの顔に安らぎが浮かんだ。黒い煙はさ

らに量を増し、速度を速めてライの足からのど元までをグルグルと回転しておおっていった。

ハトホルは指をライの頭から抜いた。同時に、黒色の煙はすーっと消え失せ、ライはみずみずしい笑顔を浮かべた。すると中空に銀色に輝く球体が現れ、ライを光で包み込むと、ライは光ごとあつという間に消え去った。

邪悪な影響は失せた。あとは憑依から脱した翔二の心に賭けるしかない。翔二が魔力で男の銃口をそらしてくれることを願うだけだ。

エミルは、ライが翔二に与えていた魔力を再び翔二に与えてくれるようリリーに願った。するとリリー、すなわちハトホルは、翔二の頭の中に指を差し入れた。

翔二の頭が一瞬、銀色に輝いた。ハトホルがいつときだけの力を翔二に与えたのだ。

エミルは隣のルミさんを見た。ルミさんは小さくうなずくと、目を閉じ、胸の前で手を組んだ。ルミさんはエミルの意図を完璧に悟っていた。

男の銃口が兄を向いて火を吹くことがないように……。エミルも祈った。

「なーな、はーち、くーう、じゅー……おまけのおまけの きしゃぼっぼ……ぼーっとなっ

たら、あがりましょう……ぼー……」

そのとき男が叫んだ、「やめてくれ、カミさん、かんべんしてくれ!!」

男の手の中にある銃の銃口は安田ではなく、弟の翔二のほうを向いていた。

「頼む!! カミさんのことは撃たねえって言ってんだろうが」

男は叫んだ。だが、金縛りにあったかのように男のからだは身じろぎひとつできず、男の意志に逆らって銃口は翔二の心臓を狙った。

翔二が澄んだ声で叫んだ。

「もうおわりにする!! ぼくは死ぬ!!」

「おめえを殺したらオレが親分に殺される!! カミさんよ、ふぎけんのはよしてくれ!!」

男が持つ銃は翔二に向けられたままぶるぶる震えた。

翔二から魔力を奪って!! とっさにエミルはリリーに向かって思念を放った。

ハトホルは翔二の頭の中から指を引き抜いた。

冠の円盤を金色に輝かせながら、ハトホルは空中に浮かんだまま、空気に溶け込むよう

にして姿を消した。

「ダンッ！」という音がエミルの耳を引き裂いた。

銃を持っていた男が前のめりに倒れていくのが見えた。

翔二は立ったまままだ。間に合った、そうエミルは思った。

大澤さんと高村と天道さんとセー又川が全力で駆けていく後ろ姿が見えた。手に何かを持っている。ボーリングの球だ。

視線の先で男たちもみ合っている。何が起きているのか、エミルの頭は一瞬混乱した。立ち上がり、レーンに向かって走った。

天道さんとセー又川が坊主刈りのヤクザにまたがって動きをしっかりとおさえこんでいた。

大澤さんと高村ももう一人のヤクザにまたがって同じようからだをおさえこんでいた。ルミさんがどこから持ってきたのか、痴漢撃退スプレーをふたりのヤクザの顔面に押しつけるようにしてかわるがわる吹きつけていた。「いてー」「やめてくれー」とヤクザたちは悲鳴をあげ続けた。

押さえ込まれたその二人のヤクザの間に男がうつぶせに横たわり、ハーハーと息を荒げていた。足の甲から血が流れ出ている。そばに黒い鉄の塊がころがっていた。銃だ。翔二が自分を狙って引き金を引かせた銃の銃口が瞬時に下を向き、その銃弾は男の足を打ちぬいたのだ。

エミルが叫んだ。

「アンジー！！ 救急車！！」

「大丈夫、もうすぐ来るわ」と言いながら走ってきたアンジーは男の血まみれの靴をぬがせ、それから靴下をぬがせた。

「あらあら」と言いながら、ポケットから脱脂綿を出して血が噴き出しているあたりにあてがい、ポケットからこんどは包帯を出すとぐるぐるに巻き始めた。

男の顔色は青ざめ、痛みで半分気を失っていた。首に描かれたタトゥーの狐が、苦痛を訴えるように激しく上下していた。

エミルはうす暗いボウリング場を見まわした。安田の弟はどこだろう？

レーンのまん中あたりで、安田の大きな体が弟の小さな細い体をしっかりと抱きとめているのが見えた。その二人をいま、母親がだきしめ、そして3人を包み込むように安田と

同じ大柄な父親が抱きしめた。まるで鎖でつなぎとめられた者どうしのよう、引き離すことなど誰にもできないように思えた。

遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

5月7日。

あの夜から1週間がたち、きょうから学校も始まった。

安田家の事件はテレビや新聞を連日にぎわす大スキャンダルとなった。

警察庁から出向の警察署長が、脅迫を受けていたとはいえ、捜査情報を暴力団に定期的に漏らしていたのだから当然のことだった。

安田の父親も、母親も、そして翔二も逮捕され、留置場に収容された。

アンジェリーナの話では、翔二は大人と同じ裁判を受けた後、少年院に入ることになるだろうということだった。事故死とはいえ、隼田守杜という一人の少年が亡くなっていることもあり、事件は重大だとして、少年院に長く収容されるのは確実視されていた。

父親は逮捕後、社会的地位のすべてをあっという間に失った。実刑はまぬがれず、少な

くとも数年は刑務所にいることになるだろう。母親は父親の証拠隠滅を手伝ったとされたが、執行猶予のついた軽い刑になるだろうと予測された。

一方、鈴木は家庭裁判所で裁判がおこなわれる予定で、最終的に少年院に送られ、比較的軽い処分済みそうだったことだった。

安田は毎日のように3人が留置されている原宿警察署まで面会に通った。

父親も母親も元気で、つき物が落ちたような妙な爽やかさを感じさせると言っていた。

父親は「みんなで生まれ変わって、こんどは楽しい家族になろう」と話したそうで、母親も「自分が釈放されたら、お父さんと翔二がいつ帰ってきてもいいように、あなたと二人でいつもきれいで暖かい家にしておこうね」と言っていたことだ。翔二のほうは暗く、落ち着きもなかったが、安田が面会に来るたびに必ず涙をこぼし、兄への感謝の言葉をぼつりと話すそうだった。

安田によれば、翔二は、あの計画を小学5年生の頃から準備していたのだという。ちょうどそのころから自分が他人とちがってとても不思議な能力を持っていることを自覚しはじめていた。その能力が日々強まっていったことも実感していた。その力と父親の社会的立場を賢く利用して、自分をいじめ、無視してきたかつてのクラスメートたちと、自分を

虐げてきた両親に復讐を果たそうと考え、実行に移した。父と母の社会的破滅を見届けたら、あの狐のタトゥーの男に銃で自分を撃たせて死ぬつもりだったという。自分の誕生日に。

狐のタトゥーの男が持つ銃の銃口を自分に向けさせたとき、こんな声が心臓のあたりに聞こえてきたと翔二は兄に言ったという。

「死んではいけない。死んではいけない」

そう繰り返した後、その声はこう言った。

「男の銃で男自身の足を撃ちなさい。男の銃で男自身の足を撃ちなさい」

なぜそんな声が聞こえたのか、わからないと翔二は言った。

エミルにはもちろんすぐにわかった。ルミさんだと。あのとき、エミルの意図を理解したルミさんが翔二に言葉を送ったのだと。

安田は言った。翔二の世界はとても狭い。翔二の世界を作りあげているのは学校と家と、そして受験だけだ。学校と家は翔二にとって牢獄でしかない。ただ受験という競争のフィールドだけは、翔二の独壇場だった。勉強に励み、最難関の私立中高一貫校に合格した。それは母親以上に翔二にとって誇らしいことだった。だが、ただそれだけだ。試験が終われ

ばただ虚しさだけが残った。それがますます計画実行に翔二をのめりこませることになった。

安田に言わせれば、翔二よりも鈴木のほうがまだ広くバラエティ豊かな世界を持っている。だが、翔二の息が詰まるほど固くて狭い世界からは、その世界の向こうにまだ「外」があることが見えなかった。まるで鉄仮面をかぶって世界を見ているのと同じだ。そうなのだ。いつの間にか、翔二は鉄仮面をかぶってしまったのだ。

安田は後悔する。翔二にもっと音楽を聴かせればよかった。映画も見せればよかった。マンガも読ませればよかった。小説も。そうすれば、学校なんてちっぽけな世界だと知ることができただろうと思うのだ。

少年院で鉄仮面をぬいでこい、翔二。安田はそう願った。

その安田はあの夜の翌日からプラーハウスで暮らし始めた。

安田の屋敷にはマスコミが押しかけたが、こわもての天道さんと日本語がわからないふりをしたセーヌ川とで安田の必要なものを何回かに分けて家から運び出した。

安田の学校生活は表面的には変わらなかった。

もちろん生徒たちはみな、安田がマスコミをにぎわしている事件の当事者の息子だと知ってはいたが、もともと安田は人気者でみんなに好かれていたし、それに高村やエミルが安田をガードしていることも知られていたから、陰ではひどい噂もあったかもしれないが、初日はなにごともなく過ぎていった。

高村の目には、やはり安田は普段からくらべると口数も少なく、元氣もなかったが、つとめていつもと同じように振る舞おうとしているように映った。

ときおり、髪をうしろでまとめたアンジェリーナこと安藤梨伊菜先生がそれとなく高村と安田の3年2組の教室の前を通っては様子をうかがっていた。

一方のエミルが教室に顔を見せることはなかった。

そのエミルは5月2日には隼田守杜の通夜を手伝い、そして翌日の告別式にはママと一緒に参列した。二十年ぶりに再会したママと隼田さんは抱き合って泣き崩れた。エミルも美紗も涙が止まらなかった。

捜査の過程で明らかになった、隼田美紗と翔二の関係、そしてなぜ隼田守杜が復讐のターゲットとなったのかについては、隼田さんに警察から説明があった。

エミルが隼田さんから聞いたのはこういう話だった。

翔二は美紗に恋心ともいふべき感情を抱いていた。

翔二が小学校の5年ごろ、二人はウサギの飼育係でいっしょになった。そのときから、美紗の笑顔が翔二にとっては一種の救いとなったのだという。翔二の内面までは警察はことまかく教えてはくれなかったが、翔二の思いは時とともに募っていった。

悲劇は、美紗が兄のことをシュウトと名前と呼んでいたことに起因した。

中学に入学して間もない頃、校門を出た翔二は、「シュウト！」とだれか呼びながら駆けていく美紗の姿を偶然見かけた。美紗が駆け寄った先にはバイクにまたがった男がいた。美紗はそのバイクのタンデムシートに大胆にもまたがると、エグゾーストノイズとともに走り去った。翔二はそのシュウトと呼ばれた男が美紗の恋人だと思い込み、激しく悲しみ、そして激しく怒った。

翔二は組織に命じて、そのシュウトの携帯電話の番号を調べさせた。組織の若い衆が、中学の校門での何度目かの待ち伏せの末に、再び美紗を迎えに来たシュウトを見つけ、あとをつけた。シュウトは美紗を自宅で降ろすと、バイト先のコンビニに向かった。組織の者は、こんどはコンビニでのシュウトのバイト仲間を帰宅途中に脅し、シュウトの携帯の

電話番号を聞き出したのだ。

シュウトが美紗の恋人であるという全員の思い込みと、シュウトという名前だけで組織内での連絡が行き交ったせいで、だれもが、もちろん翔二も、シュウトが美紗の兄だと気づくことはなかった。電話でシュウトを呼び出した鈴木はその姓がハヤタだと知ってはいたが、一方で、美紗の姓のことは知らなかったのだ。美紗は美紗であり、カミさんがクルマの中から指さした「あのコ」でしかなかった。

そして、あの破滅の夜が訪れたのだ。

そして5月7日。

きょうの夕食は7時からだった。

全員が集合した。

佐藤さんがつくったごちそうを、みんなは調理室から運んで並べ、そして「いただきます」といっせいに食べ始めた。

「あ、そうだ」とセー又川がエミルに言った。「1日の夜、わたしたちが出かけるときに、

村松さんがエミルに何か言いましたでしょ？ あのスピリチュアルなアドバイスは役に立ったのですか？」

エミルはキョトンとして、「え、そんなことあったっけ？」とセーヌ川の顔をジロリと見たあと、「ああ、あれね」とおかしそうな顔をしてはしを置いた。

「あのとき、村松さんが言ったのは、明日の朝ご飯には日本一おいしい海苔をつけるから楽しみにしていなさいってこと。だから、ありがとうございますとお礼を言ったの」

セーヌ川が笑いをこらえながら言った。

「村松さんらしい素晴らしい応援メッセージですね」

そのとき、廊下を2人分のスリッパの音がした。

食堂のドアが開き、高村兄弟が顔をにゅっと突き出した。

「どうぞ」とエミルが言い、「連絡もしないで来ちゃって、ごめん」と兄と弟は空いていた安田の隣に座った。

「キミたち、いちいち『連絡しないで来ちゃって、ごめん』って言わなくていいから。いつでも勝手に来ていいんだよ」とエミルが言った。

「うへ」と兄がエミルに軽く頭を下げた。

それから兄は「借りてたCD、返す。サンキューな」と弟のしよっていたデイパックの中からCDを1枚取り出して、安田の前に置いた。

黒の背景のジャケットのまん中には、60年代のアメリカの人気バンド、ザ・バーズの5人のメンバーが魚眼レンズで撮影された写真が印刷されている。

「最後の曲の歌詞、翻訳してみた。聞く？」

「読んでみ」と安田が言った。

「おう」と高村はジーンズの尻ポケットからクシャクシャになった紙を取り出し、朗読を始めた。

《わたしたちはもう一度会いましょう。

どこで、いつなのかはわかりません。

でも、わたしたちはもう一度会いましょう、晴れて天気の良い日に。

笑い続けてください あなたがいつもそうしていたように

青空が広がって黒い雲が消えるその日に

わたしたちはもう一度会いましょう、晴れて天気の良い日に。》

「どうだ、翻訳しちゃったぜ、すげえだろ」と兄は胸を張った。

「まあな。かなり直訳っぽいけどな」と安田はニヤリと笑った。「でさ、『笑い続けてください』はなくて、『微笑みを忘れずに』って感じだろ」

高村はムツとして「ま、そうだな。笑い続けたら疲れるもんな」と言うと、エミルがクスツと笑った。

「高村、ありがとな」と安田が言った。「この歌詞といっしょだ、いまのオレの気持ちは」「ああ」と高村は答えると、下を向いた。

弟が横から高村の顔をのぞき込み、「あれ、兄ちゃん、泣いてるの?」と何の気なしに言うと、「ばかやろ!」と兄が弟の顔を払いのけた。

食堂がシンとした。

すると高村の弟が場を取りなすように口を開いた。

「そうだ、エミルさん、さっき、そこでリリーさんに会った」

「ええっ!」と全員が驚いて声をあげた。

弟は意外な反応にとまどいながら、「階段の踊り場のところにいましたよ。ぼくがおじ

ぎをしたら、笑っておじぎしてくれました。リリーさんって、エミルさんのおばあさんな
んでしょ？ 目がとつても青かったです」とエミルに向かって言った。

エミルはおかしそうにほほ笑むと、こう言った。

「そうよ、リリーはわたしのおばあちゃんよ。いえ、おばあちゃん以上の存在。あなたに
も見えるのね？」

「えっ？」と弟は聞き返した。

「リリーは何年も前に亡くなっているの」

弟はポカンと口をあけたまま、しばらく身じろぎもできなかった。

エピソード

「ねえ、なんでエミルさんは自分のことを『オレ』って言うの？」と弟が聞いた。

兄の部屋で、二人は豪華な西新宿の夜景を見ながら、安田が「あげるよ」と言ったので結局持ち帰ったザ・バーズのデビューアルバムを聴いていた。

「おれのせいなんだ」と兄はポツリと言った。

「おれ、いじめっ子だったんだ。エミルをいじめてたんだよ。最低だな」

「ぼくには優しかったけどね」

「……さみしかったんだな、きっと。母さんが死んで、ポカッと、家にも、んでオレの心

にも、なんか穴が開いたみたいになってさ。たぶん、かまってほしかったんだよ。あまえ
たかったんだよ。だから、誰でもよかったんだ、ただ誰かをいじめたかったんだ。そうし
たら、おれがさみしくて死にそうだってことが世界中に伝えられると思ったんだ。そのこ
ろはそんなこと、考えてもみなかったけどさ、いまは、そう思う。

親父を助けてくれたから、おれは Emil をいじめなくなつた。つーかよ、親父が心配で、
イジメどころじゃねっつー感じだな。でもさ、鈴木たちは Emil を餌食にしてた」

「どうして Emil さんなの？」

「目立つからさ。それに Emil はいじめられてもがまんしてた。鈴木は、たぶん、Emil
のことを人間としてみていなかった。犬とか猫みたいに思った。アホだからな、あいつ。
人間だったら刃向かう。だけど Emil はおとなしくいじめられるがままになるから、いつ
しか、Emil が人間だってことを忘れたんだ、アホの鈴木は。」

でも、人生は不思議っつーこと？　いまや Emil と鈴木の立場は逆転どころか、こーん
なにかけ離れちまった」と、兄は両手をグリーンと広げた。

「でさ、兄ちゃん、なんで『オレ』って Emil さんは言うの？」

「オレが知ってる範囲で言うと、迫力つけるためっつー話。『あたしになにすんの』って

言うより、『オレになにすんだ』って言うほうが迫力あるだろ、女子の場合、いじめられないようにするには。なんでも、あいつのお婆ちゃんがそうアドバイスしたらしい」

「リリーさんが？」

「ちげえ。おふくろさんのほうのおばあちゃん。岩手の三陸におふくろさんの実家があった。あの津波で家は流されたらしいけど。そのおばあちゃんはふだんから自分をオレって言うてるらしいんだな。男も女もないってな。英語じゃ男も女もアイだべって。それでオレって自分を呼ぶようになったんだ、エミルは」

「ふーん……。それにしても、能流登家にはわからないことがまだいっぱいあるね。ほんとわからないことだらけ」

「次回にご期待ってどこか」

「なんか、映画のシリーズみたいだね」

「んだな」

そのとき、流れ星がオペラタワーの向こう側で光の弧を描いた。弟はあわてて願い事をつぶやいた。

兄ちゃんよりも背が高くなりますように。

エミルと並んで立つ、エミルよりちょっとだけ背の高い自分を思い描き、弟は幸せな気分になった。

(太田穰)